
女鑑
第十八年
第九號

女學部新設

新學期開始

第一號 十月五日發行

九月三十日迄 **入會金全免除**の特典あり目下入會の最好機なり。

新設趣旨

本會は中學講義錄の發行に從ふ事既に五年進歩せる通信教授法は自宅獨習の目的を達せしめ得べきことを信じ今回更に女學部を新設して實用女學講義錄を發行し女學校に入ること能はざる人の爲に女子必須の學科を遺憾なく講習せしめんとす

講義錄

女子唯一の目的は家庭の主婦たるに在り本會講義錄は高等女學校令に準據するは勿論勉めて實用に重きを置き以て圓滿なる家庭の主婦を作ることを期す

△講述最も**平易**にして懇切、總ふり假名の**談話体**なれば何人も解し難き憂なきことを信ず

實用女學講義錄

規則書 申込次第直に進呈す

學科組織

本會は多年の經驗により短かき時間と少き學費とを以て修了せしむべき組織とせり即ち講習全期を一ケ年半となし之を三學期に分ち毎月講義錄二冊を發行す講師は皆各科專門の大家のみ也。會費は最も低廉、都會一ケ月の遊學費を以て優に卒業するを得べし

女學雜誌進呈

本會々員は講義錄を受くるの外毎月女學雜誌『姬百合』を無料進呈せらるゝ大特典あり『姬百合』は現代知名の女子教育家及び專門大家の訓話學說及純潔なる家庭小說を收むるの外會員諸孃の文章和歌等を斯道各家の選評を經て掲載すべし。

東京神田駿河臺
電本局三千四番

大日本國民中學會女學部

女鑑第十八年第九號目次



獨逸國ロールメチンシンス會社製品
皮膚特効美白新劑
（一名にきび知らず）

濃厚なる◎◎◎
化粧液 チプリ

○本品は濃厚なる原液なれば三倍程の水を加へ常に御用ひあれば自然白色艶麗の美顔たらしむる事を保證す

○本品は最る「ニキビ」「ハタル」一日ニヤケ」其他「顔のアー」に奇効あれば朝夕洗面後手の掌に四五滴たらして塗布せば重きも十日輕もは五日位にて効あり

本品の縮圖



小瓶 二十五錢

○本品の効能顯著なる爲め遂に政府印紙を貼用するに至れり本邦に於て化粧水に印紙を貼用せるは本品を以て嚆矢とす

○市内は勿論到る處の賣藥小間物化粧品店にあり品切れの節は送料八錢（四瓶迄）相添へ代理店御へ注文あれば直送す

日本一手販賣 東京日本橋區本石町四 松澤 常吉

避暑がへり



第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領



登録商標
壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白さに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「薫れしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特長

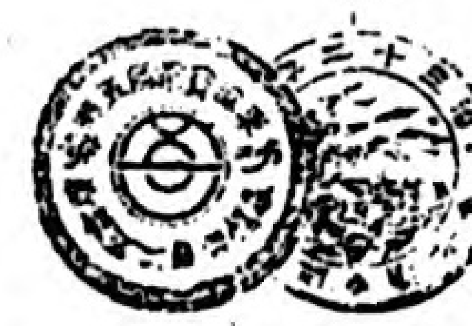
綠の繪、紅彩蝶番ひ鑵詰入 別製鑵詰 五拾錢 大袋 二錢 小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗ひに御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標
西洋色白くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG POWDER
壽美禮あらい粉



五二會品評會 功勞賞牌



THE BEST MAGE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入

壽美禮れしろい



ヴロイオレツト水製

ねり製 定價（大壜二十錢 小壜十二錢）
水製 定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）
錫栓附乳白硝子壜入

東京東兩國元町（兩國橋際）
製造本舖 壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

醬油釀造界の一大革新

最良醬油



●資本金—壹千萬圓

釀造元 日本醬油釀造株式會社

東京深川區小名木川通 電話浪花(長)三七七三番 一五九五番

特色

製造淸潔

品質佳良

黴を生ぜず

價格低廉

特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醬油を釀造販賣す

特約販賣所

東京日本橋區北新堀町 合資會社日本醬油東京販賣所 電話浪花(長)一四六番

其他 東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

岡部子爵家庭

子爵岡部長職君　令夫人坻子君



令息嬢

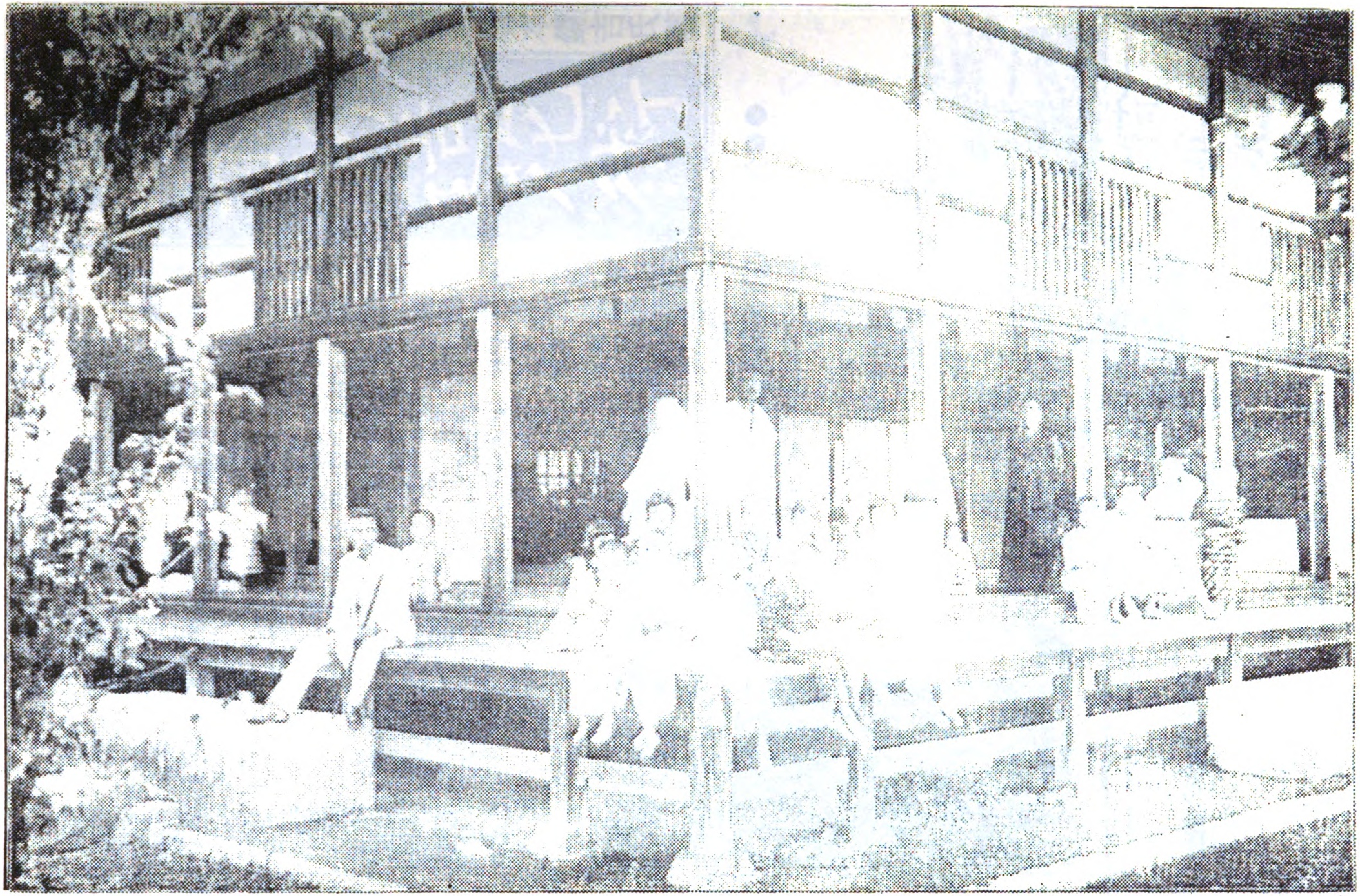
右より
長建君、豊子君、長世君、榮子君、
長量君、長剛君、長擧君、温子君、

一むかし



牧野男、本野、秋川三氏令夫人

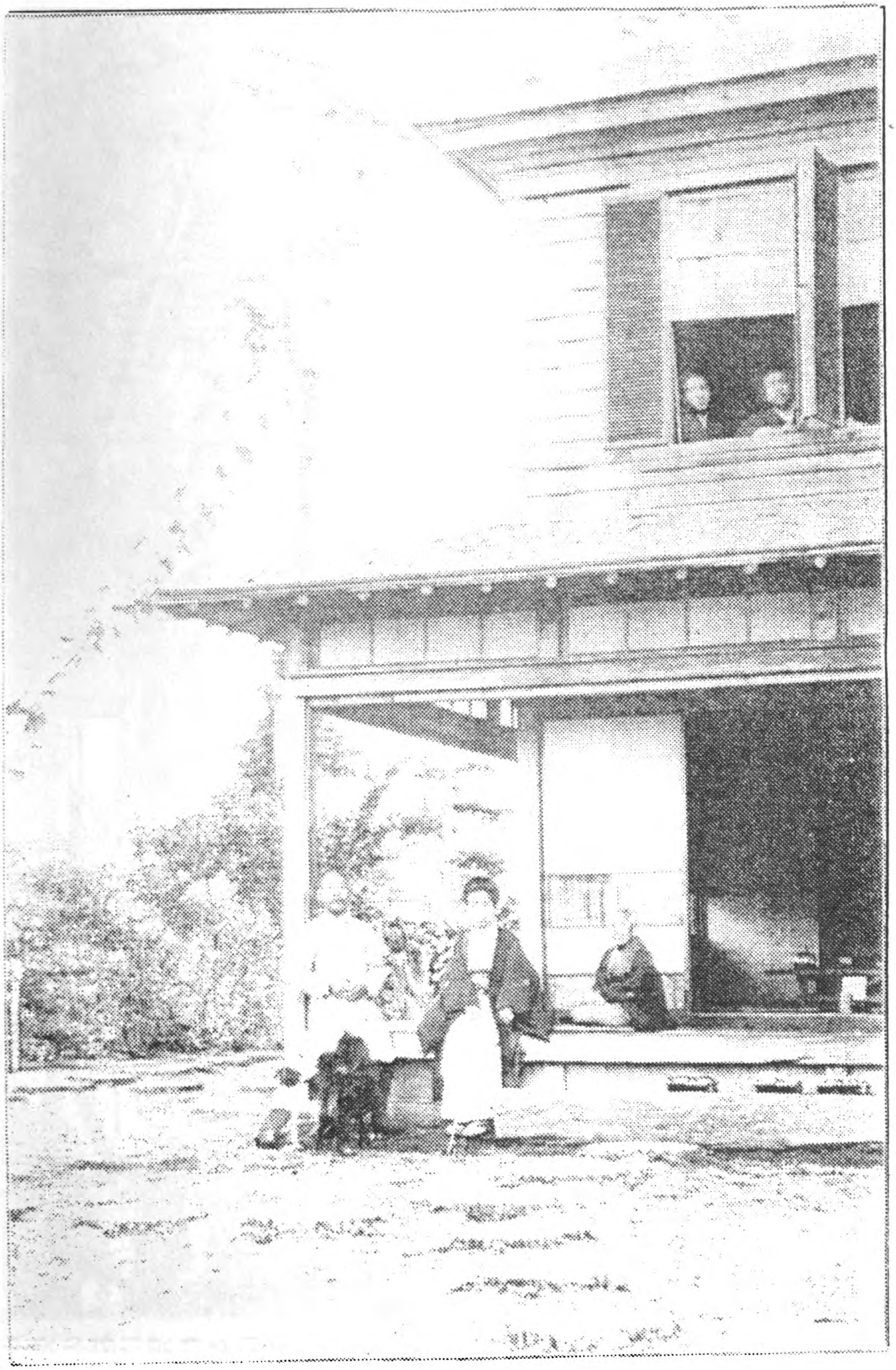
妙義に於ける轉地修養會



中央の柱に凭れるは本誌撰者佐々木信綱君

九段 長谷川寫眞店撮影

北海道別荘に於ける鳩山氏



毛髮の發生をよくし脫毛を止める毛髮化粧液として歐米に大評判の流行品は佛國「ビベール」會社製造の「ペトロール、ハーン」です毛髮を大切にせらるゝ淑女紳士の愛用を賜はらんことを願ふ

大壜　貳圓貳拾錢

小壜　壹圓五拾錢

ペトロールハーン



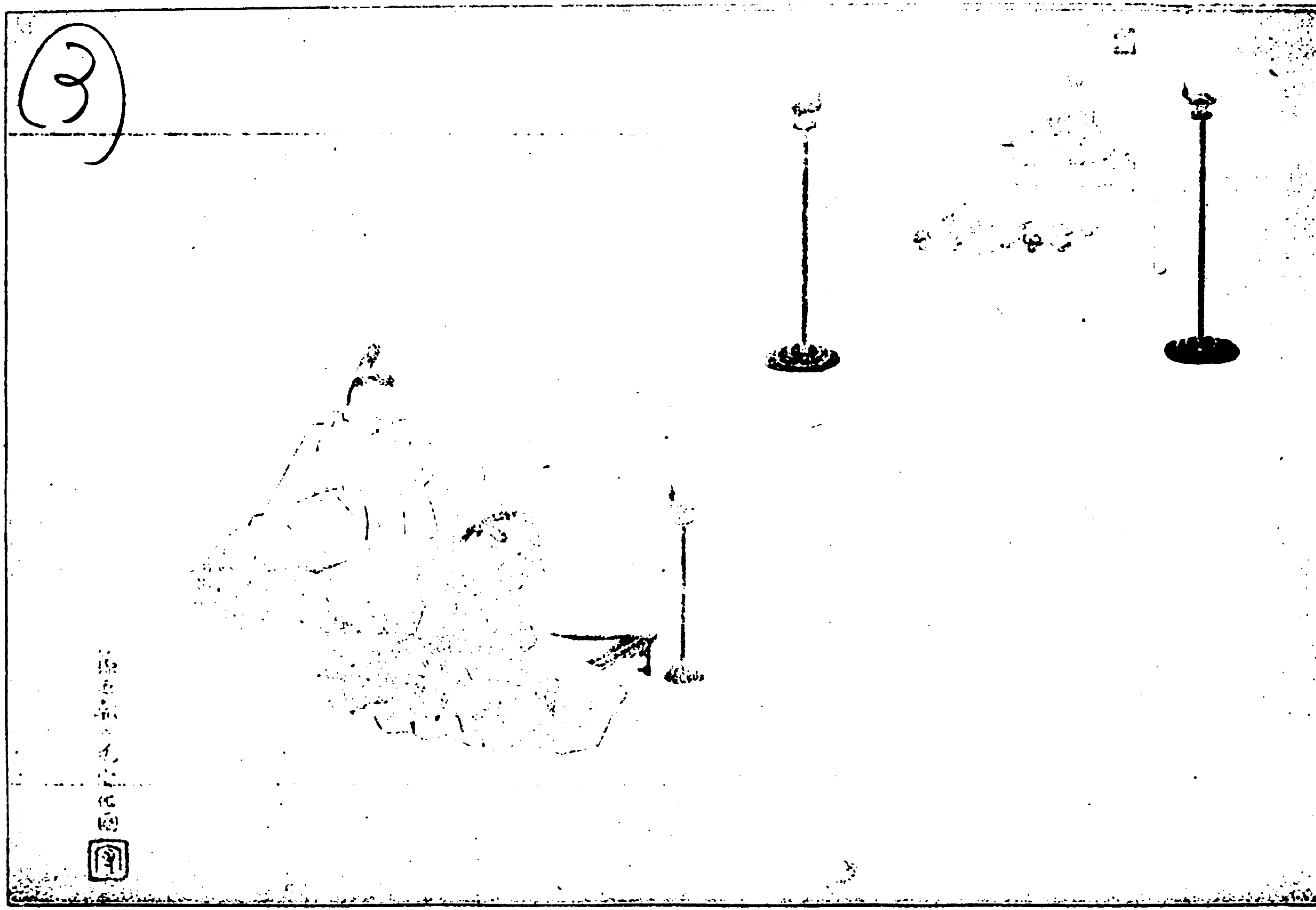
◎舶來東髮用櫛及化粧品一切取揃申候

「アクム、フレンチ、マッサージ、クリーム」一手販賣店

京橋區尾張町二丁目二十五番地電話新四三三五

めでたや

子爵 入江為守君揮毫



中川愛水珍蔵

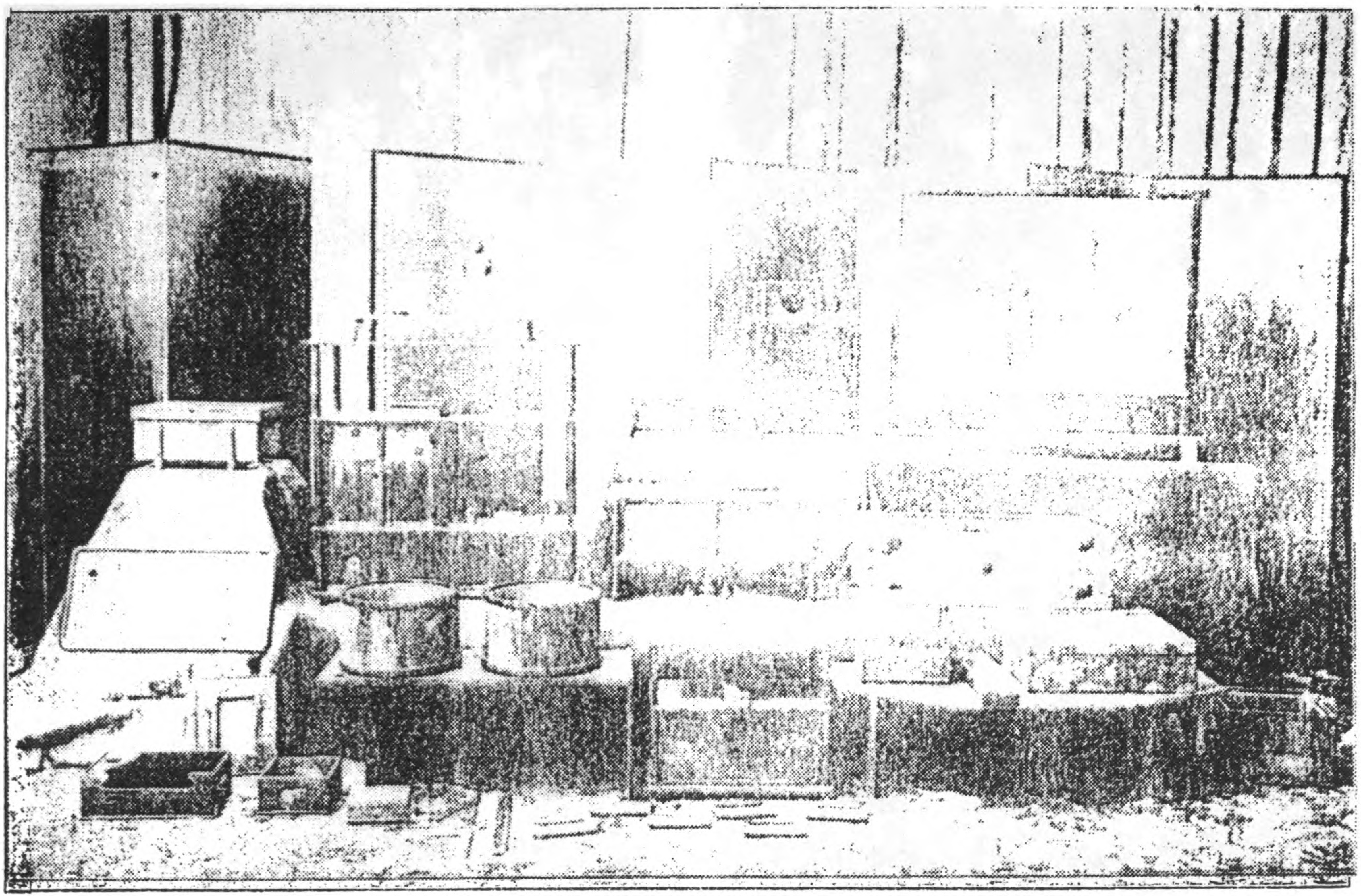
鉢うゑ



井伊直方君撮影

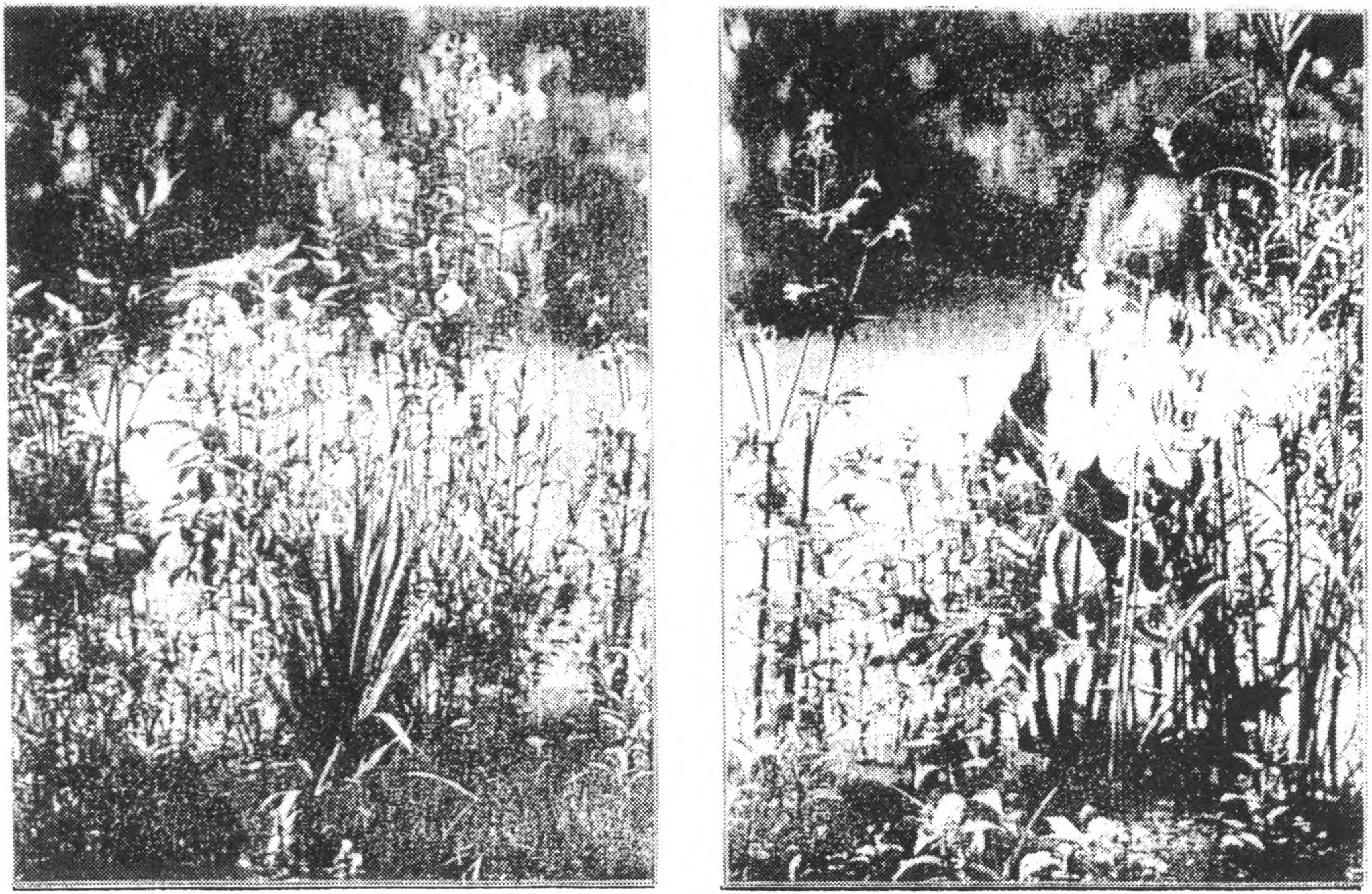
千古不朽の最好紀念

福井丸船体にてつくられたる諸器具



精神教育絶好の参考品として日比翁助氏の創意に成れるもの(三越呉服店作品)

秋くさ





本誌の本領

◎本誌は貞淑なる婦人を作るにありて、貞淑なる婦人に讀まるゝことを名譽となす

◎本誌は婦人の常識を養ふべく、時代に後れず、又時代に惡く那染まぬ注意をなす

◎本誌は圓滿なる家庭には缺くべからざる讀物として、文字ことごとく淸らかなり

◎本誌は徹頭徹尾眞面目にして、小説の文句の中に於てもテヨダハこと葉を嚴禁す

◎本誌は齒の浮くごとき文句をならべて讀者の心事を輕薄に導く等のことをなさず

◎本誌は婦人の美點を發揮するに力め、婦人の弱點に向つては戒飾を怠らざるべし

◎本誌は投書の文字にも注意して、筆蹟の婦人らしからぬ自墮落なるものは沒書す

◎本誌は廣告といへどもいかゞはしきものを掲げて、風俗を紊す等のことはあらず



女學校の資格

校舍を建て、敎師を備ひ、校長を置き、其筋の認可を受くれば、それにて學校といふものは出來上る也、去ながらこの四拍子揃ふといふこと、なか〳〵難かしきことにて、校舍を建ることは黃金さへ積めば一晝夜にても出來ぬことはなく、俸給と待遇さへよければ敎師も立どころに集まるべし、京大總長が未だ任命せられぬごとく、一校を率うるに足るべき人格高き校長を得ることは容易の事にあらず、其筋の認可はまづ校長に重きを置かるゝことゝ思ふ、而して認可されたる、云はゞ完全なるべき女學校を巡觀するに、ある女學校にては吹はらしの廊下にて敎授して居るのもあれば、分敎場などゝ稱して、あやしき家に机を並べたるもあり、一晝夜にて建て得らるゝ校舍にてまづ斯の如し、然らば技師を選び、建築に善盡し美盡し申分なき校舍には、定めて立派なる敎師を揃へ居るならんと思へば、案外敬服の出來ぬが多し、而して校長に至つては、殆んど人の風上に置くべからざる自分を祭上げたるもありて、噴飯に價することゞも少からず、これ決して無責任なる評語にあらず、

世の中には杓子定規といふものありて、時には重箱の隅をせゝり、時には逸舟の網に氣の附かぬことあり、比較的善良なる人が、世事に無頓着なる爲に其行狀を誤解され、表面を裝ふに巧みなるを以て、其心事の頗る陋劣なるものあるにも拘らず、善人顏するを許さるゝもありて、たゞ皮想の觀察によりて、直ちに其人に判斷を下せば、飛んだ間違が起る也、袈裟御前の貞操が、女學校に於て認め得らるゝ以上は、我慢にも辛抱の成らざる校長が、帝都の中央にも强ち無しとは云はれざるべし、

誰しも衆に善く思はれたきは人情なるが、殊に教師といふ職にある人は、極端に事なきをのみ望み、自分の身邊をのみ氣にして、動もすれば善を僞るかの如く思はるゝことなきにあらず、もし教師なる貴き職に在る人、其常に說く所の如く眞に人物養成に忠ならんには、近時の如く多き女學生の墮落を見るにも及ぶまじ、もし本鄉神田の行人繁き所に停立せば如何に、鼻持のならぬ女學生を送迎する數の多きに驚くなるべし、其操行は暫らく云はず、その風俗、その言語、これが學校の門をくゞる人かと思へば、淺ましなんど云ふもおろか也、

或教師の云ふ如く、學校は感化院には非るべし、されど言語と風俗と位は何とかなりさうなもの也、もし學校に籍を置く女子のみにても、風俗言語に注意すれば、今少し女學生の擧動に水際立ちて、奥床しくなるべし、賤業婦すら口にするを耻づる言葉を、女學生の之を弄して平氣なるは、誰も之を愉快に思ふものあらざるべし、況んや學校といふ場所にて遠慮なく用ひらるゝに於てをや、されど言葉の野卑なる位はまづ〱打捨てゝ置く方面倒がなくてよし、といふ如き假初の油斷が、大きなる騷動の基となるに氣の附かれざるが如し、吾人は餘り高慢じみたる切口上をも好まざれど、さればとてテヨダハの續發さるゝは頗る芳ばしからずひとしく女子教育に任ずるもの、東京の女學校のみにても互ひに申合せて言語風俗に注意すれば、見るべき成績の擧るは云ふまでもなき事なれど、一校にても之を勵行すれば、その德必ず孤ならざるべし、然るに學生はさて措きて、之を率うる校長の人格に顯著なる申分あるを認むるも、所謂商賣敵の嫉妬視せらるゝを恐れて、之に制裁を加ふることさへ得せざる傾きありて、生徒を容るゝ術さへ講すれば、それにて學校は繁昌さるゝものとせば、天下の災之より大なるはなし、然にても女學校と稱するものにして、女學校に要する前記四拍子の揃ひて間然する所なきもの幾何かある、眞に女學校の資格を保つことのむつかしさよ、

自然主義と青年男女の交際

法學博士　木場貞長

自然主義と青年男女の交際といふことに就て愚見を述べて貰ひたいとの御話であるが、余は餘り小説を讀まぬ流義であつて、謂ゆる自然派とか非自然派とかいふが如き論爭にも、多く注意を拂つて居なかつたのである、併し近頃は此論爭も餘程激しくなつて來て、

教育上にも關係が少なく無い

やうであるから、少しく調べて見たいと思つて居るが、他事に紛れてまだ因循して打遣つて居るやうな次第である、去れば余は自然主義に對しては眞の素人であつて、世間に發表する程の意見も無いのであるが、折角の事であるから、余が單純なる意見を述べて見やう、

自然主義は熱心なる主張者の少なからざるに拘はらず、一般には甚だ嫌惡すべき意味に解せられて居る、蓋し自然といふことは、其れ自身には頗る崇高なる意味を有し、往々にして神の如くに敬せられ、福音の如くに思はれることもあつて、不自然、人爲、人工といふことは、寧ろ罪惡の様に考へられる場合もある程の事なれば、自然主義其物が、

絶對的に惡からう筈は無い

小説家たる者が、皆主張と所信とのみに依り、此崇高なる意味の自然を描寫することであらば、別に弊害は無い筈であるが、實際糊口の爲には金儲が主となりて、兎角賣口の多きを欲し、眞正の自然主義であるか無きかは知らぬが、自然主義といふ

都合よき旗幟の下に

盛んに動物的劣情を描出して、思想の堅固ならざる青年男女の意を迎合するは、害毒の特に多きを覺ゆるのである、

同じ事柄を寫し出すとしても、時と所と、又人の

如何に依て、種々異つた結果を生ずることがあつて、歐米では罪のない事柄でも、之を邦語に飜譯して我國に傳ふるときは、意外の結果を生ずることがあるから、心ある者は大に注意せねばならぬ、去れば歐米では、青年男女が視來りて、敢て怪まざる迄に、

社會的情態となり居る事柄でも、之を其儘描出して我國の青年男女に示すときは、容易に劣情を挑發する媒となり、又往々墮落の基となりて、遂に一身を誤るに至ることあり、例へば、握手といひ、接吻といふことの如きは、彼に在りては甚だ罪のないことである、男女相携へて飲食店に





上り、又は馬車を同ふして夜行を共にするといふが如きことも、多くの場合には罪のないことになつて居る、然れども之が歐米で罪の無いことであるからといふて、是等以上の事を無遠慮に書き出されては、實に耐つたものでない、これ風俗習慣の同じからざ

るより起ることにて、必ずしも道徳標準の高下に依るのでは無いけれども、兎も角其結果の同じからざることは忘れてはならぬ、

今同じ事柄が東西處を異にするが爲に、その結果の同じからざることを明白に證明しやうならば、人体の一部又は全部を露出することは、我に在りては左程にも思はないが、歐米人に於ては非常の惡感を起し、不快の念を生ずるのみならず、彼は乳房、臍、股といふやうな事を言語に發するすらも憚るにも拘はらず、

客室に裸躰畫を掲げ途上に裸躰像を建て、或は盛んに是等の畫像を蒐集陳列して公衆の縦覧に供し、而して得々として居るが、邦人に在りては寧ろ意外の感があるのである、

要するに歐米で差支が無いことになつて居るからと云つて、直に之を我國へ移しても宜いといふ譯には行かないのであるから、小説家たる者も此邊の事によく〳〵注意して貰はねばならぬ、最も大切な青年男女を誤らしむるの虞ある小説の如きは、よしや文學上に於ては取るべき所があるとも、力を極めて排斥せねばならぬ、況んや名を自然主義に籍りて金儲けのみを主とする惡小説に於てをやである、

さらぬだに小説を讀むことは時潰しである、假令害の無い小説でも、學問の妨となり、仕事の邪魔となるが故に、有爲の青年男女の爲には、寧ろ敵視すべきである、況して人間の弱點を利用して劣情を刺激し、只賣れ高の多からんことを欲して、毫も耻ることを知らざる惡小説に於てをやである、

今は昔と違つて、青年男女の間に於ける交際は、甚だ自由になつて居るから、玆に最も注意を要する次第である、成程歐米先進國に於ては、男女の交際は自由になつて居るには相違ないけれども、長い間の經驗で、彼國の青年男女は、各自銘々に心の引締りを付けて居て、滅多に馬鹿な事は仕ない、それ故に

小說など見ても、容易に之が爲に身を誤る者はないやうである、然るに我國では急激に男女間の墻壁を徹去して了つたので、まだ經驗も足らねば、社會の制裁力も充分でないから、靑年の男女が自ら制する所以の途を知らない、で、動もすれば前後の思慮も無く、情欲の奴隷となつて一身を誤らうとするのは、豈と危い話ではあるまいか、

業に已に小說の爲に惡感化を受けて居る者が、時に臨んで謂ゆる自然主義を實行し、小說に依つて學んだ處の、

道理めいた不道理

を振り廻して、啻に父兄を困しめるばかりで無く、遂に自ら墮落して救ふべからざるに至るものであるといふ事を知らないのは、眞に以て痛歎すべき明治聖代の一大恨事である、（文責在記者）

母の讀むべき書物

野口幽香子

母の讀むべき書物多かるべきも、茲に擧ぐる所の兒童敎育論と云ふは、最も有益なるものゝ一なるべし、此書は有名なるルウソーのエミールを、菅綠陰氏の譯されたるものなり、此頃幼稚園の會に於て、谷本富先生のエミールの批評なる談話ありしとき、余も亦其席末に在りて該書の敎育上價値あると及幼稚園の淵源實に茲に在るを聽きしかば、直に採りて一讀せしに、愈其有益なることを感じたり、されば世の母たる人々の一讀あらんことを勸めん爲茲に該書中一二の個條を拔擢して示さんとす、されど原書は百三十餘年前に出でしものなれば社會の狀態も大に異り敎育の方法も亦全く異りたることなれば、盡く之を今日に適合す可らざるや、明かに且極端の議論多ければ、該書を繙かん人は其心せよとの事なりき、而して之に達する方法として、子供は注意して放任す

るに如かず、もし活潑有爲の子供を得んと欲せば、其幼少の時よりしてなるべく、之を自由に放任し、彼等の手にて出來得ることは、凡て遠慮なく之をなさしむべし、又彼等の身体をば、宜しく寒熱風雨饑渇疲勞の苦に曝さしむべし、と

以上は「新誕生兒に就て」と云へる項中より其要領を拔きたるものなり、夫れ子供をして成長の後充分に獨立獨行せしめんと欲せば、生れしときより其精神を離れずして敎育せざる可らず、然るに世の家庭にては、往々子供を遇するを大切に過ぎ、少しにても過なからしめんと欲し、常々危險々々と稱へて疊の上に安座せしめ、庭に出づれば風引かん、走れば轉びもやせん、と一擧一動之に干涉し、子供の自ら爲し能ふことをも之に力を貸し、以て子供を愛するの精神なりと考ふる者多く、上流社會に至りては愈々其多きを見る、之れ實に大なる誤にして、子供が成長の後獨立の位置を占むる能はざるのみならず、己が左右のこと迄も一々侍婢の手を煩はさゝる可らざるに至るを知らざるなり、獨立獨行の貴ぶべきことは、母たる人の一刻も忘る可らざることにて、些細の躾にも注意を怠る可らず、此事たるや子供の生れし時より必要のことなれども、三四歲ともならば、橫着氣を起す者もありて、何事も出來ぬと稱し、自ら試むることをも爲ざるあり、斯る場合には母の注意の最も大切な時にして、たとひ出來ぬとも、先づ試みんとの決心を有たしめざる可らず、吾が管督せる子供等には、何事をも自らすることを勸め、到底出來うべき見込なき時のみ之を助く、もとより子供自身をして出來ぬ事を爲さしめんには、莫大の時と忍耐を要すれども、一度かゝる習慣を與ふるときは、子供の好奇心は、終に喜びて何事をも自ら試むるに至るなり、

次に子供を注意して放任すると云ふ事も亦母の心得ざる可らざることにして、なるべく子供の欲するが儘に任せ、些細の行儀作法に拘泥することなく、充分活潑に遊ぶことを奬勵すべし、大切なりとて室內に閉ち籠め置く等は、子供の身体及智識發達の途

を塞ぐに等しく、子供として不幸之より大なるはなかるべし、故に欲するが儘に活潑に遊ばしめ、寒暑風雨に遇ふも少しも身を害ふことなく、饑渇疲勞の苦にも堪へ得るものと爲ざる可らず、故に幼き時よりなるべく屋外に出し寒暑の氣に遇はしめ、凧を揚げ、雪投げをする等、常に大膽に敎育するときは、終には少しも害なきに至るべし、又相互の喧嘩等は、隨分必要の事にて、之に由りて、彼等生長の後、世の風波に堪へ得べき稽古をするに等しかるべし、故に摑み合位は、强て止むるに及ばす打捨て置きて、各兒の勝負に任すを可とす、されど、もとより過度に至らしめぬ樣注意するも、亦母の責任にて、此事たるや何れも危險の方法にして一度其度を誤らば、甚しき害を來すものなれば、非常の注意を要するや明なり、

次に第一敎育と云へる中に、子供には遊戲を奬勵すると同時に、又種々の新奇なる事物を示さゞる可らず、又運動は子供に取りて最大切なる課程と云はざる可らず、又子供の泣くは、彼等に不滿足のあるときに發する言語なれば、養育者は宜しく其原因を察し、之に滿足を與へざる可らず、もし子供の泣き聲を少なからしめんと欲せば、其號泣の時に當り、急に之を靜むるよりも、寧ろ之を泣が儘に放任する方却て得策なりとす、而して一度其强情を制すれば漸次其號泣を減じ唯苦痛を以て如何ともする能はざる時の外又輕しく泣聲を發することなきに至るべし、又子供の手を出して物を取らんとするときに當り、其事物に命じて我方に來らしめんとするが如き時には、子供を連れて徐々に目的物の側に至らしむべし、何となれば之れ子供をして自助の精神を養はしむる最良の方便なればなり、こ

以上は、主に所生兒に關して書たるが如し、子供の生るゝや、種々の感覺は一時一刻に發達し、之に由つて以て智識を得るものとす、されば、遊戲運動等の方法により、諸種の感覺を發達せしむるとを務めざる可らず、幼稚園は實に此目的に依り建てられ

たるものにして、子供の天性一刻も止む可らざる遊戯を利用して、非常に勢力ある敎育法を組織したるものなり、故に幼稚園に在りては、子供の身体を充分に發達せしめ、風雨寒暑に遇ふも、毫も害を受ることなく、生長の後、如何なる困苦の地に身を置くとも、能く之に打ち勝つべき身体を造るを第一の目的とし、次には、道德高くして、有爲の氣性を具へ、獨立獨行の確なる精神ある人物を造るを目的とし、次には五感を鋭敏ならしめ、記臆想像等の力を充分に發達せしめ、將來學問するに當り、如何なるものも、能く之を修め得べき基礎を造るを目的とす、而して是等の目的を達せん爲に、遊戯、運動を奬勵し子供をして、歡樂の間に、知らず〳〵敎育を受けしめんとするに在り故に幼稚園は遊ぶ所にして、課業とも云ふべきものあらば、遊戯、運動が即課業たるなり、

世の母たる人幼稚園へ子供を出すも、何一つ覺え來たらず等と不平を抱く者あらば、大なる誤にて、若し敎へ吳るゝ幼稚園ありとせば、それは子供の爲非常に害あるものと思はざる可らず、

以上は實に本書殆んど卅ケ條の內、僅か二ケ條を擢出せしものなれば、もとより其價値の一班をも示すに足らざるや明なり、唯此書の有益なることを玆に記すのみ、

舅姑に對する心得

文學士　村上辰午郎

昔から、嫁と舅姑の間は、睦ましくゆかないもののやうに考へて居る人が、隨分あるやうでありますれど、それは、甚だしき見違と申さねばなりませぬ青い眼鏡をかけて、物を見るときは、白いものも、青くなつて見ゆる道理でありまして、嫁たるものは元々から、舅姑はよくないものと思ふて居るから、何一つ言はれても、不快に感ずるやうになり、舅姑たるものは、嫁を我子のやうに思はぬから、嫁のな

すことが、一々氣に入らぬやうに思はれるので、こゝらは、舅姑たるべき人も、嫁たるべき人も、共にその心を改め、舅姑嫁を眞の子と思ひ嫁は舅姑を眞の親と心得、自分夫の家に生れたものである、といふ了見があるならば、互の間は、能く調和し得る道理であります、これまでは、女子教育が充分に行き届いて居なかつたもの故、或は了見違の女があつたとしても、兎に角現今の、文明なる教育を受けた女子にして、



舅姑に事ふることを知らないやうなことではなりませぬ、ところが、チット考がへて見ますると、現今の教育は昔とはがらりと違ふて居りますから、舅姑たるべき人と嫁とはその點からして、意見を異にすることが、隨分あるでもありませう嫁方から見たれば、舅姑が思はるゝことや、なさるゝことで今の世に適せないやうなことがあり、又嫁のことを、舅姑の方から考がへたれば、チトやり過ぎである生意氣

であると、思はるゝこともありませう、この點から考がふれば現今の舅姑と嫁との間程、調和し難いことは、過去でも、遠き未來の世でもあるまいと思ひます、昔の敎育と、今日の敎育とは、ガラリと主義が違ふて居りますが、これから後は、現今とはその主義に於て異なることなく、たゞ敎育の方法が發達して行く丈でありますから、現今の嫁たる人が舅姑となりたる頃は、その頃の嫁たる人と、同一の主義の敎育を受けたものでありますから、この點からいへば、互に調和し易いでありませう、然し、現今は、互に主義の違ふた敎育を受けたものとしても、完全調和しない道理は、更々ありませぬ、若し左樣とするならば、親子の間も、調和せない筈であれど、實際は、そうではありませぬので、却つて過去時代に於ける親子の間よりも、現今の親子の間に於て、親密なるものが、甚だ多い觀があります、或は昔は道德が高かつたので、親子の間の密なることは、とても、現今の

人々の及べたものでない、今は道が廢れたりといふ、人があるかは知れぬが、それは、大變の思ひ違ひでありまして、たしかに、現今の社會一般の道德は、昔よりも高くなり、親子の間の睦まじきことは、疑ふべきことではありませぬ、このやうに、親子の間が一層睦まじくなるに至つたのは、主にその子たるものが文明の敎育を受け、道理心が明かとなり、親大切といふ心が、益々發達したからのことであります、一體、この通りでありますから、今度は、嫁たるべき人も、自分の方から、調和するやうにつとむべきことであります、それをなしてこそ、昔とは異なりたる文明主義の敎育を、受けたるところの婦女と申すべきであります、昔と今とは、敎育の主義が違ふ故、舅姑と自分の間が調和し難いと知れば知る程、一層心を用ゐて、調和の方法も取らねばならぬのであります、ところがそうでなくて、舅姑の考へなさることや、爲さるゝことが、古るめかしい、現今の道理に合はぬ、といふ

ことを心に笑ふなどのことがあつては、それは甚だしき了見違であります、そのやうなことを思ふのは、既に舅姑を他人と思ふから、生ずる結果であります、それ故、私にいはしむれば、舅姑のことを古るめかしく思ふならば、それだけ、嫁たるべき人の了見が違ふて居るのであると、斷然申します、舅姑も嫁も、互に間違がつたことは、改むべきではあれど然かし、年の老いたる人は、急に昔のことを改め得るものではありませねど、若いものは、何事も改め易いものであります、それ故、舅姑も自分も、五分〱に、心得て、自分はこれ位の心掛であるに、舅姑はそうでない、と不平をいだくのは、甚だ道理を知らぬ人と申さねばなりませぬ、所謂『論語讀みの論語知らず』ともいふべきものであります、舅姑は一分改めらるゝ間に自分は五分以上を改めるでなくてはなりませぬ、このやうに申すと、私が甚だ無理をいふやうに、お取りになるかはしらぬが、こゝに一つ例を擧げて見ますれば、無理でないことが直ぐ分ります、先づ假りに、或る地方から、東京へ出かけて來たものとして考へて御覽なさい、若い人ならば、言葉といひ、風俗といひ、直ぐと東京風に改めることができれど、老年の人は、言葉といひ風俗といひ、如何に心を用ゐてもナカ〱急に東京風になるものではありませぬ、このやうに申しまするとゝ中には『老いたる人は、元來、改める心がないのではないか』といふ人があるかは知れぬが、なる程、之れもいくらかは事實ではあれど、どれだけ心を用ゐても、年長けたるだけ、舊慣といふのが、去り難い故、若い人程に容易に新なことに化し得るものではありませぬ、このことを考へて少くも、自分が五分改むれば、舅姑も五分といふやうに、互に同一に思ふのは、それは已に出來ないことを思ふて居るもの、と申さねばなりませぬ、嫁たる人、或は嫁とならんとする人は、充分この點を心得て置かねばならぬことであります、

料理研究上の心得

伊藤初枝

近來は到る處で非常に料理の研究に關する講習會や傳習所などの設けも澤山に出來て、夫人令孃方も亦熱心に之が練習を爲さるやうになつたが、これに依つて見ても、世人が家庭の食物といふ事に就て注意を拂はれて來たことが想像せらるゝのであるが、之は國家の爲といふも大業だが、約まるところ實際人々の身体が强壯となる、人々の身体が强壯となれば、それが取りも直さず國家の慶幸であるが、これに就て少しく私が思ひ付いた事を、或は誤りがあるかも知れないが、聊か之が研究に關することを御話して見やうと思ふ、

何故に家庭で料理法を學ばなければならぬのであらうか、單に食物の味を好くする事、消化を良くする事、適當の温度を保たしむる事、黴菌などを撲滅すること等は、最早一般に知られて居る事であるが、それで盡くされてあるかと云ふに、決して左樣で無い、この外にもまだ注意すべき箇條は澤山にあるであらうと考へる、即ち如何なる食物が最も滋養に富んで居るとか、肉類と野菜を比較すると、或點は野菜が優つて居るが、併し或點から見れば肉類は野菜に劣らぬと云ふやうな詮議も充分是まで届いて居るのであるが、それよりはズット易しいやうな事で、なか〳〵之を實行しやうとすると、サウ造作もなくは行かない事がある、それは如何なる事か、左に述ぶる所を見て會得せられたい、

食物と色との關係

チヨツトでも、目に見て美しいと思はせる食物は快感を惹起させるもので、從つて消化を助けるから、比較的に滋養の効があることは疑も無い事實である即ち赤く、青く、或は黃に、或は白に色彩の配合の美しく、さうして圓く、若くば四角なのや、種々の形に料理されたのを、尙ほ之を奇麗な器に巧みに盛つたのは、見るからに美味さうに思はれて、大さう

快い感じを起すから、従つて消化を助けるものであるが、如何に滋養がある食物でも、何となく氣味の惡さうな色や形をした物を、そのうへ不潔な器にダラシもなく盛り散らしてあるのを見れば、飢人は食を撰ばずといふから何うか知らないが、通常の人は誰でも美味と思つて食る事の出來るものでは無い、なほ其ばかりで無く、食後まで不快な感を殘すものなれば、大に是等の關係を攻究しなければならぬ、

食物と味感との關係

何んな食物でも、舌に觸れて美味を感じ、舌ざわりもよく、また好ましい香氣を有つたものは、何となく快感を起して是また消化を助けるものである、即ち美味い物や好きな物は、必ず滋養になるとは何と都合の宜いことではあるまいか、好きな物は少し位餘分に食べても中らないとは、古人の云はれた言葉であるが、之には幾分の眞理を含んで居るといつて差支ないと考へる、けれども之は平常の場合であつて、病氣などで特別に醫士に禁ぜられた時などは、例外である、何のやうな滋養物でも、見るも厭なほど嫌ひだとか、香を嗅いだら胸が惡くなるとかいふやうな食物を食して、それで充分に滋養の效を全うする事は出來ない、のみならず、時としては嘔吐を催したりなどして却つて害になる事が少なくない、

以上を簡單に搔摘んで云ふと、適當な温度を持つて、美しい形、快い香りがして味のよい、肉類と野菜の取り合せの適當な食物が、最も滋養になるのであるといふことに歸するのである、

是等の點に就て和洋の料理を比較して觀察すると温度の點に就ては西洋料理の方が遙に勝つて居る、大抵煮たて燒きたての暖かな物を食すやうになつて居るが、日本の料理では、二三を除く外は殆んど冷たいものと極つて居るやうであるが、これは消化といふ方からも、また齒の養生といふ點からしても注意すべき事であらうと思はれる、

次に形の美しいといふ事であるが、これは云ふまでも無く、日本料理の方が遙かに優つて居る、よく

食膳の上に供せらるゝ刺身の如きもの美しい山水の形と見ることが出來る、即ち紅白の大波は、そこに添へられた野菜の綠色に映て、一入うるはしく雪を戴くは富士の嶺かとも見られて、これ一品でも日本が美術國であるといふ事が判かる、といふは海外より皈朝された人々の感だそうである、この外松竹梅もあれば、又雪中の筍もあり、赤く、青く種々の形をしたものが三品五品と、樣々の形の器に行儀よく盛られて、實に日本の料理は四季折々の自然界の美を献立の上に露はしてある、

要するに、日本の料理は滋養になるといふよりは、寧ろ見て美觀を起させるといふ方に重きを置いてあるといふて差支はない、甚だしいのになると、食することの出來ない物さへ並べてある、之については、西洋料理は餘り感心は出來ない、殆んど外形の美などには注意されて居らぬやうであるが、その代りに滋養の點は確かに勝れて居る、その他西洋料理では、種々な香料を用ゐて食慾を促がし、消化を助けるが、

日本料理では僅に自然の風味を賞翫する位で、餘り香料などは用ゐられて居らぬから、是等は幾分折衷して行くが宜いと考へる、

日本料理では、從來肉類は魚鳥等に限られて、その他の多くは野菜であるから、肉類と野菜の附合せなどに就て考がふる必要が無かつたのかは知らないが、これらも隨分必要な問題であらうと思はれる、何の肉には何の野菜が最も良いか、精神を使う人には如何なる食物が實際上最も適當であらうか、身体を激動した後には何が善いであらうか、何れも少しの注意を加へて實驗さるべき問題である、

最後に一言して置きたいのは、種々な材料を澤山に使つて、味の好い食物を拵らへるのは、誰でも少しの稽古さへすれば出來るであらうが、なるべく澤山の材料を使はず、方法も簡單で、時間も短く、見ばえも善くて、而して滋養になるやうな和洋折衷の料理法を考へ出されて、家庭内で毎日食膳に供せられんことを希望するのである、

家庭の雜觀

文學博士　遠藤隆吉

早婚と晩婚

早婚といひ、又晩婚といふ事は、何れも普通の人情で判斷が出來る事で、學問上で研究すべき問題では無い、故に之は普通の人情から判斷したもので充分であらうと思ふ、殊更に早婚といひ、殊更に晩婚といふからしては、予一個の意見としては双方共に贊成は出來ない、たゞ普通の人情に從つて行ふが良いといふの外は無いのである。

女學生と厭世觀

近來女學生が哲學の書を讀んで、厭世の思想を惹起したといふ樣な事が往々新聞や雜誌などに散見するが、一体哲學といふ學問は

婦人に無益のこと

と思ふ、それよりも家庭の仕事、家庭に關係ある學問、はた家庭に益ある技藝等を修むるのが得策である、たとひ獨立の計を立つるにしても、矢張家庭に關係のある學問や技藝を學んで置く方が利益であると思ふ、元來哲學といふ學問は、研究すれば爲るほど廣くなり、詮議すれば爲るに從つて深くなるものであるから、迚も片手間に研究の出來るものでは無い、況んや婦人が僅かな短日月の裡に之を研究しやうといふのは困難である、然るに哲學の書を讀んで厭世觀を起したとか、或は厭世主義に傾いたとかいふやうな事は、何か自己が平素思ひ込んで居た、その平常の思想を發表すべき機會を、偶々哲學書を讀んで得たのであるが、併し哲學上の厭世觀といふものも、實は一定不變のものといふ事は出來ないのであるにも關はらず、それを讀んで汚染たとありては、畢竟自己の淺薄であるといふ事を表白するに過ぎないので、平素の事も推し測らるゝのである、元來言語は實行を促がすもので、例へば、自然主義といふ語があると、直ちに其言語に據りて、男女の間に於ても、敢て不倫の事までも實行し易い傾がある、

これと同樣で、厭世觀とか或は厭世主義とかいふ一語があると、之を好き機會として現はすものであるから、何うしても婦人が哲學を研究するといふ事は可くない事と思ふ、で、それよりも其時間で、家庭に關する學問や技藝の類を勉强する方が、啻に將來自己の爲のみでは無い、實に國家の爲である、

婦人と交際

婦人に就て注意すべき事柄は澤山あるが、その中で交際の一事は特に注意すべきである、併し今日の謂ゆる貴婦人達の如く、この熱度が高過ぎては、却つて交際も害があるかも知れない、と云つて、古代の女子の樣に、たゞ家の内にばかり引込んで居て、單に内政を助けるといふだけでは不可ない、宜しく良人を助けて內顧の憂無からしむるは勿論の事、時としては良人に代りて賓客を款待し、または吉凶相弔ふといふ位の交際は、何うしても必要と考へる、この交際といふ事も、口では誠に造作も無いのであるが、なか／＼世事に長けた婦人で無くては出來ない事で、單に何處其所の學校を卒業したといふだけでは出來るものでは無い、それゆゑに此事は平常家庭內に於て父母たる者が注意して、懇ろに其子女を導いて行かなければならないのであるが、しかし其熱度は三十七度を越えてはならぬ、

家庭と情徵

言ふまでも無く家庭は、父母と小兒等とより成り立つて居る團体である、凡そ何種に限らず社會に於ける團体といふ團体には、必ず情徵といふものがある、而して其情徵に、他の一方には極めて熱して居るかと思ふと、又他の一方には極めて冷やかなものがある、其極めて熱したものと他の極めて冷やかなものとは、恰も夏の空の如く激變があつて一樣ではない、この情徵なるものが家庭の內に存在して居る、即ち或家庭は春風の駘蕩たるが如くであるかと思ふと、或他の家庭は秋風の蕭颯たるが如くであるといふ差異がある、この差異の依つて來る原因は何

處にあるかといふに父母の人格である、父母は即ち夫婦である、その人格次第で家庭の如何が決定さるゝ、アリストテレース氏は、親子の愛は物理的結合を以て基礎とするから親が子を愛するのは、結局自分を愛するのであると言はれたが、實際親子の愛といふものは、僞りのない極めて淸く、厚く且つ温かなるものであつて、この愛情が家庭の基礎となる



のである、故に親子は食卓を共にし、團欒して談話を交換し、而して快樂を求めなければならぬ、然るに或家庭では、父親は一人別室で食事を仕たり、又は別に寢室を有つて居て、全く小兒等とは無關係であるのみならず、父は非常に峻烈で小兒に對する愛情が見えぬものさへある、此くの如き家庭は名ばかりで、實際家庭の形式を成して居らぬ、從つて其間に育てられたる子女は、其精神が圓滿に發達して居らぬ、それ故に他日圓滿なる家庭を形作らうと思つても、既に其に適確しない性質となつて了う、尤も各人各個に性質が異うものであるから一様には云へ

ないが、兎に角不完全なる家庭の下に育てられたる者は、何うしても不完全なる家庭を作るといふ事は一般に認めらるゝと思ふ、昔の諸侯の家などでは、親子が寢食を共にしないのであるが、それと同じやうに、現今の社會に於ける一種の官吏とか、又は富豪などゝ稱する家庭では此傾がある、斯く家庭を犧牲に供するといふ事は甚だ歎ずべきの至りである、

父母と感化

小兒に對する感化は父母が第一で、その父母たるべき者が眞に子女を愛するの情が濃厚でさへあれば必ず其子女たる者は父母の志を紹ぐやうになるのみならず、父母の事業を成功せしむるのは、
自己の天職である
と思ふやうになる、之に關して注意すべき事は家庭であるが、是には下層のものもあれば、中流に位するものもあれば、ズット立ち昇つた上流といふものもあると云ふやうに區別があると同時に、其種類に従つて
自ら精神にも差異がある、昔の士族の家庭に就て見たならば、謂ゆる大臣といふのは措置いて、その食む所の祿は百石とか百五十石とか、又は其より微祿の者もあるが、是等少祿の家庭にありては、到底多くの家人を養ふといふ事は出來ない、故に高等の生活とは云へぬ、斯く今日の生活の度は低いけれども、苟くも士と云はるゝからには、義理の爲には自己を顧みない、絕對的の眞理の爲には生命をも捨る、常に斯ういふ覺悟を有つて居るから、即ち志は極めて高尚である、之を今日の家庭に見れば、成程如何にも今日の生活の度は低いが、其志の高尚なる所が賴母しい、父母の志が一概に今日の生活とか、又は財産とかいふ低い處にのみあれば、迚も良い發達はせぬものである、今日の處、車夫の子は車夫、勞働者の子は勞働者となるが、これは實に止むを得ない斷と思ふ、倘しも車夫や勞働者の口よりして、天下國家の爲に盡力仕

なければならぬとか、如何に今日は下等の生活をして居やうとも、同じく國家を双肩に荷ひつゝあるのであるといふやうな言語が出たならば、それこそ下層社會に於ける生活の光明であらうと思ふ、併し實際下層社會の彼等の口よりして出なければ不可ぬ彼等の口より斯かる言語の出ない以上は、何時までか五里霧中に彷徨しつゝあつて、その樊籠を脱するの期は無い、故に設令今日の生活の程度は低くとも、父母の志が高尚で無ければならぬといふのは斯の點である、然るに今日の謂ゆる富豪若くば官吏社會などを見るに、或は自分の小なる成功に滿足するのか、或は志が陋劣なのか、はた敎育に不熱心な爲か、何れにもせよ、多くは家庭といふものを考の中に有つて居ないやうである、よしんば有つたとしても、其志が高尚でないやうである、古來偉人豪傑といはるゝ人が、多くは生活の低い所より出たといふのは、全く前來の如き意味を述べたものであらうと考へる、

尚ほ一言斷つて置くが、予が生活の低いといふのは、今日の謂ゆる下層社會の如きものを指すのでは無くして、その志は高尚であるが、單に日々の生活の程度が低いといふのである、此意味に於て、予は今日の人が高尚なる志を有つて家庭を作られん事を希望するのである、

婦人と虛榮心

婦人は一体に虛榮心の強いもので、殊に外交官の夫人には甚だしい、餘り此虛榮心に驅られると、遂に他日に至りて後悔するものである、斯ういふ人々を、他の志の高尚なる婦人から見たならば、到底これは凡夫の衆生で、濟度し難きものであると思ふであらう、左れば自ら深く省みなければならぬ事であると共に、最も愼しまねばならぬ事である(文責在記者)

麝香と衣服

磯島俶

近頃は香料の類も澤山に殖えて、曰く何、曰く何

々といふ風で、中々一頁や二頁では書き盡すことが出來ない程であるが、我國では今を去ること四十年前と云ひたいが、實は二十四五年前までは殆んど蘭麝丁子の外には無かつたので、その中でも麝香は上古の時代より今日に至るまで貴孃方に好かれて、曾て厭かれたことの無い香料である、

世上で偶には此麝香といふ香料は何物から得らるゝやといふ問に對して、單に麝香猫といふものから獲るのであるといふだけは答へが出來るけれども、最早それ以上の答案を明確に與ふる者は尠ない、中には日本の國内で是が捕へらるゝものゝ如くさへ考へて居るものがある、けれども此麝香猫は我國に棲んで居る動物では無い、孰れも支那から輸入するので、その主なるものは麝香猫より採つたものよりは實は麝香鹿といふものより得たものである、

されば玆に少しく夫等二動物のことを説明し、そして後麝香の性質等に及ぼさう、

麝香猫は一名靈猫とも稱し、英名をチベットといひ、その形は鼬に類し、美麗活潑なる食肉獸で、身体に一種の臭氣を排出する二箇の腺囊を有つて居て常に是より臭物を汾泌するので、その物質は蜂蜜に似て、鼻端に近くれば不快の臭氣があるけれども、是に牛酪、脂油、蠟、又はアルコールの類を混ずると忽ち芳香が美となる、もし他の芳香劑に混ずれば其薫を強くするから、丁子油等を少しばかり混和すれば快美の度を增すのである、この動物の性質は狐に似て、夜間鳥類を捕へ食するが、毛色は概して褐色にして不齊の黑點と黑條とを雜へて、尾には黑き輪がある、但し是には亞細亞種と亞非利加種との二種があつて、体の大さは大凡猫ほどである、

次に麝香鹿と稱するは鹿の一種であつて、体の長さは九十センチメートル、高さ六十センチメートル位で、清國、西藏、東京、西伯利亞地方の山中に棲息して居る、而して牡は腹面に二箇の口の開きたる臭囊を有つて居て、麝香は是より出づるのである、その質は矢張蜂蜜のやうで褐色を帶びて居て、乾燥

すれば稍赤色を呈し、多少粒状をなすが、一体この臭嚢の大小は

年齢と季節とに關係

する、そこで老年のものが最も貴重せらるゝのである、性質は概して怯懦で、常に森林の中に身を潜めて居るけれども、何分その臭氣が全身に染み付いて居るのであるから、容易に捕獲せらるゝ、清國や西藏で捕れるものは麝香の量も多ければ、その品質も、優等であるが、之に反して西伯利亞のものは遙かに品質の劣る所より、これを西藏産と混合する爲に、一旦清國に送られたる後、更に他に向つて輸出せらるゝさうだが、我國でも毎年清國より輸入するものは四萬圓以上に達するといふ事で、實に驚くべき額ではあるまいか、

右の外、尚ほ夫等に類似のものがある、即ちこれは麝香鼠、または海狸から採る所の海狸香等である、

麝香は昔時から單に香料としてのみ用ゐたばかりでなく、また醫藥としても用ゐたもので、殊に中世の頃になつてから、亞剌比亞の醫師が其應用の道を開いてからといふものは、興奮或は鎭痙等の目的で、喘息、痙咳、虚脱、ヘステリー等の諸症に稱用せらるゝやうになつた、で、興奮劑として往時は却々重要な藥品となつて居つて、その興奮の力に依つて、一旦死せし人をも蘇生せしめて、遺言を全ふせしむる抔といふ塲合には、是非とも無ければならぬものと爲つて居たのであるが、近時化學の進歩せしが爲に、

折角の靈藥も今は單に香料

といふ風に範圍を切り詰められたのである、そして現今市中で白毛麝香、能呂毛麝香、土麝香、シベリア麝香、ベルジニア麝香などゝ稱して販賣して居る、ものは、孰れも皆この麞といふ獸類から採集したものであつて、その白毛麝香といふのは、麝嚢に白毛が密生して居るからで、能呂毛麝香といふのは、この麞のことを

朝鮮語で能呂といふ

からである、此外シベリア麝香といひ、ベルジニア麝香などゝ云ふのは、多く産地の名を附けたもので、畢竟同一物に外ならぬのである、

併し眞正の麝獸から採つたものでも、雲南麝香、本口麝香、薄皮麝香等の種別があるのみならず、尙だ、くゝり玉、べと、など稱する品種があるけれども、まづ最良の麝香といへば

雲南産が最優等

である、そこで麝香とさへ云へば雲南麝香と稱して販賣せられつゝあるけれども、實際混合物のない純粹の雲南麝香ばかりを鬻いで居るものは殆んど無いと云つても好い位で、十中の九分九厘までは本口、薄皮、白毛等の混交物で、時としては酸化鉛、砂、鐵粉、樹脂、銀朱、動物の皮膜等を混和したものがある、併しそれはチヨツト素人には見分けが付かない、否、餘程の苦勞人でも容易では無い、

即ち善良なる品質は、黒褐色で不整の顆粒から出來て居て、それに黄色又は帶黄褐色の斑點を有して居つて、ホンの少し許を舌の尖で味つて見ても苦味を感ずるものである、元來麝香といふものは、久しく蓄へて置けば香氣が失せることがあるが、それは全く乾燥するからなので、水かリスリンかで少しく濕氣を與へれば、再び元のやうに香氣を放つやうになる、また硫黄や樟腦の如きものに遇へば直ちに香氣を失ふものであるから、樟腦を容れた衣類の間には、決して麝香を入れぬやうにしなければならぬ、否らざれば無汰になるのである、また匂袋等を用うるにも同樣である、

金錢以上の快樂

秦　節

昔は我國にも俗に謂ゆる遊人と稱する一種徒食の輩があつて、また夫等は優に手を懐にして暖衣飽食して居たのであるが、明治の御代となりたる今日では、迚も手を懐にして運は天に在り牡丹餅は棚に在

りなどゝ澄して居ては生活ことが出來ない、で、何うしても働かなければならぬ、のみならず、以前から能く世の人の云ふ、世智辛い、實際世智辛い世の中となつたのであるから、先づ人一倍稼がなければ、縱ひ先祖傳來の田畑があらうが、又は親讓りの巨萬の遺產があらうとも、坐して食へば山も空しの諺の如く、瞬く間に盡きて、忽ち主僕位地を易へなければならぬ事に立至るので、その實例は決して現社會に尠なくない、それに働くといひ稼ぐと云つても、並大抵の行り方では今日を切つて除けると云ふことは却々難かしい、といふのは、知らるゝが如く、最早今日は何職何業に關はらず、一体に競爭といふ事が激しいから、愚圖〳〵して居れば敗を取らねばならぬ、これが謂ゆる優勝劣敗とやら云ふので、強い者勝と云つても、敢て腕力の強い者が勝つといふのでは無い、即ち精力の優れたる者が勝つといふ事である、故に斯樣な社會に出でゝ日々奮戰苦鬪する男子は容易なものでは無い、と云つて、一家の主婦たる者には何の苦勞も無いといふのでは無い、最も稀には自分の服裝とか、又は裝飾とかの外には、一切家事萬端等に付て心勞の無い御方も無いでは無いが、さういふ人は一家の主婦たる資格の



無いものであると考へる、で、私は良人の爲には内助の功を致し、子女の爲には賢母たるものを其人であると推定する。

偖此くの如く主婦たる者も、世の複雑になるに連れ、物價は日一日と騰貴する、去りとて良人の收入が其割に增して行くでも無いといふやうな家庭を預つて居るとしたならば、是また良人に劣らぬ心勞のある事と察する、例へば、日々の金錢の出入、買物の高下、臺所の煮炊、米鹽薪炭の見積り、酒屋、八百屋の出入、之は高い彼は安い、儉約は此上如何したものか、暑さ寒さの移り更へは如何しやうなど〻、それは〳〵其心勞といふものは一通りや二通りのものでは無い、よしんば金錢が有り餘る程有つたからとて、これを浪費するやうでは固より良妻とは稱し難いので、それは論外だが、まづ社會の中流以上に位する家庭の主婦たる者の心勞は右の如くであるに相違ない。

そこで良人が社會の苦闘場裏より退いて、樂園なり、天國なりとする處は何處かといふに、取りも直さず家庭で、その家庭に在りて慰籍を與ふるものは主婦である、而して此パラダイスの空氣を、常に清新にし、其趣味を高尚に導くべき主動力は是また主婦の責任である、併しながら前にも云ふが如く、一面より見來れば家庭といふものは卑俗を以て充たされて居るのであるから、之に對して高尚の、優美の、趣味のといふ注文をするのは、聊か無理であるやうな感じがする、けれども今日世の中で卑俗とか、又は高尚とか云ふものは、

その心の持方の如何にあるので、その事柄の如何を問ふのでは無い、例へば、金錢といふものは多くの人から鄙俗の物と見做されて居るが、サテ此金錢が無ければ、書籍を求めて智見を擴むる事も出來なければ、米鹽を購ふて生命を維ぐ事も出來ない、是等の料に供するときは決して金錢も鄙しむべきものでは無いが、之に反して、その金錢にて無暗に贅澤品を求めるとか、又は

詰らなく酒食や芝居見物等にのみ費すとすれば、同し金錢でも鄙俗になつて了う、して見れば金錢その物は元來高尚でも卑俗でも無い、乃ち之をして卑俗ならしむるも、或は轉じて高尚ならしむるも、开は專ら其人の心に存することが是で解かる、而かも世の中では、餘りに金錢の勢力を視ることが過大であるやうに思はれる、で、遂には其金錢の前には、殆んど我の一切を捧げてまでも平伏するものが尠なく無い。

更めて言ふまでゝもないが、日々の生計を安樂ならしめやうとするには金錢が無くてはならぬ、寒暑を凌ぐにも必要である、又社會に活動するにも無くてはならぬ、是等の點から見れば、これ位我等に必要缺くべからざるものは無いのであるが、假りに一ケ月百圓の收入しか無い者が、三十圓の家賃を拂ひ、お抱車を置き、下婢の二人も召使うといふやうでは、寧ろ金錢が毒となる、然すれば

金錢は藥となり又毒となる

譯だが、それは金錢その物の罪では無い。

固より位置相當、身分に應じて生活の方法といふものは講じなければならぬのであるが、百圓入れば百圓、二百圓入れば二百圓といふやうに、入るに任せて費てしまはなければならぬものではあるまい、一家を成して居れば、月々の入用は勿論、或は社會の交際とか、又は臨時の出費とかいふやうなものが要る、それに何日何時病み煩ひといふやうな不時な出費が要らぬとも限らない、故に縦ひ子孫の爲に美田を買うだけの蓄積は無いにしても、それら不時の入費に事を缺かないやうに、出來得る限りの節儉を行ひ、金錢の貴重なる事を知ると同時に、必ず月々多少の貯蓄といふ事を心掛けて行らねばならぬ。

何うも男女ともに妙なもので、この金錢といふものに就ては、老幼に拘はらず心を動かすものであるが、畢竟それは自分の心を金錢に縛られて了うからである、聞く所によれば、米國などは彼の通り金錢を崇拜する、それは男女長幼に差別は無い、けれど

も我國の其とは大に趣が異つて、人は凡て働くべきもの、働けば必ず報酬のあるものといふ觀念から割出されてあるから、決して金錢の爲に自分の自由を窘縛されるといふ事は無いのみならず、積るに從つて之を散じ之を善用する事を講ずるさうだが、我國の者は初めから其心掛けが異うので、動もすれば鄙吝に傾き易い、否、常に之に屈托して居るから、何うも家庭が趣味に乏しい、高尚でない、優美で無い、從つて男女共に有形の快樂を外に向つて求めるやうになる。

概して云へば、眞正の家庭の快樂、殊に金錢以上の快樂を味はうのには、寧ろ歐米の家庭よりも我國の家庭の方が十分に求め得らるゝのである、是をも尚ほ解しないで、快樂を得るには金錢の外無いやうに思ふのは、畢竟自己が金錢の奴隸となつた事を表白するので甚だ愧づべき次第と云はねばならぬ。

日の影

侯爵夫人　鍋島榮子

夏雲

ふきすさぶ風はとぢても日の影を
　覆へる雲はすゞしかりけり

夏風

蟬の羽のそでにあまりて涼しきは
　おほはし渡る加茂の川かせ

夏田

照わたるこの日ざかりを小山田に
　田ぐさとるなりあはれ賤の女

避暑

日ざかりもけふは忘れてすぐすかな
　このやま里は夏なかるらむ

無用なる學問の効用に就て（其の一）

文學博士　元良勇次郎

斯題に就て予が講話するに先ちて、豫め其無用と云ひ又は効用と云ふのは、果して如何なる意味に於けるものであるかと云ふ事を明かにして置かないと、却つて予が論旨の誤解を招ぐ基となるであらうと思ふから、先づ初めに其意義を一定して置くの必要があるのであるが、予が茲に所謂無用と云ひ効用と云ふのは、即ち常識を以て言ふ所のものを指すのである、其常識を以て謂ふ所の無用又は有用と云ふのも實は漠然として居るのであるが、その漠然たる意味に於て、敢て誰も怪しまずして論談しつゝある之は東西同じである、故に今また之に從ふのである、

無用中の効用

隨分世間には、人々が之は無用であると思ふ事の中にも、効用のあるものがある、近來世間では實際主義または人道主義などゝ云ふ議論もあつて、吾人に直接の關係ある問題を議論せらるゝが、之に反して哲學とか化學とか云ふやうな學問は、餘程人世に緣が遠い、例へば、天地の本体は何であるかと云ふやうな問題は、殆んど人世に直接の關係が無い、けれども多くの學者は、之に力瘤を入れて甲論乙駁して居る、その爭論の約まる所は、單に論理上または之を斷定する言語上の差異に付て兎や角言つて居るに過ぎないのであるから、或者より見る時は實に馬鹿〱しいやうである、人世に益が無いやうに考へらるゝ、けれども其無用に見ゆる學問が、後に至りて効用あるものに變ずるの例は少なく無い、その實例等は後廻しとして、

學問は人世を潤すに在り

一体學問の目的と云ふものは何なりやと云ふに、一言にして之を覆へば、人世を潤すに在りと云ふに

歸するのである、去れば吾人に直接の關係を有する政治經濟を初めとして、縁遠い哲學や天文學等に至るまで、皆孰れも人世を豊かにするの目的に出でざるものは無いのである、故に近時は彼の實際主義に似たやうな學者の運動が始まつて、英、佛、伊等の諸國では盛んで、殊に伊太利の如きは、之に關する雜誌さへも發刊せられて、學問は人世に有用なるものを主とするのであると云ふやうな說も見ゆるのであるが、その有用または無用と云ふのも、實は克く〳〵精しく何か基礎として檢べたのであるかと云ふに、實は夫程までに詮索は屆かないで、單に常識を以て解釋を試みて居るに過ぎ無い、例へば、法學、商工學、醫學、經濟學等の學問は、常識より見て以て、即ち直接に吾人に關係の有る所より有用と定められてあるが、哲學等はさう認められて居ないやうである、

一体物理學を初めとして、其他天文、心理、論理などいふ學問は、取りやうに依りては有用なる學問である、然るに或部分に於ては之を基礎學、基礎學といへば實は大切なる事を意味するにも關はらず、却つて或意味から云へば敬遠主義を取られて居るやうである、即ち彼の工業や商業若くば醫學等を修むるに於て、所謂**他の段階として有用視**せらるゝのみである、斯ういふ風であるから、原子エレクトロンは電氣の集合であるといふ眞理が立つであらうと思ふが、縦ひ此の眞理が立つて見ても、直接吾人に影響する所が無いから、まづ其檢べは第二第三の後廻しとするのである、

また哲學論の中で、實在論と觀念論との二つがあつて、學者は各全力を傾注して研究に從事するのみならず、相互に鎬を削つて論戰して居ても、世人は縦ひ何方になつても、先づ增税問題や電車市有問題よりは後廻しとして居る、また吾人の學問の中で、社會の活動に接近して居るものと懸け離れて居る所の、例へば、老子の道德經の如き、之は老子が人心の最終の結果を書いたものであるにも拘はらず、或

人の如きは之を今日無用の學問として排斥するのみでは無い、甚しきに至りては之を有害とまで斷定して居る者がある、けれども又一方より考ふれば、敢て老子の道德經に限らぬ、プレトーの共和國、アリストートルの論理學の如きものも、之を解するだけに、理性の發達した者に取りては必要である、若し或人の云ふやうに、是等のものが實際不必要であつたならば、適者生存の理に由つて今日まで遺つて傳はる氣遣ひは無い、最早遠き昔に於て跡を絶つべきである、然るに今日まで傳はつて



來ると云ふものは、何か時々人心に映じては感化を與へるからである、

一体有用無用の標準は何であるかと云ふに答ふるに、政治や經濟は直接吾人に關係があるから有用である、けれども其等は政治や經濟に關係が無い、從つて吾人に直接の影響はないから無用であると云へば至極簡單であるが、さういへば

啻に政治や經濟のみでは無い、吾人は見る如く各個に身体を有つて居るのであるから、之を休息せしむるには是非とも寢所が必要なのである、然らば寢所があれば其で宜いかと云ふに、さうは行かぬ、次で衣服や飲食や居室も要するのである、既に衣食住が充りたらば其で滿足かと云ふに決して之を以て滿足するものでは無い、斯くの如く人類と云ふものは、一つ叶へばまた二つと云ふ如く、

その上〳〵と欲望を起すものである、

ソコデ予は今學問の起源を尋ねて之に關する大体

三ケ條の動機

を發見したのである、その

第一は好奇心を滿足せしむる事である、凡そ吾人は、最初に電光を見れば、如何にして光るものであるか、又如何なる所より其光の源は出るものであるかと疑ひ、又驟雨の來るに遇へば、見渡す所雲の上に水があるとも見えないが、如何して雨が降るか、また其水は如何なる所より來るものであるかと訝り、風の吹くのを見れば、昔は風の神なる者が、大きな袋より風を絞り出す抔といふ繪もあつたが、如何も我々は其で滿足が出來ない、倘ほ其先を詮索をして見たくなるもので、之に就ては予も幼時疑を起した一人で、丁度その時分隣家に大きな松の樹があつて、風の吹く度に其松の鳴るのを聞いて、風は此の松より吹き出すものであると考へた事がある、此く人類には好奇心と云ふものがある、

之にも種々段階もあるが、それは人世の發達順序を溯りて見れば判明するのである、

第二は運命を氣遣う事

である、手近な例が、よく小兒の中から起る問題で自分は何所から生れ來つたものであるかと云ふ事を知らうとして、先づ母の胎内より生れ來つたものであると云ふ事を知れば、次で己れが兩親は何所より生れ來つたものであるかを知らんとし、漸次に溯りて、最も一番初めの人間は如何して生れ出でたものであらうか、又如何して人間は死するものであらうかと、云ふ如く、尤も之には少しく利害問題の關係して來るのであるが、而して一度死んだならば、縦んば吾人の生命は地球に比べて短かいにもせよ、再び其の命の長い地球上に再生する事は出來ないものであらうか、若し出來るとしたならば、如何なる狀態のものであらうかと云ふやうに、之には一種の感情が伴うので、即ち悲哀の感想を以て運命を氣遣うのである、

第三は利用厚生

である、即ち木を伐りて家屋および家具を作り、綿や麻を紡いで衣を織り、或は動植物を取りて生活を營む等は、凡て之利用厚生である、

以上説く所の三者が伴うて始めて學問と云ふものが起るのである、

二樣の蓄音機

清　泰道

人智の進歩は不思議といふよりは、寧ろ恐ろしいといふ程で、吾等が幼少の時分に、現今の小學校の先發隊たる明治六七年頃の小學校に於て、福澤先生の飜譯せられた輿地誌略とか、又は窮理圖解などゝいふやうな書籍を初めて繙いて、地球が廻るの、雷電を發させる事が出來るのと聞いて吃驚して居る處へ、彼方此方に電柱を建て、細い針金を引張つて、彼れで音便が出來る、その双方で音便をする時には

柱へ耳を密接て居ると鳴り響く、それが即ち音便を爲る時なのである、と聞いて吾もそれを行つて珍妙がつた一人であるが、その時分からは最早約三十四五年乃至四十年も經つのであるから、十年を一と昔とすればザツト四昔も過ぎる、その間の人智の進歩といふものは殊に長足で、謂ゆる之が逐迎に遑あらずといふ狀況である、故に其當時は未だ夢想だもしなかつた無線電信といふものさへ發明せられ、去る三十七八年の戰役には非常の効果を得たいふので、昨今では商船までも之が裝置を見るに至るといふ盛況である、そのまた一方には蓄音機といふものが發明せられて、坐ながらにして歐米大家の演説でも、又は有名な音樂家の獨唱でも聽き取る事が出來るといふ重寶な世の中となつたのであるが、思を遠く千古に遡らしめて見れば、人生の文野に依りて巧拙こそあれ、この世の中に人類が現はれてより以來、正しく二樣の蓄音機を使用せられて居る、尤もその姿や形は現今の謂ゆる蓄音機なるものとは異う、さうして文野の度に準じて巧拙等の差もある、その二樣の中の一つは永久的では無いが、他の一は世界の有らん限りである、即ち

言語と文章とである

言語は一時的とは云ふやうなものゝ、多少その談話の樣式を變へて半永久的に存する事もある、文章に至つては千古不磨と云つても宜しい、

言ふまでも無く言語と文章との二つは、己れの思想を他に傳へるので、寧ろ今日の謂ゆる蓄音機に比ぶれば數等進歩したものと言はねばならぬ、といふものは、今日の謂ゆる蓄音機なるものは單に其人の音聲とか、或は樂器の音色等を寫すに過ぎないけれども、言語と文章とは然うで無い、マア其比較は此位にして措いて、この言語と文章との二つを對比すれば、是また一長一短は免れない、即ち言語の方は口から發して直ちに聽者の耳に訴へ、毎時でも相手は眼の前に居るから、時としては語調を高くしたり低くしたり、若しも相手が睡むさうな顏をしたなら

ば、一聲高く之を驚かし、若しまた心配さうな様子の見ゆる時は、彼の此のと慰安の語を發する事が出來るから、謂はゞ

言語は有聲の蓄音機

と云つて差支ないのであるが、之に反して文章となると、決して爾ういふ譯には行かない、その換り文章は文章でまた得意がある、尤も同じ文章でも、ホンノ自分が何か覺えがきでもして措くものは卒知らず、兎に角下手なりにも人に見せやう、見て貰はうといふものになると、且らく平凡な文字ばかり續いて、嘸看客が倦厭て欠伸を催うするであらうと思ふ頃を見計らつて、奇想天外より落つと云つたやうな警抜な句を挿入したり、或は諧謔の中に自ら眞理を含むと云つたやうな譬喩とか俚言とか延いて、看客をして覺えず案を打つて快哉を叫ばしめ、若くば眉を揚げしむるやうな事がある、之は到底言語の及ばぬ處で、即ち

文章は無聲の蓄音機

である、

以上有聲の無聲のと云つたが、何の音聲を標準にしたものかと云ふ事を言ひ落して置いたが、それは前にもチョット己れの思想を他に傳へると云つたから、賢明なる諸嬢は夙に御承知の事であらうと考へる、即ち

その思想の音聲

を指すのである、そこで其中の言語の方は家庭その他種々の方面に於て旦夕之を練習し改删して行く事が出來るが、文章となると少し面倒である、玆に一寸注意して置かねばならぬ事がある、予が今前に言語は家庭その他云々と云つたのは、我等が日常使う所のものに就て云つたのである、然るに我國には古代からして文章語と談話語といふやうな分ちの言語があるから、文章を書くにも中々骨が折れる、そして其文章も一定で無いが、先づ普通謂ゆる文章は何うしたらば書けるかといふに、當時の流行語で云へば常識を養ひと言ふに過ぎない、斯う一口に云つて

了へば雜作も無いやうなもの丶、其所には底ありで爾う容易には行かない、

先づそれよりは文章と云ふものは如何なるものであるかといふ事を先に究めて見なければならぬと考へる、當節は何處の學校でも國語作文といふ時間を設けられてある、而して是等の二つのものが別々である位は豫て承知して居らる丶には相違ない、で、別々に之を教授せらる丶のであるが、何故に斯く連接せしむるかと云へば、

兩者は殆んど兄弟姉妹の如き關係を有つて居るからであらうが、一体當時餘り世間に通用しない古い國語を無闇に教へ込んでそれで當世の文章を書かせやうと云ふのは少しく見當違ひではあるまいか、

併し予輩だからとて强ち全然今日の言語が立派だといふのでは無い、孰れは改善を要するが、且らく過渡期の時代に於ける止むを得ざるものとして、その中今少し融通の利くものにして欲しいのである、

大部話が橫道へ外れたが、文章といふものは、幾つかの言語が組合はされて成立つもので、例へば、月が光る、涼しき木蔭、鮮かなる花といふやうな語を組合せた句といふものを蒐めたものが文章といふものである、その組立てに上手と下手とがあるのであるが、それには材料が要る、その材料を蓄ふるには自ら順序がある、之に就て古人は三上とか三多とか云ふやうな秘決を傳へて置かる丶が、是等は今日も尚ほ遵守すべき眞理であると考へるから、その中の三多といふ事を概說すれば

第一は多讀

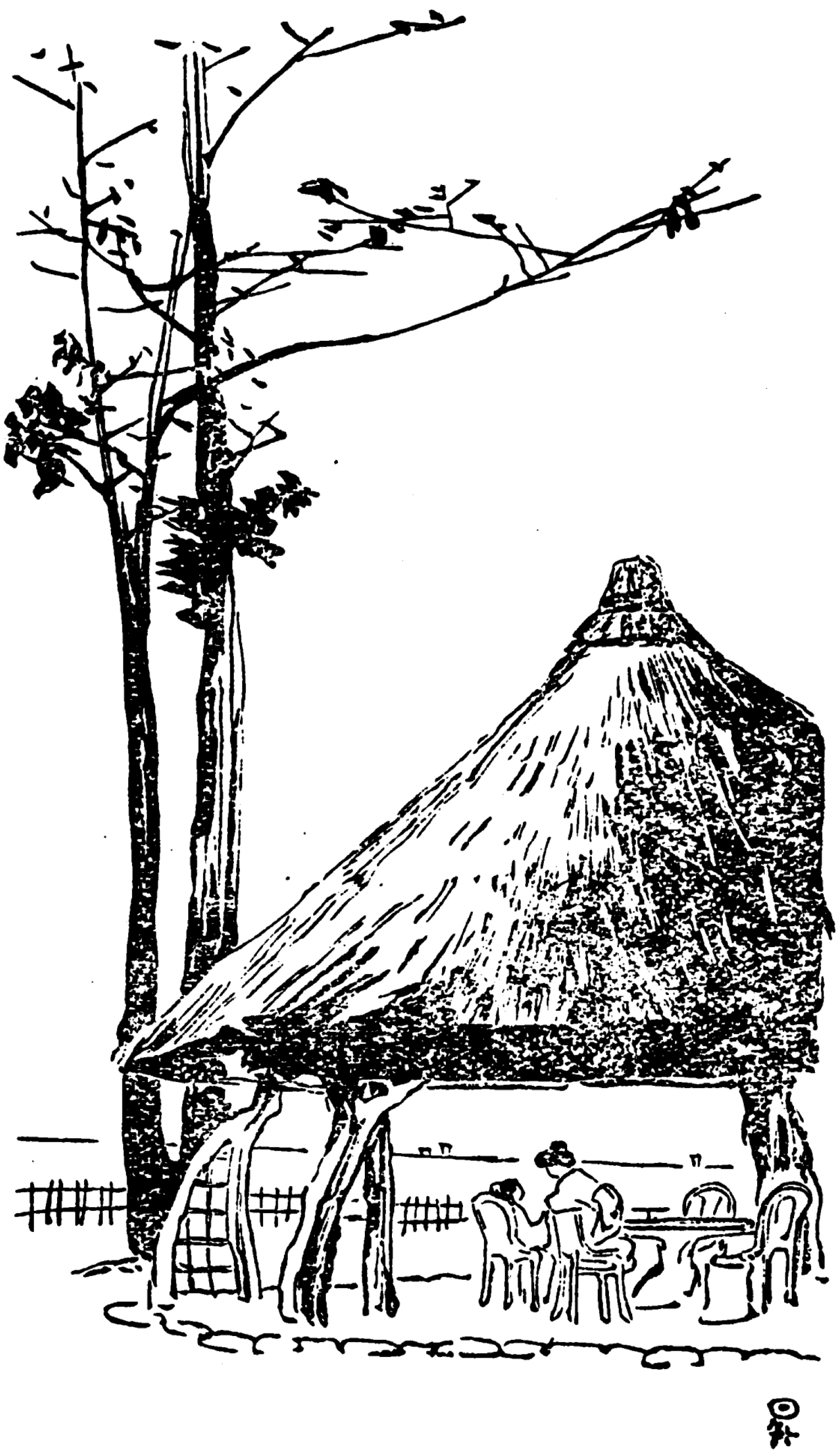
である、成程澤山に古今の書籍を讀まなければ、それに對する智識を獲る事は出來ない、

第二は多記

である、第一の如く縱ひ數千萬卷の書物を讀んでも恰かも蛙が田面でガヤ〳〵いふやうに讀んだ丈では仕方がない、そこで其內の主要なる部分を記臆して措かなければならぬ、

第三は多作

である、第一の如く多く讀み、次で之を記臆して居ても、自己が時々に之を作つて見なければ上手になれるものでは無い、今もあるが、殊に維新前の學者には之が多かつたので、謂ゆる之を綽名して生字引と稱したのであるがそれでは折角勉強した甲斐が無いと云ふものである、文章を學ぶといふ事は、畢竟自己の爲と謂はんよりは、



寧ろ社會の爲である

から、十分それを活用する事を心掛けなければならぬ、それには多く作つて先覺の眼を通して貰うといふやうにすれば、いやでも上手になる上手になれば、それは頓て名を竹帛に垂る〻の源流となるのであるが、併し最初から虚名を獲やうとい

ふ考でする事は萬々愼しみ戒しめなければならぬ、如何に文はアヤと云へばとて、實の無いものは決して永く其聲價を保つ事の出來るものでは無い、

予が新世帯の綱領

津久井湖心

一口に新世帯と云つても、其内容になると必ずしも一様には行かない、例へば、父母より巨萬の資産を分與せられて新たに一家を成すものもあらうし、或は全く自己の智能に信賴して、千辛萬苦を累ねたる結果、僅に一家を構える者もあるであらう、而して前者は重に紳商豪農とか、又は華族の子女といふやうな者が其で、後者は謂ゆる薄給の官吏若くは學校の教員とか、又は銀行會社員とかいふ者が之に屬するのである、そこで前者は同じ新世帯と云つても、業に既に其第一要素たる財産といふものを父兄から貰つて居るから、先づ此點に於て心配は無い、

で、それは扨置き後者になると、自ら今日働きつゝ一家を經營して行かねばならぬのであるから、頗る前者とは趣を異にして居るのである、即ち苦樂共に他人に訴ふることは出來ない、何うしても夫妻兩人して處理して行かなければならぬのである、假りに訴へるとして見ても、先方は他人であるから、素より痛痒相關しない所より、只体よく受流すに過ぎない、乃ち予は當初家庭を形造るに先だちて、新家庭の綱領といふも大業だが、兎に角新世帯を建設すると同時に、將來夫妻その者が則るべき標準といふものを定めて、二十何年の昔より今日に至るまで遵奉し實踐し來つて居る、併し之を以て他を律しやうといふのでは無いが、中には諸嬢の參考になる事が無いでもあるまいと思つて、是までの經路を掻摘んで御咄いたさう、そこで

新世帯の基礎は何か

といふに、云ふまでもなく新郎新婦である、この新郎新婦といふ者は、是まで互に異りたる家庭の内に

育つたもので、從つて其享けたる教育の如きも同じでは無い、固より男女同樣の筈はあるべきでは無いが、今は只その普通の點に就て云ふのである、その普通教育の程度が大抵同樣で無ければ不可ぬ、若しも餘りに其程度が差うと、双方の趣味、感情、理想などの諸點が同樣に行かない、それが乃て談話の誤解を來し、或は意志の衝突を生ずるやうな事になる、從つて其結果如何といふに

相敬し相愛するの情

を全ふする事が出來ない、此情に於て缺くる所があれば、延て新家庭を圓滿和樂ならしむる事は出來ないのであるから、男女が結婚せんとするに際しては、先づ對手の教育程度といふ事を吟味する事を忘れてはならぬ、彼の財產とか地位とか、又は容色とかいふ事にのみ多く力を盡して、此教育の程度如何といふ事を度外に置くものがある、それは實に不心得千萬と云はねばならぬ、而して妻たる者の教育資格に缺くべからざる學藝中で

割烹裁縫及び理科の智識等

が最も大切である、而かも往々世の中では、是等の技能と智識とを除外してまでも生花、點茶、管絃等の謂ゆる吾等の生活に直接喫緊でないものを授る事を先とする者があるが、是は乃ち首尾顚倒の措置であると考へる、で、將來人の妻たるべき者は、何處までも先づ實用を旨として、倘し餘力があつたならば他にも及ぼすが可いけれども、未だ其修養の無い者は須らく其を練習すべきである、

既に結婚式を擧げ了つたならば、玆に新世帶の店は開かれたのである、左すれば第一に起るべきは金錢出納の問題であるが、まだ其よりも先決問題として遵奉すべく決行しなければならぬ事がある、

即ち時間の勵行

である、この時間の勵行せらるゝと否とは、やがて收入の多寡に關係を及ぼすもので、この時間を重んずるの風習は、先づ起臥の時間より始めなければならぬ、併しそれとても大人、老人、小兒等の區別な

しにする事は出來ない、それに一たび極めたからとて、時候の寒暖と日の長短とに依りて多少の伸縮は無くてはならぬ、その換り爾ういふ風に定めた以上は、決して隨意に變更し、又は伸縮したりしてはならぬ、殊に若夫婦の二人暮しなどゝなると、妻は午前五時から起きて炊事萬端の事を爲すにも拘はらず良人は漸く出勤三十分前位に床を出で、倉皇として洗面し食事して出掛けるといふやうなのは決して珍らしく無い、時間を定めた以上それではならぬ、一体我國では公私ともに此時間を重んずる感念が薄いので、殊に田舍へ行くと一層甚しい、一例を擧ぐれば、午前十時までに參會するやうにといふ廻章に、漸く午后二時からポツ〳〵集つて來るといふ始末である、東京は謂ゆる帝國の首府で、我日本文明の中心といふべき場處であるから、最も能く之が勵行せられて有りさうなものだが、事實は全く之に反して居る、斯くの如くであるから、夫婦差向ひの新世帶で之を勵行するといふ事は甚だ困難の如く感せらるゝのみならず、或は予の言を以て滑稽視せらるゝか知らないが、切り詰めて云へば、之を勵行すると否とは、畢竟自分の損得で、他の與かり知る所では無い、併し之を推し擴めて云ふときは、

國家の損益に關する

大問題である、何故なれば、吾等は單に新家庭の双柱としてのみ存在する者では無くして、半面には社會の一員として存在して居る者であるからである、而して之を決行するには、互に相敬し相愛するの誠實さへあれば必ず不可能の事では無い、

次に新世帶を形造ると同時に忘れてならぬ事は金錢の出納問題で、これまで世間には謂ゆる小使帳とか又は日記帳とかいふものを作れとか、若くば既に實行し來つて居る家庭も少なくないやうに見受けるが、或は之も有るかも知れないが、まだ、

家計の豫算表

を作れといふ事を云つたものは餘り多く無いやうである、政府では毎年議會へ明年度の豫算表といふも

のを作つて出して、而して貴衆兩院の協賛を經ることになつて居る、大小こそ異なれ、その性質は同じもので、之は單に夫妻で協賛を與へれば成立つものであるが、それは先づ大体良人の一年の收入といふものを土臺として、經常費即ち毎月の米鹽薪炭等が幾何〳〵、衣服および諸掛り等の臨時費が若干〳〵、醫藥その他の豫備費が若干〳〵といふやうに、豫め今年の内に明年の計算を立て、さうして之を實行して行くのは主婦の責任であるから、一たび定めた豫算の事に就ては良人たる者は嘴を挿まないやうにしなければ不可ぬ、併しながら經常費を除くの外、他の豫備費及び臨時費を支出する、それも些細な事は兎も角、少し重大な事は相互に協議して支出するやうにすれば、縱ひ過不及があらうとも、後日相互の間に紛紜の起る氣遣は無く、毎時も圓滿に解決する事が出來るのである、所で是に關する記帳計算は主婦の責任であるから、それは毎晩必ず怠らず成し遂げて、決して明日に延さぬが可い、若しも延ばすと忘れたり間違つたりするから、之は主婦の日課と心得ねばならぬ、それから何の費用でも豫算だけは使つて宜いといふのでないから、その邊は宜しく主婦たる者の經濟的手腕を試むべきものと承知して居らねばならぬ。

兎角新世帯を設けた當初といふものは、新夫婦が最も得意の時期で、動もすれば無用の出費をする事がある、例へば、格別の用も無いのに下婢を雇入れるなどは其である、夫婦差向ひの内は、まだ左まで用事も多くないのであるから、妻の手で炊事や洗濯等の家事を處理しても十分に餘裕のある者なれば、別に人を雇ふの必要もない、のみならず、最も當初の二三年乃至四五年の間に於て世帯の基礎を堅めなければならぬ、最も早いものは結婚後一年位の内に初子を設ける者もあるが、

最早一人の小兒が出來た以上は、俗に人增せば水增すといふやうに、次第〳〵に經費が嵩んで來るので、此時には爾う節しやうとて

節する事は出來ないのであるから、何んでも當初に此事を心掛けるやうにしなければ不可ぬ。

子女の教育費とか結婚費とかいふものは、何も子女が出來てから始めて準備に取掛るべき筈のものでは無い、それは自分等が新世帶を構えた當初から、後日を慮かりて徐ろに之が苗を植付けて行かなければならぬので、それには前述のやうに、成るべく無汰な出費を省き、買物は總て現金買となし、

生活は萬事質素

を旨として、奢侈に流れないやうにしなければ不可ぬ、併し質素と云つても鄙吝に陥つてはならぬ、何事も身分に應じて行つて往かなければならぬのである、例へば、同じ月給百圓取りだからと云つて、先方は夫婦に小兒一人といふ小体であるに引換へ、自分は兩親に小兒の三人も抱えて居るといふ場合に、矢張先方の小体の生活に習つて、車夫は抱える下婢は二人置くなどゝいふのは無謀と云はなければならぬ、縦ひ良人が爾うしやうとしても、その時は妻たる者が之を諫めて止めさせるやうにしなければ、到底家庭といふものを維持して行れるものでは無い、そこが世帶の要訣である。

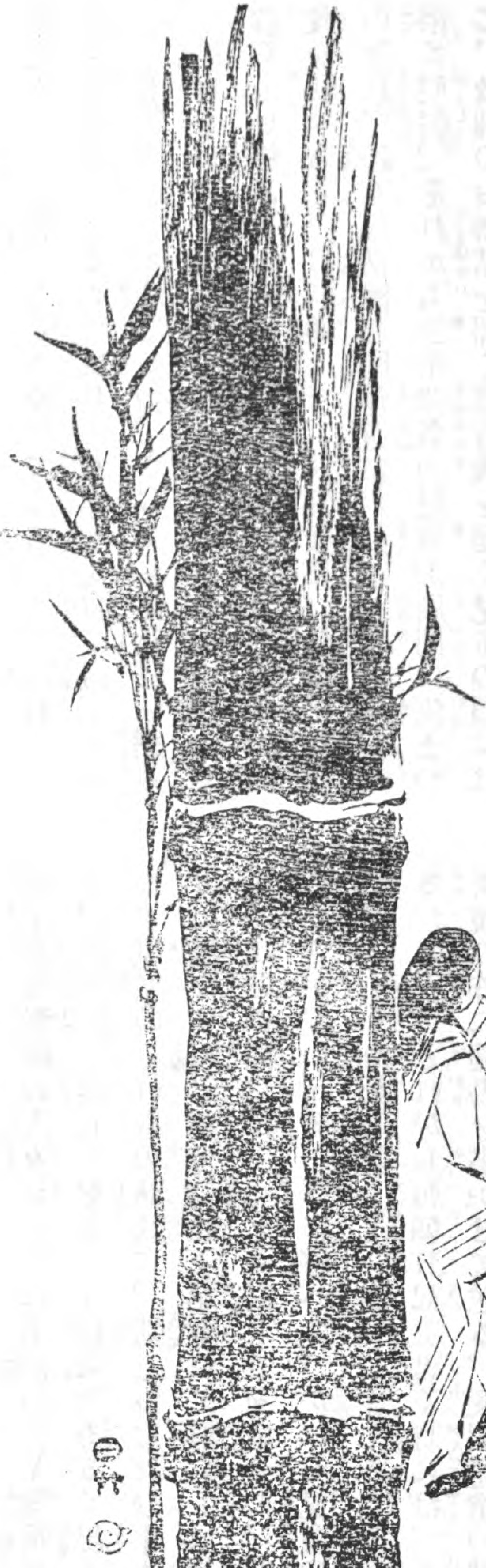
山上の樂園

佐々木信綱

今より約三十年前、瑞西のピオンといふ人が、健康の勝れない兒童の爲に、轉地修養會なるものを始めて催した。それは冬は海岸の暖かい地、夏は山間の涼しい境に、兒童を轉地させて、勉強もさせ遊ばせもすると云ふ組織であつた。其結果が非常に好いので、今では歐米各國の都市では、毎年競うて之を行つてゐるさうである。わが國では是迄未だ其企てが無かつた處、小兒科醫小原頼之氏が、之を唱導し始めて、昨年の冬其第一回を浪靜く氣暖かなる鎌倉の海岸に於て催したのは、九段なる精華學校である。今年の夏は、會場を妙義山の妙義神社々務所と定め

て、一行は七歳から十二歳迄の男女生徒卅五人、監督教員男女各三人、醫師一人、看護婦二人、炊事婦洗濯婦等すべて五十名、七月廿九日東京の地を去つて、奇峭にして幽邃の趣致に富んだ妙義の山に向うた。

會場と定めた社務所は、三十一年の夏、內親王貞宮殿下が數十日間暑さを、避け給うたところ、室の構造完全なるが上に、遠く秩父の連峰を眺め、近く



赤城榛名の頂を望む心地は、譬へやうもない淸凉を覺える。溫度も華氏八十三四度で、東京に比すれば殆ど十度の相違がある。さて此可憐な少年少女は、かゝる涼しい山上に其一日を如何に送つて居るか。

日課として毎日行つてゐるのは、朝は五時半號鈴の響きに一同床を離れ、呼吸運動をする、朝食後一時間半學課がある、前日の日記を記す事と、國語算術を復

習する事とが主で、女兒のためには又簡單な女禮式を授ける。それが了へて室内遊戲を樂しむ中に、親切なる炊事婦の手に由つて晝飯が運ばれる。午後は戸外の隨意運動を試みる、或は苔深き石の階を上つたり下りたりして、鬼ごつこをするもあれば、風涼しき千尋老杉の木陰に寫生するもあり、流れ清き谷川の水をせきとめて玩具の水車をかけて遊ぶもある、老鶯と蜩と時鳥とが、さながら兒童等の樂みを助けるかのやうに、一所に鳴いてゐるのも嬉しく珍らしい極みである。午後の三時に牛乳や菓子の間食を食べるまでは其通りで、間食後は、敎師の指揮の下に、種々な活潑な團体遊戲が始まる。其後が入浴と晩餐、それから三十餘名の兒童が廣間に集まつて、敎師のお伽話を聞く蓄音機を聽く兒童の顏には誰も〳〵、皆活き〳〵した樂みの色が見えて、此上も無い滿足の體である。そして、八時半には夢安らかな眠りに就く、毎日〳〵かく樂しい日を送つて行く。四週間の中には、一週一回可憐な談話會が開かれる、外に面白い福引會が二回、勇ましい運動會、樂しいお伽芝居が各一回あるとの事、花火は毎晩揚げて樂しむ、實に理想的のもので、宛然神の園に遊ぶの思ひがする。これは畢竟校長寺田勇吉氏をはじめ、主事の田代勝之助氏、其他井上、兒玉、鈴木砂土原等敎師の人々がいづれも深い〳〵愛情を以つて、獻身的に盡してをらるゝ結果であると思ふ。隨つて兒童のそれらの諸氏に、親しみなづむ事も一通りで無い。遠く父母の膝下を離れて淋しくはないかと、試みに聞けば、少しも淋しさを感ぜぬ、此樣な樂しさがないと皆一樣に答へる。かれら兒童の小さな心の中が如何に嬉しく〳〵、如何に樂しみに滿ちてゐるだらう。それから毎朝日記を書く時には、必らず兩親の許に端書を書かせて送る、夜間兒童の就眠中は、看護婦の内一人は、終宵徹夜して寐冷えせぬやうにと注意する。食物は、土地柄魚類こそ少ないが、純良な牛乳はあり、鳥類や玉子も充分であるから、今までに一人の病氣に犯されたものも無く、

日頃身体の薄弱な兒童と雖ども、未だ具合が惡いと言うた事が無いさうである。かくの如く愛情に富んだ人々の下に、かくの如き秩序正しく、樂み多き日を送つて、知らず〳〵のうちに、身体の強壯と精神の健全とを圖りつゝ、夏季の暑苦しさを忘るゝ兒童の身は、實に此上もない幸福であると思ふ。自分は此程妙義に遊んで、此の山上の樂園を見たので、未だ知らぬ人に紹介する。（卷の始めに掲げた寫眞は、出發の當日同行した九段長谷川寫眞館主が寫したのである）

妾が崇拜せる女傑

安藤富久子

近頃は何につけ彼につけて理想といふ語が用ゐられます、例へば、理想の世界、理想の事業、理想の文學、理想の家庭、理想の良人、理想の妻といふやうに、數へ切れない程ありまして、一事一物總て此理想といふ語が付かないと、何うも高尚らしく、はた勿体らしく聞えないといふ有樣で、今私が爰に述べやうと思ふ崇拜といふ事も、或は一面から見ましたならば理想といふのに近いのかも知れません、けれども自ら其間には區別のあるもので、固より其と此とを混同する事の出來ない事は諸孃が豫て御承知であらうから、今更めて之が區別などを說くの必要はあるまいと存じます、

凡そ人といふ者が一事を成し、一業を遂げたいと想ふに付け、之に着手するに方りましては、何か先に標準といふものを立てゝ掛りますもので、その標準は恰も空中の蜃氣樓の如きものでは無くして、縱ひ全然それに依りませんでも、其幾分は先人の遺蹟に基くか、又は或機微に觸れて得たるものを土臺とするものであります、それは單に一事一業のみではありません、吾等が日常の生活の上にも必ず多少この意義を含まれないものはありません、そこで諸孃

は如何か知りませんが、私は私が今日まで、十二歲の頃に、見るとは無しに物の本を見ました時に、女子としては斯うありたいものだと

しみ〴〵心の底に感じて、それよりは朝な夕な、人樣には語りませんが、獨り心の中で繰返し〳〵して、崇拜もし又追慕もして、須臾も遺るゝといふ事は無い古への女豪傑があります、それは誰あらう、諸孃も歷史等で御存じの

細川忠興の夫人敷波の方

であります、何故に私が此敷波の方を崇拜して居るかといふに付ては、聊か當時の歷史を語らなければならないのであります、それは敷波の方の良人細川忠興といふ方は、當時歷史中の花役者でありますと共に、敷波の方も亦良人に亞ぎての花形であるからで御座います、

サテ永祿の六年と申しますれば、即ち正親町天皇の御代でありますが、國中は宛がら麻のやうに亂れに紊れて、群雄は到る處で食み合つて、東の方では織田信長が一擊の下に今川義元を仆して、將に京畿に臨まんものと窺ひ、西に於ける毛利元就は、漸く尼子を降して旗を北陸より進めんと謀り、その他武田晴信や、上杉輝虎や、北條氏や、島津氏や、相互に機を見て各々天下を奪はんと、競ひに競うて居る最中に、夫人は

尾陽の陣中に呱々の聲

を擧げられました、父は實に當時武名高き明智光秀の第三女で、幼名を敷波と命けられましたが、誠や幼い頃より資性は極めて穎敏で、殊には封建時代の婦人には珍らしい美性に富んで居られました所からその才といひ色といひ、夙く國色の名は遠近に響いて、誰も其名を知らぬ者も無い位でありました、

乃ち天正七年の二月、夫人の芳紀漸く十七歲の頃、遂に其父の仕ふる主君信長公の知る所となりて、花ならば繚爛燃るやうな如月の雪の晨、當時頗る有力なる外樣大名として、はた俊秀の武人として多くの囑目する所となつて居た細川忠興に嫁し、身は戰國

の明日をも知らぬ荊棘の坐にありながら、琴瑟相和して幸福な月日を送つて居られたが、それは夢の束の間で、意外なる事變は意外なる方面に爆發いたしましたので、謂ゆる武士道と云へる溝渠は、俄かに恩愛の羈を絶ち、人情の柵を破りて、遂に此の蜜のやうな夫妻の間を引裂く事となつたのでありますそれは隱れも無き天正十年の夏の事で、僅か夫人が嫁いでから三年目に、最愛の父たる明智光秀が、其主織田信長を一擧にして本能寺の陣中に倒し、躬ら代つて天下の權を握つた事變で御座います、固より戰國時代の習慣としては何の不思議も無い、寧ろ當然の仕方なのでありますが、併しまた一方から云へば隨分極端な計略なので、忠興は一意に光秀の罪を鳴らして、斯る不義を働く者の娘を自分の妻として慈くしむ事は出來ないと思ひつめ、直ちに自分の情を殺し、悲みを斷つて、夫人をば三戶野の山中に押しへだて、家人の多くに令して嚴重に之を警固させながら、躬らは取るものも取りあへず、父の藤孝と相伴うて秀吉の軍に馳せ參じ、力を協せて光秀の軍を天王山に敗り、尙ほ長驅して之が首級を擧げ、全く其一族を亡し盡したのであります、

光秀の事に就ては、既に世間で定評が御座いますのみならず、諸孃もまた能く其事蹟を御承知の事でありますから之を略すと致しまして、一体光秀といふ人は、智力の人といふよりは、寧ろ感情の激しい性質であつたといふ事だけに止め、その華やかなる感情を享け來つた夫人の痛は如何ばかりでありませう、私が夫人を崇拜するの價値は全く是より後の夫人にあるので御座います、或は逆賊の娘をなどゝ世間から攻擊なさる方も御座いますが、たとひ父は主君を弑いさうとも、それは敷波の方の一生と照して、夫人に何等さういふ忌むべき事が無かつたならば差支ない事であらうと存じます、兎角世の中といふものは、坊主が惡けりや袈裟までといふ偏見に陷りたがる僻のあるものでありますが、併し刺があらうとも薊の花は何處までも花でありますから、謂ゆる惡

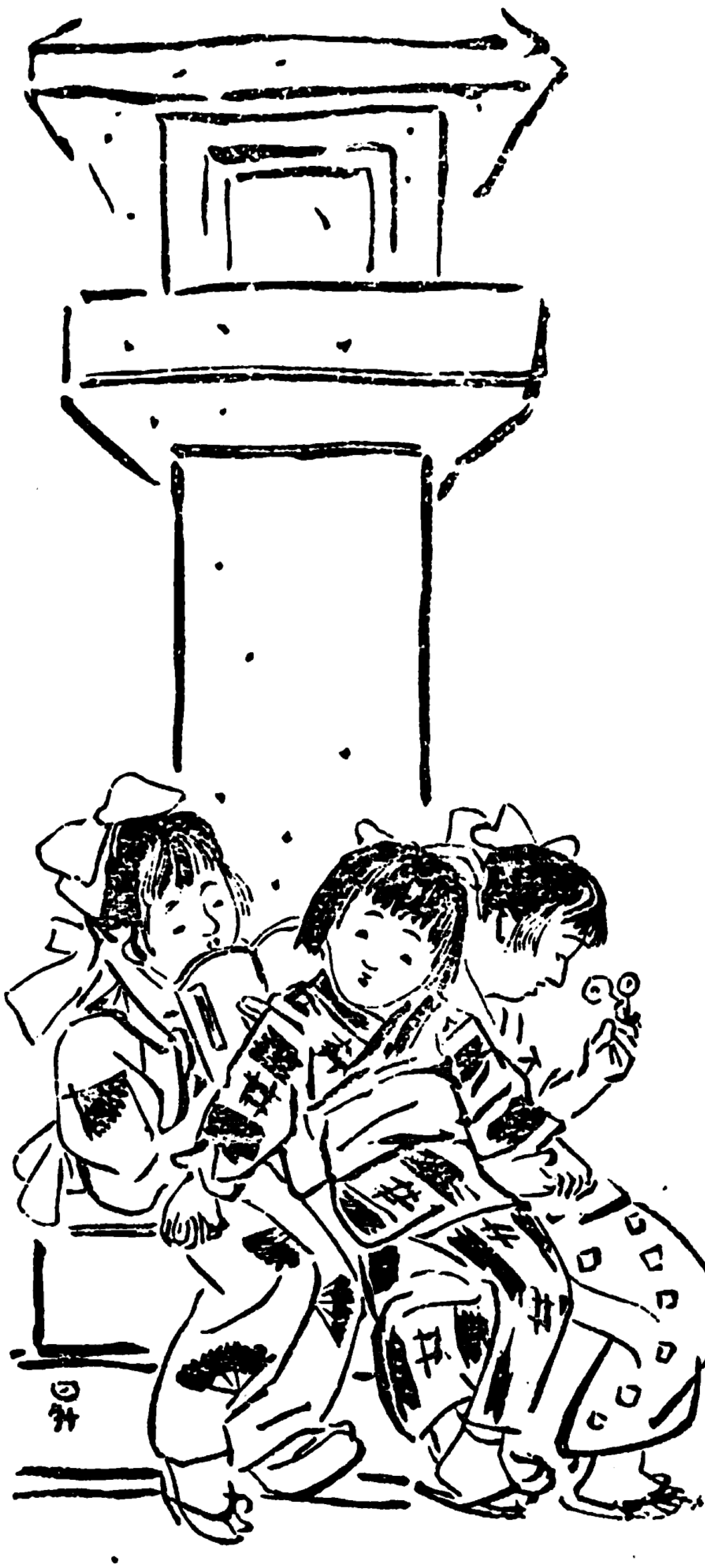
んで其美を知るといふ心眼を具へて居なければなるまいかと存じます、私は其了簡で居るので御座います、乃ち夫人の身に取りましては、

昨日までの和樂は凡て是れ夢幻泡影で、天地の間に唯一人の父は、世の中に有りとあらゆる惡名の刄の下に葬られたるさへあるに、其首級は萬人の憎みの前に曝され、わが命とたのむ夫忠興は世を憚りて義理も捨て、人情も殺して吾父の討手に加はり、躬らは人氣も稀なる山中に閉ぢ込められ、昨日までは主よ家來よと呼ばれし、はしたなき郎黨からまでも、あれこそ謀叛人が名殘りの影よと密語さるゝ辛さ便なさ、一族は絶え、今は身に取りての便りといふものは、たゞ〳〵父が最後の仇なる夫忠興、さなきだに感情の鋭い女性の事とて、其悲嘆に一時は絶え入るばかりでありましたが、又同時に流石は光秀とも云はるゝ人の娘だけに、其樣な刹那の境に臨みましても、其平生に比べて聊かも取亂すやうな事は無いのでありました、

とかうする折から、由ない風說は夫人の耳にも聞えまして、苟めにも光秀に血緣ある者は、山を割き石を碎きても其在所を搜して其跡を斷つとの秀吉の觸狀、家人の誰彼も等しく其風說を耳に致しまして、さて更めて夫人を諫めて申しまするやう、君は素より繊弱女性の御方とは申しながら、正しく光秀殿の御娘なれば、たとひ忠興殿の奥方とて、秀吉の之を用捨せんこと思ひもよらず、されば此くして坐ながらにして刄を受けんよりは、寧ろ速く御自裁ありて然るべう、と衣紋を正して申しましたが、夫人は毫しも迫れる樣子もなく、從容として辭を和らげ、斯樣な諫めは少しも耳を傾け給はず、警護の人々を集め、改めて申し聞けらるゝやう、妾は誠に逆臣の子には相違ないが、それは古への事、今は身を任せたる忠興殿といふ良人があれば、何條一存の我意を通されませうや、固より惜き命にもあらねば、自殺はいと易き事ではあるが、まだ良人の命令をだに聞かないで躬ら世を早うしたならば、恐らくは

大聖三從の誡めに反き候はん、よしや無き父への孝道には背くとも、今は命を委せたる良人への貞節を全ふするこそ妾が本意なれば、よしなき刄に伏するよりは、敵人を待ちて世を終るとも何の仔細もあるまいとて、儼乎として家臣の言には從はれなかつたのであります、

斯くして夫人は其良人よりは人里遠い山中に幽閉せられ、而かも情愛に何の恙もなく、たゞ〳〵權勢を憚りましての人情と、謂ゆる武士道なるものゝ縛めとに、我身ながらも聊かの足搔だに叶はないで、あらゆる苦や辱めを忍んで、死生を一に良人の意に任せまして、憂と涙とに月を送り年を迎へて居りますること一年と八ケ月、天正十二年の二月に及びますると、天も其苦節や感じ給ひけん、其事遂に時の宰相秀吉の聞く所となり、いとも懇ろな諭しに、忠興も素より忌みて斥けた譯でも無いのでありますから、頓て破鏡は今更に舊の歪に復りました、此折の夫人の喜びは實に如何ばかりでありましたらう、察



予が崇拜せる女傑

するにも餘りある事と存じます、

　されど夫人は再び此幸福なる曙光に接したのを感謝すると同時に、他方には又遣る方のない煩悶の種を植え付けられたのであります、といふは、躬ら此間に處してつら〲考へて見ますれば、今回自分を助けて呉れられた大恩人は、更に父の命を奪つた不倶戴天の仇であるといふ一事で、殊には身は苟くも當時盛名隆々たる一國の主の奧方ではありますが、世間の人よりは勿論、一間おいて隣りに詰て居る家臣すらも、口を開けば直ちに彼れこそ逆臣の遺孤よと後指を指さるゝので、さもなくとも盡きぬ愁に轉輾して居る、か弱い女性の心は何れ程激しく掻き挘られた事でありませう、それやこれやと夫人は人なき一間に退いては、遂に想を運命の歸趣に馳せまして、次第に其人世観といふものが悲調を帶びて來たものでありますから、疑心暗鬼の喩に洩れず、今は二なき良人忠興の愛も、以前ほどは深からぬやうに感ずるものから、果は身も世もあらせず、轉々煩悶しては、遂に吾この苦衷を察して、この亂れに亂れた心の上に、一道の光明を與へるものはあるまいかと、ひたすらに悶え苦しみました結果、夫人の心眼は自ら天の命ずる所に反映しまして、爰に夫人は生涯を通じての光明ある、新らしい域に入ることを得たのであります、

　それは何であるかといふに、當時細川家に忠興の片腕とも稱へられたる高山右近といふ豪の者が仕へて居りました、この者は武勇にかけて豪の者であつたばかりで無く、その頃禁制の天主教即ち耶蘇舊教の最も熱心なる信者でありまして、此者の爲に夫人が導かれたのであります、全体 私は新舊に關はらず耶蘇教といふ宗旨は蟲が好かないのであります、それ故に夫人が天主教の信者になつたといふ事は甚だ遺憾に存じますが、

　その信念の度の強く且つ厚かつた事を私は取るので御座います、乃ち夫人が一度右近から其教を聞きますと、恰も盲亀が浮

木でも得たやうに、其悦びは喩ふるに物なく、その信仰に就ては如何に他より身心の壓迫を受けやうとも、それが爲に決して信仰を抛つといふやうな薄弱なものでは御座いませんでした。

既にして慶長三年に關白秀吉は俄然薨去せられましたので、今まで壓迫せられて居た諸大名は一時に屈起したので、世は再び戰國の古へに返つて、いつ如何なる邊に破裂するものかと、人心は洶々として安き思ひもありませんでした、けれども大勢は動いて德川氏に歸し、今や相對するものは老雄德川家康と、故太閤の遺孤秀賴との二人で、戰雲は荐りに京阪の空に催して居りました、此際に卒然顯はれましたのが例の英物石田三成で、彼は躬らは佐和山の城に立て籠つて、竊かに秀賴を拉して德川氏の全權を收めやうと企てたのであります、折から家康は諸侯を率ゐて東國に出征しましたので、三成は豫ねての計略により、一擧諸將の妻子の大阪にあるものを要して後日の人質とし、斯くして人情の柵によつて諸大名の心を喰止めやうとして、先づ使を忠興の邸に遣はしまして、夫人並に子女の即刻城中に入るべき旨を傳へました、時は慶長五年の秋のことで、忠興も武人としては固より間然する所の無かつた人ですから、豫め大阪方に斯樣な事ありとは見拔いて居りましたので、嚮に家康の軍に從つて東征の途に上りました折柄、確と家臣に命じて、斷じて妻子を他に移すべからず、もし事如何ともする能はざるに至らば、寧ろ之を殺害するに如かずと申し含めて置きましたが、夫人は早くも此間の消息を知つて居られましたから、却々その辭に應じませんで、言を左右に托して日を送りまする裡にも、城中からの使は櫛の歯を曳くやうに蒼蠅いので、家臣らが懇ろに生害を勸むるまでも無く、夫人は既に已に心を決しては居るものゝ、躬ら刄を執つて自盡するといふ事は、其奉ずる敎への禁ずる所であるといふので、茲に到つて別に未練も何もあるのでは無いから、徐ろに家臣を集めて自身の信仰を告白し、併せて最後の說敎

をなし、豫め叔母と嫡婦とを逃れしめ、更に聲を勵まして縦ひ躬らが生害したとても、決して殉死等の振舞があつてはならぬと懇ろに諭し聞かせ、静かに侍臣を差し招いで、己が春秋三十八年の短かき現世の覊絆を斷たせました、

その信念の確固たること、人格の高潔なること、貞烈の峻厳なること、その他難局に方りて莊重にして迫らざること等は、實に私が平常崇拜して止まない次第なのであります、

叫ばず歌ひ

鈴木古鶴

叫ばず歌ひなどゝ如何にも突飛で奇矯の言を弄するやうに思はれるか知らないが、之に就ては遠から少し感じた事のあるので、何か好機があつたら話したいと思つて居たのであるが、只今別に是といふ考案も有たないから、その責塞ぎに是でも致さう、といふのは外でも無い唱歌の事に就てゞある、

一体我國の人は殘念ながら西洋人に比べると概して音樂の智識が幼稚である、故に唱歌の如きも、黄色な聲か銅鑼聲で唸りさへすれば歌つて居るものゝやうに考へて居て敢て怪しいとも思はない、併し中には實際に歌つて居る者も無いでは無い、けれども夫は至つて稀である、元來唱歌は其名の如く、歌ふべく叫ぶべきものでは無い位は一般に知つて居さうなものである、所が實際は叫んで居る者の方が多い、例へば、小學校は且らく措くとして、各所の女學校を參觀して見ると、彼方では黄色な聲、此方では黒つぽい聲といふのも可笑しいが、實際色々な聲を出して叫んで居らるゝ、唱歌にはキー〱と云つたやうな聲は禁物であるが、併し先生は少しもお關ひない、

さればと云つて、何も大きな聲や高い聲が出たからと云つて、それで上手なり巧者なりと稱賛の出來

るものでも無いが、時としては多少是等を要する事が無いとは言ひ切る事は出來ない、と云つて今日のやうに多く誤用しては、第一唱歌の生命に關するのである、喩へば、淺草の公園などへ行くと、活人形作りの名人安本龜八が滿身の腕を奮つて拵へた古武士、又は宮媛等を名優の似顔に擬せて製するけれども、拵へものは何處までも拵へもので、決して本統の人物とする事は出來ないと等しく、唱歌を叫んで居るのも、知らない者の耳には歌つて居るやうに聽こえるであらうが、少しく其智識のあるものが聞くときは、全で活人形と等しく

生氣も何も無い

ものとなつて了つて居る事が分かる、即ち歌うのでは無く、叫んで居るのであるといふ事が知らるゝ、もと〳〵歌は西洋でも日本でも二種あるものでは無い、何故なれば、西洋人だからとて、他人の怪我をしたのを見て喜ぶ氣遣ひも無ければ、また日本人だとて箏やピヤノの音を聞いて腹を立てる者のあらう筈は無い、その如く感情は東西共に同じである事は此一例でも推せらるゝのである、而して歌は此感情なるものが折に觸れ、時に應じて出る所の

詠嘆の表象に過ぎない

のであるにも關はらず、日本の歌と云へば無暗に優雅で情の深いものであるが、西洋風の唱歌になると、一概に窮屈なもの、面倒なもの、困難なものゝやうに誤想せられて居るやうに思はれる、

斯く東西の歌に別あるものゝやうに考へて居る間は、到底唱歌の發達普及は望まれない、で、兩者の間には毫も徑庭のあるものでは無いと云ふ事を知つて貰ひたい、乃で西洋風の唱歌を歌ふにも、矢張在來日本の歌を歌ふやうな考へで、態度で、面白く、情深く、心の底から其歌曲の有する美趣を發揮するやうに歌ひ出さなければならぬのである、而かも我國の人の多くの唱歌を歌ふ時の態度となると、全く是と反對で、態と奇妙な無理な聲を振り絞つて、一圖に拍子や調子などにばかり泥んで、肝腎な唱歌の

精神を發揮する事を忘れて了つて居る、情けない次第ではあるまいか、

元來聲には男女の別、その男女の内でも、高い部分のものと、低い部分に屬する人とによりて

或一定の音域

があるのであるから、必ず其法則に從はなければならぬものである、然るに之に背く者は不自然に趨るもので、平たく云へば無理な聲を出すものと云はねばならぬ、

併し初歩の者には如何なる聲が自然で、又如何なる聲が無理なのか一寸分別し難いであらう、それは最もな次第である、そこで其無理な聲といふ事を手ツ取り早く知らうといふには、何んでも自分で歌ふて見て、甚だしくない程の音程音域を歌つて見て、若しも自分に苦痛を感ずるやうな聲があつたならば成るべく夫は無理であるから歌はぬやう、縱ひ歌ふにしても十分注意して練習の功を積まねばならぬのである、そんな理屈張つた事よりは、唱歌は如何に歌ふべきものなるかを簡單に説明すれば、

唱歌は喉で歌ふもので

箏歌などゝいふやうな日本在來の歌、即ち主に口先のみで謠ふものとは異うのである、何うも口先ばかりの唱歌法は豐富とした音量を得る事は出來ない、この豐富な音量のない唱歌は軈て叫ぶことになる、唸ることゝなる、

何故に唱歌は豐富なる音量を要するかと云ふに、多人數の前で謠つて、隅から隅までの人にも聞き取り得らるゝのを主眼とするのが唱歌法で、之に反して日本在來のものゝ多くは、單に狹い座敷などで、而かも小人數の樂しむといふ傾きになつて居るから如何しても口先ばかりに爲つたものであらうと考へる、併し現今尙は我國に行はれ、殊に近數年は一層の息を吹返した謠曲は、稍唱歌法の發聲に近いものである、

更めて云ふまでも無く、價値のある唱歌を歌はうと思ふならば、前に云へる如く、無理な聲を愼しむ

と同時に發聲の練習を爲さねば不可ぬ、之を疎外するのは恰も足を運ばないで、千里の遠きに達しやうとすると一般で、如何に良い喉を有つて居ても決して上手になれるものでは無い、これも六ケ敷いへば云ふものゝ、實は至極簡易なもので、その方法は先づ最初(ハ)調の音階を一音づゝ

深呼吸を行ふて發聲

する、乃ち是だけである、而して成るべく長く其發聲を續けるのである、斯くして各音を反覆演習し、注意に注意を重ねて圓滿な豐富な、優しい美しい聲を發すことを練習するのである、

右に次で練習すべき緊要な事がある、即ちそれは音階の事である、

この音階は凡て音樂の土臺

であるから、この土臺が確かでない以上は、何んな音樂でも成りたつものでは無い、丁度砂の上に家を建てたやうなもので、久しくは保たない、否、立てられぬのである、

以上述べた所で歌うと唸るの區別は粗了解せられたであらうと思ふが、筆を擱くに方りて尚ほ唱歌に二大禁物のある事を報じて置かう、即ち一は節を轉ばすといふ事と、各種の敎會で唱ふる讚美歌と稱する謂ゆる敎會節なるものとの二つである、

代人同士の婚約

佐々木千代吉

世間を歩いて見ると、諺にも、處換れば品換るといふやうに、難波の葦は伊勢の濱荻ばかりでは無い、殊に風俗習慣といふものになると、全く事實は小説より奇なる事がある、その風俗習慣の中で、結婚といふ事に就ては、是まで歐米では自由結婚であるが、東洋は總て干渉結婚であるといふやうに一般に認識せられて居るにも拘はらず、露國の或一部で行はれて居る結婚こそ實に奇中の奇で、全く本人同士は無關係で、代人が相互に其婚約を定めるのであ

る、隨分風習の異つた處があればあるもので、予も最初の間は信じなかつたが、その實際を見るに及んで一驚を喫した、で、聊か之を諸孃に紹介致さう、

男子が先づ妻を娶らうとすると、村中の娘を隅から隅まで詮索して、その中の一番氣に入つたものを何處其所の娘と撰定して置いて、サテそれから談判を開く爲に、その娘の兩親へ使者が向ふのであるが、その使者の役目は、自己の母親か、又は中年の他の婦人に限る、そこで其任に當つた者は、先方を知つて居やうが居まいが、別に紹介一つ持つでは無く、直ちに其娘の家を訪ねて兩親へ其由を通ずる、乃ち第一は結婚の事、第二は花嫁の持參金の高、その他結婚に關する一切の事柄を申込み、娘の兩親が委細夫等の條件を承諾さへすれば、花婿たるべき者は吉報に接する譯であるが、萬一不幸にして娘の兩親が不承知を唱へる場合には、婿殿に取つては甚だ器量の悪い話である、とは云ふものゝ、只其場限りで事は了るのであつて、娘本人は一切口を挾む事は出來ない、否、實際娘は其時に立會ふのでないから、誰から結婚を申し込まれたか、そんな事は知らないのである、故に假りに双方が相思の中でも、是また如何とも爲る事は出來ないのである、

談判破裂の場合には、先づそれとして、首尾よく妥協が纏つた場合には、嫁の家から何時何日よりは當方へ訪ねて來ても可いといふ事を婿殿の許へ通知してやる、すると婿殿は、

その指定せられたる第一日には、出來得る限り立派な服裝をして、何か土產物を見繕つて訪ねて往く、最早それよりは何度往つても差支ないのであるが、その訪ねて行く度毎に、必ず何か土產物を見斗つて持つて行かなければならぬといふのが昔からの風習となつて居る、のみならず、その度々の土產物の中、

一度は必ず肩掛を持つて行かなければならぬといふのが一種の規定となつて居る、その一度の規定は宜いとしても、斯

く許嫁が濟でから祝言まで、間が長びけば長びく程、娘の家は貰う物が澤山に出來る譯であるから、自然祝言を急がない之に反して婿の方では早く式を擧げたがる、それはまた無理もない咄、然らば式を擧げるまで爾う度々行かなければ可いと思はるゝが、是まで三日にあげず行つて訪ねるのが禮義となつて居るから、その習慣に逆ふと花嫁を手に入る事が出來ないといふ事になる、で、餘り祝言が長びくと其土產物の代ばか



りでも容易でない、故に現に餘り長びいた爲に、婿どのはあはれ文なしになつて、爰に其緣談が破裂したといふ例は尠なくない、尤も斯く破談になるまでに至つた場合には、婿は嫁の家に對して是までの贈品の返戻を請求する權利はあるが、サテ實際に夫を取返したといふは甚だ稀で、大抵は泣寢入りとなつて了う、併し人情といふものは世界何處でも同じこ

とで、たとひ一回でも、其樣な惡意で長びかして、其極破談にするやうな事をした家の娘は、自然將來結婚を申し込む人が無くなるから、親達は又夫を承知して居るから、さう無闇に遲延するといふ事は稀で、大抵相當な時機に式を擧げさせるのである。

その相當の時機とは、先づ大概は婚約が調ふてから後一ケ月か、遲くとも約二ケ月の中に、謂ゆる黃道吉日を擇んで婚約の式がある、これは双方の家族の面前にて行はれるのであるから、事實上眞の祝言と同じで、これによつて新夫婦の間は堅く結合せられてしまひ、何か餘程重大な事情が無くては、決して離婚する事は出來ない事になるのである、

此婚約式は嫁の家で行ふのであるが、之が行はれた後、程なく敎會で結婚式を擧げるのである。

いよ〱結婚する場合となると、婿の方は第一家屋と或特殊の家具を供給し、嫁の方では麻布其他世帶品の或一定の量を持ち出すのが風習で、斯やうにして新夫婦は早速世帶を持つのであるが、中には素より其準備の出來ないのも澤山ある、通常暮し向の良い家では、嫁が婿の襯衣一打、寢衣一枚、上靴一足と、是だけは持參する事になつて居る、而して其襯衣は嫁が自身で麻を紡いで織つて作つたものとしてある、けれども實際は麻布を買つて拵へるので、尙ほ畧しては出來合の物を買つて來て用を充すものさへ尠なく無い。

それから結婚の前一兩日の間は、右の品々を特に一室を限つて花嫁の家で陳列して置くと、やがて敎會の長老が來て、

夫等に神水を灌ぎ幸福を祈る

それが終ると嫁の友達は入り交り立ち交り其品を見物に來るといふ工合である、だん〱日が迫つて祝言の前日の夕方になると、中流以上の家庭では、婿は其獨身の友を招いで御馳走をする、嫁の方でも同じく其夜友を招ぐが、此女友達は一同で花嫁に別れの歌を唄う、而して其女客に供すべき菓子類は婿殿

の負擔に屬するのである、それが農家となると餘程風變りで、嫁の方の友達等は、結婚の前夕嫁を浴場へ伴れて行く、その往きにも返りにも、

嫁は大聲をあげて泣く

ことになつて居る、之に就て珍話がある、或英國の婦人が露國に滯在中、翌日結婚するといふ娘が、さも腸を千切らるゝやう、極めて悲しげに聲を張りあげて泣いて居る、その側から友達等が歌を唄つて慰めて居る狀を見て、そゞろに不憫の情に驅られ、通り過ぎて泣聲の聞えなくなるまで遠く見送つて居たが、何うも心が落付かぬものと見え、其夕件の婦人は一人の友達を伴れ、娘を慰めんものと其家を訪ねると、彼の花嫁御はさも嬉しく樂しさうな顏面をして居て、今の先まで泣いて居た者の顏とは何うしても受取れない、で、英婦人某は餘りに案に相違したので、狐にでも魅まれたのではあるまいか、と暫時は詞も出なかつたが、それにしても泣いた婦人は慥に此本人に相違ないから、倘ほ近寄つて事の次第を尋ねて見ると、その娘は笑ひながら、如何です、私の泣き方は上手でせう、との返答で、爰に初めて泣くのは狂言的で、眞實悲しいのでは無いといふ事が分つて、英婦人某も共に笑つて祝したといふ話がある、併し多くの中には、全く氣に染まぬ結婚の爲に、眞實腹の底から悲しくて、此時に擬らして泣く者がないでは無い。

結婚の當日には、花嫁と花婿とは、教會で相逢ふまでは決して顏を合す事は出來ないので、やがて長老の捌で式が畢つて後は、列席一同は嫁の親の家へ行き、其所で儀式ばつた饗應がある、それが濟むと、新夫婦は是から二人が棲はうといふ家のある者は其へ移る、それから翌朝双方の兩親をはじめとして、眷族一同の者は其新家庭を訪れて、新夫婦のものと共に珈琲を飲む、次で双方の兩親の家で宴會が開かれる、この宴會や園遊會といふ事が其後度々で、時としては交る〳〵一週間以上も續く事がある、これは列席者一同に取つて頗る苦痛で、この祝ひが濟む

と孰れも重荷を卸した心地がするといふが、それは左こそと察せられる。

次に之も露國の或片田舎の農家の間に行はるゝ事であが、それは婚禮の翌日、

嫁より夫に一本の鞭を贈る

ので、其鞭は毎時も寢床の上に掛けて置いて、時々使用せらるゝとの事であるが、それは如何なる場合に使用せらるゝやといふに、聞くも忌はしき、

夫が其妻を鞭つ爲である●

と聞いては、實に驚かざるを得ないのである、百年の苦樂を俱にし、偕老同穴の契りを結ぶと同時に、その最愛の妻を鞭つべき道具が用意せらるゝさへあるに、而かも其が妻より良人に贈らるゝと聞いては一種異樣の感に堪へないのである、それ所ではないます／＼不思議なのは、

貞操の妻ほど撻るゝ事を好む

と聞いては更に驚くの外は無い、然るにまだ／＼不思議な事には、

撻なければ妻が不滿足

を唱へると聞いては最早吾等は發すべき言辭が無いのである、如何にも是は虛僞のやうであるが、決して左樣でない、前記英婦人の話に、露國の某家で傭つて置いた乳母の一人が、主家を辭して他に嫁しづいてから未だ日數幾日も經たないのに、村の巡査駐在所へ驅け込んで、良人は自分を愛して吳れないから、何うか說諭して吳れとの歎願である、そこで巡査は如何してお前は其を知つたかと詰問すると、その新婦は平然として、左樣婚禮してから、未だ一度も良人は私を鞭ちませんからと答へたとの事であるが、何か是には傳說的の意味でもあるので、眞に鞭つのではあるまい、

我國でも結婚後親類緣者等の家を廻るが、露國の農家では、謂ゆる水呑百姓となると、新婚の夫婦は祝詞を享ける爲に地主の家に行く風習で、家の入口まで行くと、地主は其處へ出て歡迎する、此時新夫婦は頭が殆んど地に觸れるまで俯伏くのが儀式となつ

て居る、數へ來れば限りが無いから、先づ此位にして止めて置かう、

初秋の山野

中居英道

古へから土用央に秋風ぞ吹くとかいふ如く、今年は近年に無い暑熱であつたが、土用が明けば直ぐに立秋となり、暑い〳〵といふ中に日が經つて、最早八月も過ぎて九月となつたが、九月といへば秋の初めであるが、殘暑はなか〳〵烈しいので、夏の土用中よりも酷いけれども、併し時節の遷り變りといふものは爭はれないもので、日中は如何なに暑くても苦くとも、朝と夕暮との涼しいことは確に暑中と異つて居ります、それ故に田の面を見渡せば、ツイ昨日までは綠の波を打つて居た稻葉も、今日は最早青白い穗が出揃つて、恰度白浪の泡立つやうに風に搖られて居る、斯く稻穗が僅に出たのは晚稻で、早稻は最早穗が黃ばんで、風が吹けば黃色な浪がうねうねして居る、實に初秋の野山の眺めは一入であると同時に、大いに我等が心を冷す事がある、それは秋雨秋風である、その中にも今年は暴風雨が多いので都鄙ともに額に皺を寄せて居る、殊に此初秋には農家の大厄日と稱するものが二つある、何うか無難に過ごさせたいものでありますが、と云つて是ばかりは人爲で如何とも爲る事が出來ないのである、

乃ち誰しも暴風雨の後には、もしも此世の中に風雨といふものが無かつたらばと、チヨツと考へる事であるが、併しこの

天地間に風と雨との二つが無かつたならば、迚も我等が生命を維ぐべき米も麥も、其他の蔬菜類までも發育するものでは無い、その中にも五穀の類は、雄蕋の花粉が風に送られて雌蕋に附くので實るのであるから、萬一この風の力といふものが無かつた時は、我等は忽ち飢餓に迫るのである、

斯くまで大切な風も若しも一朝先頭のやうに暴れ出したが最後、非常な損害を與へるので、殊に初秋の交に此暴風の多いのは謂ゆる農家の大厄日と稱する二百十日、この二百十日といふのは、節分の翌日即ち立春の日から勘定して二百十日目を云ふので、平年と閏年とで一日の差があるから、この二百十日も大抵九月の一日か二日に當るのである、之に次で暴れるのが二百二十日で、この二百十日と二百二十日との大厄日は、必ず其日に暴風雨があるといふに極つて居るのでは無い丁度この頃は氣候の變り目だから、その前後には必ず來る事だけは疑ひない、で、多年の統計に依れば、

九月の十三、十四、十五の三日の中に最も多いとの事である、何故であるかと云ふに、是は地球上の或一局部に甚しい低氣壓が生ずる爲に、他の高氣壓の處から激しい勢で、風が渦巻きのやうな態で、低氣壓の方面へ向つて吹き込むのである、それ故に低氣壓の場所は暴風の中心となり、それから此低氣壓の部分は次第々々に他の方向へ移つて行くのであるから、暴風もまた其低氣壓の進む方面に向つて移るのである、而して二百十日の前後に我國に襲ふて來る暴風雨は何處よりするかと尋ぬるに、彼の印度の東に當るフキリツピン群島の東方の海中に低氣壓が生ずる爲であつて、その低氣壓の中心は漸次に概ね北に向つて進行する、とは云ふもの丶其進路は一定して居らぬが

通例は二つの路を進む即ち其一つはフキリツピン群島から北に進み、

九州と中國とを暴して日本海に入るものと、他の一つは我南海岸から

本州を通り、北海道を貫いて北部の海に入るものとの二つである、故に稻田を襲ふ風は何うしても防ぎやうが無いのであるが、之に引き換へ林檎や梨、柿、葡萄といふやうな秋の果實は、毎年吹き來る方向に松とか杉とか、又は其他葉や枝の茂る並木を植え付けさへすれば幾分其害を防

く事が出來るのである、大分質實な話ばかりで退屈されたか知れないけれども、米穀を常食とする我國の人としては、男女に拘はらず此位の事は知つて居らなければならぬ事と思ふものから、最も其大体を述べたのでありますが、是より少し目先を換へ、天氣の晴渡つた日、秋の野邊を徘徊すれば、第一に目に觸れるものは種々の草花で、遠い山、近き畑、皆緑に彩られて居る中に、赤き、白き、または黄、紫など樣々に秋草が咲き亂れて居る景色は、實に得も云はれぬ風情のあるものであるが、その秋草の多きが中に、特に世の人が賞觀する七草は、別けて各自に一種の趣があるからであらうと思はれる、而して此七草の種類に付ても、時代によりて多少差異があり、また其質は同樣でも其名稱を異にして居るものなどがある、乃で今は古來から歌人詩人等に歌はるゝものに就て、少しく其植物形態等の興味ある事を述べて見やう、

第一は　萩

であるが、これは高さ五六尺位の灌木であつて、山野に自生し、又は庭園に栽培せらるゝものであるが、其莖や葉の形の細く小さく、如何にも優美なのと、其花の愛らしいとの爲に觀賞せられ、昔から人が賞美もし、種々に手入れをして培養した爲に、今では樣々な變種も出來て居る、その重なるものは宮城野萩、山萩、本萩などで、中にも宮城野は、一名糸萩とも又はみだれ萩とも稱へて、花の枝は長く垂れて糸の如く、花には白いのと紫のとあつて、その花の壽命も大分長いので最も賞美せらるゝ、萩の花は豌豆や蠶豆などの花に似て、恰も蝶の形に似て居る所より、之を蝶形花冠と名けられてある、

第二は　尾花

で、これは芒の穗の出たのを云ふのであるが、何故さういふかと云へば、芒の穗の形は、殆んど獸の尾のそれに似て居るといふ所から尾花と名けたのであるといふ説がある、それは何れでも宜いとして、この芒は、稻や麥などゝ同じ類に屬するので、禾本類

といふので、莖が細長くて、節の高い事や、葉の脉が皆並んで居て、裂けば竪に割れることなどが、此類の特別な點である、而して尾花の白い毛は何かといふに、

是は芒の種子に生じた毛であつて、種子が十分に熟すれば穗から離れ、その毛を風受けにして思ひ／＼に飛んで行き、さうして其所に落付いて芽を出すのである、ツマリ是は芒が自分の子孫を四方に蕃殖せしむる方法で、風は其媒介者である、

第三は　葛

で、この葛といふのは蔓草で、その葉の形はやゝ豆それに似て居て、莖にも葉にも一面に茶色の毛が密生して居る、秋になると葉の附根から三四寸位の房が出て、その房に數多の赤紫の花が咲く、その花は萩や豌豆と同じ形で、やはり蝶形花冠である、實に亦大豆の莢によく似て居る、此葛といふは却々有用の草であつて、其蔓では繩を作り、皮は細く紡いで布を織り、又蔓と葉とは家畜の飼料として貴ばれ、その根は搗き碎いて葛粉といふものを製するが、この葛粉は我等の食料に供せらるゝもので、これまた其價の廉くないもので、普通世間で葛粉と稱して市中で販賣して居るものゝ多くは馬鈴薯から作られたるものである、

第四は　撫子

で、一名瞿麥とも稱ふるものであるが、是は大抵一尺餘りの草本莖で、もと山野に自生したものであるが、其花の愛らしく美くしい所から、遂に庭園にも移し植えて觀賞せらるゝ事となつたのである、而して其莖は細くて、花瓣は比較的大きく、色は重に淡紅で、その緣邊がぎざ／＼に裂けて居るから一入の風情がある、また石竹と名けられて、盆栽にもせられ或は庭園にも植えられてあるものは、昔時支那又は朝鮮などから舶來したもので、一名カラナデシコと云はれて居る、我國の原野に自生する撫子に比べると、石竹の花は花瓣の緣邊の裂け方が淺い、のみ

ならず、其色にも様々な變種、即ち白、赤、紫、絞り、一重、八重等がある、さうして一体に我大和撫子よりは花瓣が大きい、之を東京では一名常夏とも呼ぶのである、

第五は　女郎花

で、是は黄色な花で、三四尺位の高さの草本莖で、その花の形は至つて小さいが澤山にある、而して花に近い小枝が皆黄色であるから、遠方より見ると一つの大きい黄色な花のやうに見える、斯様な花であつて、何となく愛嬌のある所より、昔の歌人や風流な人達は、女郎花の花の色は

蒸したる粟の如し

と形容して居る、能穿つた句である、

第六は　藤袴

で、これは莖の高さが三四尺から六七尺位までも延る草花で、宿根性のものである、莖の頂に澤山の細



い枝を出して、その先に小さな淡紫色の花が咲きます、この花の形は小菊の心に似て、別に目立つやうな花瓣は無いから、實は一向に見榮のする花では無いが、去りとて其花瓣が美しくない代りに、他の花

に無い一種の高き香氣を有つて居る、故に古へ孔子といふ方は、之を君子の徳に喩へて、君子と倶に居れば紫蘭の室に在るが如し、久うして其芳を知らずと云つて、何時か其徳に感化されて了うものであると言はれてある、藤袴とは即ち此蘭の事である、

第七は　朝顔

で、世の人が通例朝顔といふのは、垣根などに卷きつく蔓草の牽牛花を指すのであるが、昔は垣根に植え付ける木槿一名ハチスをも朝顔といひ、又今日稱ふる所の桔梗もまた朝顔と云つたので、それは古今の歌などを撿べて見れば直ぐに判かるのである、一体今日の謂ゆる牽牛花なるものは、時代は判然しないが、兎に角舶來したものに相違ない、で、桔梗を指すといふ説が正しいやうに思はれると云ふものはこの桔梗は仕古より我國の山野に自生して居た事は疑いないやうである、殊に秋の七草といへば、直ぐに誰しも萩、桔梗、カルカヤ、女郎花などゝ口占むのでも爾うと察せられる、

この桔梗も矢張宿根性でよく、生長すると三四尺位の高さに達する、殊に日當りの良い所では生ひ茂る、莖の頂に青紫色の五瓣の花を開くが、近年は植木屋が淡藍、白色、八重など様々の變種を作り出して、孰れも花が婉麗である所から、鉢植や庭園に培養して觀賞せられる、而して根は藥用に供せられ、また其若い芽は茹でゝ水に浸し、苦味を除いて浸し物として食膳に供せらるゝ事がある、

尙ほ秋の山野に出づれば、眼に觸れ耳に觸るゝもので、我等の身心を悅ばしむるものは數へ立てがならないのであるが、それは諸孃の得るに任せる事として筆を擱く、

日常の飲料

大岩喜代二

われらが日常用うる所の飲料と云つても、男子と女子とに依りて好き嫌ひがあるけれども、先づ十人

が十人、男女を通じて好む所の飲料と云つたら茶、珈琲、煙草の三種に指を屈するであらうと思はれる、そこで夫等の飲料は我等の精神上および身体上に如何なる効力のあるものか、又は有害なるものであるかといふ事を詮議して見るのも、強ち無汰な業ではあるまい、否、頗る興味のある事と考へる、で、聊か夫等の身元調べをして見やう、

吾等の日常用うる第一の飲料なる茶は、云ふまでも無く茶の木の葉より製せらるゝもので、その茶素といふものを發見したのは近來の事であつて、之が分析上、上等の物ほど多く茶素を含んで居て眠氣を醒す効があるといふ事が知られたのである、よく夏になると水茶と稱して、清冽なる水で立てる事があるけれども、夫では茶素が溶けない、矢張湯が宜い、といふものは、湯で無ければ十分に茶素が溶けないから、従つて効力が無い、そこで幾百年來の經驗で、湯を用ゐて十分其効力を發揮せしめ來つたので、その有効性分をアルカロイドと稱するのである、茶は其葉を生にて味はつて見た所が只澁いばかりであるが、一旦この葉を乾すとか、或は蒸すとかすれば初めて茶の眞の味が出て來るのであるから、茶の香氣といふものは天然に非ずして人工を加へて生じたものと云はなければならぬ、これは元來植物中に含まれたる性分が、同じく含まれたる他の性分によりて分解せられ、こゝに初めて現はれて來たものである、即ち鹽化俺母尼亞が、單に其物のみでは香氣を發しないけれども、之に苛性加里を加へると芳香を放つと同じ理である、

凡て植物の中に含まれたる、酸とか鹽とかいふものは、其物が生活力を有つて居る間は、決して他に觸れないやうに出來て居るが、一朝それが枯死すれば、是まで相互の間になつた膜が無くなつたり、或は水が通ずるやうになつたりして、茲に種々の性分が化學的の變化を起す、茶の香氣も亦斯くして出來

たものである、

茶の製法には、摘みたる生葉を蔭干となしたるもの、水蒸氣にて蒸したるもの、熱湯に直接に浸けたるものとの三法あつて、味もまたそれ〴〵に異うもので、殊に湯通ししたるものは黴菌の働きが止むが、併し之を焙爐にかけて乾かすと、種々の酸殊に鞣酸との分解を起して、元來茶の中には無かつた種々の性分、即ち味とか香氣とかいふものを發作するのである、云ふまでも無く香氣は揮發油の一種で、我等が特に賞翫する所であるが、茶の中には之が若干まで含まれて居るかといふ事は未だ實際分明になつて居ない、けれども澁味の中に一種の甘味を有つて居るのは鞣酸の作用である事だけは疑はない、

茶を湯に溶かして鹽化カルシウムを加ふる時は、次第に濁りて黄色となるが、石灰分の多い、俗に硬い水で茶を入れると、茶の中の鞣酸は葉の中に沈澱して了つて、少しも溶解しない、又鐵分のある水なれば黒い色となる、茶素は前にも云ふが如く冷水には溶けないが、温湯には最も溶け易い性質のものであるから、

湯冷しをするの理

も畢竟は此所にあるのである、第一餘り熱い湯で茶を入れると、その揮發油は皆發散して了うので、香氣といふものが無くなつて了う、

茶の性質は土地によりて性質が大に異なるものであるが、若き新芽ほど良いので、そして

太陽の光線の強くない

所が可い、茶といふものは成長するに從つて、我等の好む茶素の分量は多く他のものに變じて、鞣酸の分量は増すものである、

そこで我等が日常に飲料として使用するには、餘り上等の品よりは中邊が宜い、で、東京では近年番茶が流行するが、是は左まで褒めたものではない、上茶を餘り多く飲むと神經を刺戟する事が甚だしいので、それが爲に不眠症に陷る事がある、よく寢際に濃い茶を飲んだ爲に寢そけたなぞゝいふのは此理

に外ならぬのである、それから食後に用うるものは何方かと云へば、甘いものよりは澁味の勝つたものの方が良いとしてある、

次に珈琲は如何といふに、これは素亞細亞の産であつたものを、何時の頃よりか澤山西洋に傳播したものであるが、一本の木から多きは七八斤、少くとも五六斤は產する、その實は恰も銀杏のやうなもので、外部の肉を腐らして、而して其種子を採るのである、此物の良否を定むるにはコフエンの分量にあるのでは無くして、味とか香氣とかに在るので、その香氣は珈琲中に含まれたる糖分が、煎られたる爲に素芳香性の一分が香氣に變じたものである、

これも茶と同じく睡氣を醒すもので、分拆すれば大抵茶と大同小異であるといふ事が證明せられて居る、けれども珈琲は茶と異つて、初め熬つてから粉に挽いて飲むものであるから、茶素と略同じき所のコフエンといふものゝ分量が少ないから、

茶一杯と珈琲三杯

といふ位の割合に當るのである、

歐米では日常に之を飲料として用るのであるが、去りとて下層の者は之を飲む事が出來ない、價が高いからである、そこで蒿苣の根を薄く切りて、日に乾して熬る時は、恰も珈琲と同じやうな味を有つて居るから、概して之を用うるさうだが、我國に在るものと、價の安いものには、一度湯にて煎じ出したる、謂ゆる

搾り粕を利用し

之に種々のものを混じて賣る事があるから、餘程よく注意しなければならぬ、彼の珈琲入り角砂糖などは餘り賞美したものでは無い、で、單に粉に挽いたものゝ方が良い、けれども是も前述の如く混せ物がしてあつて不安心と思ふならば、珈琲を生のまゝで買つて、自分の宅で挽けば、是に增したる正眞正銘の物は無い、その製法は、餘り黑くならないやうに適度に熬りたる後、之を平たきものに揚げ、成るべく平らに廣く展べて急に冷さなければ不可ぬ、さう

でないと、茶を熬つた時と同じく、
　自ら火を發して燃出す
といふ危險があるのである、その冷えたるを見斗ひ、餘り細かくなく、又粗くなく、謂ゆる程々の加減に挽くので、之を使用するには新らしきフラチルを今一度灰汁にて洗ひ、更に清水にて濯ぎたるものにて、先端の尖つた袋に作り、而して器に容れ、之に珈琲を投れて上より熱湯を注ぐと、非常に泡立つから、直ちに蓋をして、その悉く出づるを竢つて飲むのである、而して是もまた茶と同じく硬水を嫌ふことは異りは無い

總て茶でも珈琲でも、幾ら咽喉が渇いた、又は飲口が好いからと云つても、之を多量に用うる時は、爲に胃液を薄くして食物の消化を惡くする、それから種々の疾病を釀すの原因となるから、何事でも適度といふ事が大切である、

それから煙草ですが、これは若い貴孃方には御用のない事、たとひ有つたとしても、有害であるとの

一言を呈して、只管にそれを廢止せられん事を望むのである、

多摩川

石榑千亦

谷に湧く雲にまじりて夕けぶり
　たなびきわたる杉森のうへに
杉生ふる岡と岡との向ひあひて
　かたらふごとし水を隔てゝ
杉山の水に走せ下る山はなの
　いはほ危ふしゆるぐおぼえて
舟をすてゝ傘ひとつ行く坂路の
　ちいさき杉をわれなつかしむ
わたし守小屋に入りたるしばらくを
　鶺鴒なきて船ばためぐる
さきだちし蟬のゆくへを見失ひぬ
　桑の木絕えし畠の小みちに

電車の話

理學博士　田中正平

英國は鐵道の本家本元

列車を運轉するに、電氣を應用すれば希望の高速度を得ることは曾て女鑑誌上（第十七年第三號）に記載したが、動力を電氣に變更するには、種々經濟上の都合が關係して、迚も行はれぬ場合が必ず多數である然らば從來の如く蒸氣機關車を用うればどの位の高速度を出し得べきかと云ふことも亦面白い問題となるのである、此方面に於ても夫々專門家が苦心慘憺研究を怠らぬのみならず、機關車の改良に就ては、資財勞力を惜まずに奮て之を施行した當業者が多くあつて、近時著しい進歩をした形跡が赫々として顯はれて居る、此競爭に與つて大に力を致して居るのは英國米國佛國の各鐵道で、近時獨逸のも之に加つて參た、英國はさすが鐵道業の本家本元だけあつて、又早くより運輸增進の必要に迫られたによつて、卒先して線路の改良を行ひ、強大な機關車を走らせることを得たのであるから、高速度の列車運轉を開始したのも、英國であつた、歷史を調べて見ると、慥か四十年前、既に英國東北鐵道會社では、單獨働輪軸式機關車に旅客列車を付けて、八十七哩の速度を出したことがあるさうな、八十七哩とは實に豪い、今日でも中々其上に出ることが容易でない、又近年に至つて一番速い列車として世に知られて居るのは、彼のアトンチック、シチイプライヤーで、五十五哩許りの處で以て平常六十八哩の平均速度を示して居つて、臨時に八十一哩出したことがある、是は先づ一等と看做して宜しい、次は英國であるが、凡そ十三年以前より各鐵道が競うて高速度を出すことゝなつた、其中短距離で一番速いのが東北鐵道のダーリングトン、ヨーク間六十二哩、カレドニアン鐵道のフオルフアール、パース間六十一哩の平均速度である、又長短離の方では先づ米國で、エンパイヤステイトエキスプレッスの五十三哩、又倫敦エ

デムバラ間五十一哩、佛國で巴里カレー間五十六哩、是等が最も速い、米國の主なる長距離急行列車の速度は豫想外に小さなもので、三十四哩から四十三哩の間である、以上述た所のものは孰れも實際毎日遣つて居る高速度の例である、試運轉とか特別列車とかでは之よりも遙 餘計に出した例はいくらもある、

速力の程度

次に機關車の拵方によつて、無究に列車の速度を增加することが出來るかといふに、實際上之には限りがあるもので、機關車各部の作用上、それから搆造上寸法の關係等によつて、自ら速度に限度が付いて來る、先づ人で申しても脛の長い人は速く駈る、之と同じことで車の徑が大きくなければ機關車も矢張其割に速く動く、と申して車の徑を無窮に大きくすることは出來ぬ、之を大きくするには軌條間の幅が不足になつて參るので、つまり車の徑が軌道の幅によつて限られることになる、歐米で主に用ゐられて居る、夫の四呎八吋半のノーマルゲーシ、

即ち本邦で通常云ふ所の廣軌道であれば、働輪の徑は先づ凡そ七呎を以て限度と見てよからう、尤も七呎二吋位のは稀にはある樣であるが、夫より以上は迚も行はれぬやうで、之より大くすると機關車の現今行はれて居る大體の構造では座りが惡くなつて、頭が重くなつて顚覆する危險が起つて來る、偖て働輪の徑を七呎と定めた所で、是は如何程速に廻轉せしめ得るかと云ふのが次の問題となる、動力として電氣を用ゐますれば、車の廻轉數を自由に定めることが出來るのであるが、普通機關車に付て居る形式の蒸汽機械では、中々さうは行かぬ、歐洲最近の經驗によると先づ一分時間に二百四十回乃至三百回が限度であると申して居る、之より速く廻轉すると云ふと、蒸汽の開閉が餘り速くなつて、道路内に蒸汽の廻りが惡くなつて參り、蒸汽が汽筩に十分這入らぬといふことになつて、蒸汽が無駄になる、尤もバヷリヤ國の新製機關車では、一分間の回轉數が三百五十四回に達したさうであるが、是は格別の場

合と見なければならぬ、そこで以て機關車が蒸汽を用ゐずに坂を降るときは、其速度に際限がない理屈であるが蒸汽力に依つて進行するとき、其働輪が一分時間に三百回轉すれば之を立派な成績と見做さなければならぬ、偖直徑七呎の車が一分時に三百回轉すると、どの位進行するかといふに算盤で遣つて見れば直ぐ判ることで、之が即ち七十五哩にしかならぬ、さうすると蒸汽機關車では廣軌鐵道で以て七十五哩以上は望むべからざるものだと云ふことになる、又實地列車運轉の場合には速度を減殺する事情が種々出て參る即ち勾配線、曲線、橋梁上、隧道中を運轉するときは、速度を緩めなければならず、又停車する毎に幾分か時間を空費するについては假令機關車が七十五哩走り得ても、列車の平均速度は之より餘程下るものと看做さねばなるまい、即ち先に述べた一時間六十哩内外を出して居る各列車は、蒸汽鐵道で實際出し得る精一杯の速度である、



空氣の抵抗力

又一方に於ては、列車の速度が增すに就て空氣の抵抗と云ふものが盛んに殖えて來るので、此點も少し考へて見る必要がある、元來速度が增すに從つて空氣の抵抗が殖えて來る率が甚だ急速であることは極つて居るが、前述の伯林附近の高速電車試運轉のとき實測した結果によると、列車が一時間に四十哩出るとき空氣を押し切つて進む爲に起る抵抗即ち列車自分が喚起した風の壓力が、列車の廻轉摩擦とか、或は列車が軌道上を此速度を以て走るに付て起る總ての抵抗力と同じことになる、又速度が六十哩になると、風の抵抗が二倍になり、七十五哩になると之が三倍で、九十哩になると之が四倍になつて來る、即ち九十哩の速度を出さうと思ふと、全動力の殆んど八割は自分が作る風の爲に徒費するので、六十哩でも此損失が中々夥しいものである、實に意外なことで又甚だ心細い次第であるが止を得んことである前述の試驗で四十八の旅客を運ぶのに千九百餘馬力を使つたといふのは、迚も容易に行はれぬ話である、

各國流行の機關車

只今各國に於て斯う云ふ風の機關車の寸法と云ふものは實に豪いものである、先づ汽壓は日本では普通百二十封度とか、百四十封度であるが、あちらでは二百三十封度迄も昇らせる、夫から傳熱面も先づ三倍で、二千八百平方呎迄參る、此傳熱面の大さに添ふ他の寸法が適當に定まれば、之に依つて馬力が定まるので、凡そ千九百馬力となる、次に火床面も亦四十八平方呎迄參つて、日本の三倍、機關車の重量が二倍に殖えて居て八十七噸、炭水車の重量が五十噸之も日本の二倍强である、先達て普國官營鐵道がヘンシエルと云ふ工場に命じて製作させた急行列車用の機關車は三百噸の車輛を曳いて、平坦線で七十二哩の速度を出したさうで、其とき測定された馬力は千七百二十馬力であつたといふことである、實に驚嘆の外はない、併し米國では近頃右以上の强

大な機關車を拵へる事になつて居る、例へばスケチクタヂー會社で近頃拵へたアトランチック式機關車では、傳熱面が三千五百平方呎、火床面が五十一平方呎、重量が九十一噸、炭水車が五十七噸であつて其強大なる點は、更に一驚を價するのである、此機關車に付きて最も著しい點といふは、レールの負擔力を利用することが一軸につき二十五噸に及んだことである、英國では此負擔力を一軸に對し、十八噸より十九噸迄進めて居るのは久しいことであるが、獨逸や佛蘭西でも十六七噸迄は參つて居る、であるから夫の米國の二十五噸とは全く異例である、即ちレールの負擔力は殆んど我邦の最大限の二倍增しになつて居る、

機關車の自働力

高速度列車を運轉するには機關車の馬力を增して其重量を成るべく減ずる必要が起つて來る、機關車が自分を動すのに、馬力の大部分を用ゐる樣では甚

だ不經濟であるからして、可成輕妙な機關車を拵へるのが德になつて來る、又速度が昇るに隨つて機關車の震動が甚しくなつて運轉の危險を增すと同時に線路を甚しく傷める、此等に對しても近年大に研究の功績が顯はれた、先づ機關車の構造を考へて見るに其中で最も重いのが汽罐であつて、大なる馬力を出すには汽罐內の傳熱面を多く要することは前述の如くである、併し汽罐の供給する蒸汽を經濟的に使用して多大の動力を變せしむることを得たならば、燃料の節約となるは云ふ迄もなく、比較的に輕い汽罐で以て用が足る譯になつて二重の利益がある、そこで蒸汽の効率を增す爲に、二重膨脹を用ゐることは、既に長年月に渉る試驗で以て、其利益あることが充分證明せられたによつて、急行列車用の大機關車は總て此式に依つて設計せられてあると申してもよろしい、又二重膨脹式の最も有利な裝置は四個の汽笛を用うるのであるが、此四筩二重膨胸式には、佛國にドグレーン式、獨逸にフォンボリス式

米國にヴォークレーン式、コール式が專ら行はれて居つて、孰れも好成績を示して居る、次に機關車には、蒸汽の作用で車輪が廻出す、その中間に必ず前後動をする部分と、上下動をなす部分があつて、是等が皆機關車の震動を起す原因となるものであるが、機械の配置が宜しいときに、一方の機械が上に昇ると、他方に同形の部分があつて下方に降るといふ樣にするが、又は一方が前へ進むときには、同時に他方が後に退くといふ組合せが出來れば、機關車の震動の大部分が互に相殺せられて消滅す、汽筩を四箇設置すれば殆んど全く此目的を達することが出來るのであるからして、最新式の四筩二重膨脹式機關車は、孰れも右に申した樣に装備されることになつた、それ故思ひ切つて高速度を出すことが出來る、其外經濟的蒸汽使用の目的を以て、此節は過熱式が大流行である、是は未だ試驗時代を經過せぬけれども、將來大に有望である樣に見受けられる

輕便日常料理

中島鎮子

九月といへば最早秋の初めなれど、まだ殘暑の折からとて、何を箸にするも口觸りの不味きものなれば、成るたけ御口に召すものをと心を注ぎて撰びたる、今日此頃の季節に於ける日常の輕便料理法を記述すべし、

朝飯

朝飯には大抵何處の御家でも、副食物は第一に味噌汁でありますが、サテ毎日の事でありますから、その中へ入れる品物も澤山ありますが、今その種類を擧げて見ますれば

△茄子の皮をむき、薄く打ちたるもの、

△冬瓜の皮をむき、細くせん切りにして、斜切りにしたるもの、

△茗荷の子を竪に薄く打ちたるもの、

△新午蒡のさゝがしたるもの

△根芋を一寸餘りに切りたるもの、
△新蓮根を、わさびおろしにて擦りおろし、うどん粉を少し入れて球にしたるもの、
△南瓜の薄くはやしたるもの、
△甘薯を手ごろに切りたるもの、
△牡丹菜の葉をかき、適宜にきざみたるもの、
△摘み菜、

漬物類

△檜扇漬　手頃の茄子を、皮とも竪に二つに切り、更に皮の上より細かく切目を入れおき、別に茗荷を薄く切り、青紫蘇と互ひ違ひに挾み、また其間に青蕃椒を少しづゝ挾みて鹽漬となす、食する時に醬油を少しかけて用うれば、至極風味の宜きものなり。

△松葉漬　これは煮茄子の皮を剝きたる、その皮を横に細く針の如く刻み、それに青紫蘇又は茗荷の類を同じく細く切りて、共に鹽漬となすものにて、食する際に、少し酢と醬油を注ぎ用うれば、また一入の風味あるのみならず、是ぞ眞誠の廢物利用といふもので、經濟社會に向つても大に誇るべき價値のあるものである、それから此漬物は當座よりは、却つて冬期に至り、鹽出しをなしたるものへ、同じく酢と醬油を掛けて用うれば、却つて季節違で趣きのある珍味である。

△ちやら漬　これは牡丹菜の葉をかき、横に細くきざみ、それに青紫蘇、茗荷の子、青蕃椒等を、同じく細く刻みて鹽漬となす、食する時に、醬油少しかけて用うるも宜し、尙ほ酢を少し加へたるも至極味の好きものである。

晝食幷に晩餐

野菜物の部　但し煮附物

△新里芋　これは殊に煮方に秘傳のあるものにて、ツマリ煮てから粘液の出ないやうに煮るのを料理方の最も良い腕前として、目黑の名物として諸孃の能く食しあがつて御承知の通りであるが、その煮方は、先づ芋の子をよく洗ひあげ、目笊に並べて水氣を取り、鹽を振りかけて、約二十分間ばかり其儘に置き、

再び洗ひて鍋に入れ、水を少し注ぎ、醬油と砂糖を適宜に入れて、濁らぬやうに煮るなり、但し右の鹽を少し振りかけるは、芋を濁らさぬやうにする吾が秘傳にて、尤も煮る際にも其心して煮るを肝要とするものなり、而して煮上げたるものを器皿に取り、柚子を山葵卸にて卸したるものを散布して食すればチヨツト素人離れして殊に妙なりとす。

△新蓮の檜扇煮　蓮の皮を去り、尤も長短に由れども、凡そ一節の間に庖丁目五つ程を入れつゝ切り離して煮るものにて、醬油、砂糖、松魚節を入れて煮上げれば、その切目へ煮汁がよく浸み込みて味良きのみならず、齒の惡き人にても容易に食べ得らるゝものなり。

△豌豆の松葉煮　ゑんげんを湯煮て、一寸位の長さに切りたるものを鍋に入れ、醬油を心持ち多く入れ、少量の砂糖を加へ、約二時間餘り煮込みたるを食すれば、風味殊に宜しきものなり、

魚類の部

△洗魚の仕方　季節のものなれば鱸、鯛、こち、黒鯛、鯉などを材料に用うるのであるが、その仕方を云へば、まづ頭を切り去り、之を三枚におろし、皮を取り去り、小骨を毛拔にて拔取り、肉の纖維を逆に薄く切り、鹽水にて洗ひあげ、再び眞水にてよく洗ひ、目ざるに取りて水氣を取り、皿にガラスの簾を敷きて其上に格好よく盛るべし、併しその盛方は、箸にて身を立るやうにする事肝要なりと知るべし。

△鯛のうしほ　これは一寸仕方のあるものにて、最も大きな鯛の頭の中でも、目の個所を賞翫するもの故、目玉を中心に取り、損せぬやうに細かく椀の中へ適する程に切り、是を皿に並べて鹽を振り、約二三時間の後、鍋に湯を沸し、その煮立ちたる中へ入れ、サツト湯煮して揚げ、その油を取り去り、別に削りたる鰹魚節と、少量の鹽と酒とを同時に鍋に入れて煮出し、その湯玉の立登るを度として火より下し、裏漉にて鰹魚節の殼を濾し去り、その煮汁を再び鍋に注ぎ入れ、その中へ鯛の肉を入れて少しく煮

立てたるものを椀の中に盛る順序なるが、斯く調理するときは、如何なる油濃き大鯛にても、最早油の無きのみならず、絶えて汁の濁る憂の無いのは眞人の料理方である、それに之は當季節であれば、抽子の皮をチョット剝ぎて入るべし、

夫婦觀

千勝義重

▲所有階級を通じて、夫婦と云ふものに色々ある。まづ親の撰定に與つた夫婦、是が最も多數を占めて居る。その中にも亦許嫁と云ふものもあるが、これは今に於て蓋し稀有であらう。夫れから野合の夫婦体よく云へば自由結婚の夫婦、金が取持つた夫婦等であるが、細別したならば、隨分と多い事であらうけれど、今更そんな詮索でもあるまいから是れ位でやめて置かう。

▲斯様にいろ〳〵な夫婦があるけれども、果して皆よく夫たり妻たる本分を盡して、圓滿な家庭を作つて居るだらうか、表面は兎も角、其裏面までも覗ひて見たならば、恐く和合して居るものはあるまい。多くは仕方なさに同棲して居るものではあるまいかまたの縁がより良くあるだらうかと思ひ、或は此子女を捨つるに忍びずとし、或は其財産に免じて辛棒しつゝ、その縁を絶たずに居るのではあるまいか。

▲斯う考へて來ると、結婚といふ事は人生關門の第一である。從て此關門に入るに當つては充分に用意をせねばならぬ、若し用意が充分行屆かなければ、必ず途中に於て種々な苦しみに逢ふ、であるから未婚の諸孃は深く此點は注意せられん事を望む。

▲世には隨分不眞面目なものもある、夫婦は喰付きもの離れ者であるから、厭な者なら何も苦しみつゝ同棲するには及ばぬ、と云ふ様な親があれば、又、男のない國や女旱の世界ではあるまいし、好かぬ男なら、厭な女なら、去るばかり別かるゝばかりと云つた樣な人もある。おしなべて斯う云ふ考の世の中

なら、何も夫婦が何うの、人は斯うのと云ふ必要もないが、世の中は左程單純でないから困る。

▲物事は凡て初めが肝心であると同樣に、人も初緣に注意を掛けねばならぬ、初めから慾で結婚する樣な事であれば決して善い終りを見る事は出來ぬ。財産が何うの、係累が何うのと氣を揉むよりも、當の人たる、夫とすべき者、妻とすべき者が、果してよく自分に相應しい者であるかを見極めねばならぬ、といふて徒らに、身の程を忘れてまでさうせよと云ふのではない、相應と云ふ事を忘れてはならぬ。

▲よし不眞面目な人に一步を讓つて、夫婦はつき者離れ者であるとし、親の選定が自分の考と違つて居るから離れる、自由結婚とはいへ初め見たと其性格が違ふから別れる、と假りに其欲する所に從はしめてよい、が、此別離と云ふ事は決してよい者ではない。別離は則ち後來の幸福を望んだ結果であらうとも、末木に勝る元木なし、到底其初緣に比してよい者ではない。であるから、望んだ後來の幸福も遂に得ずして終る。何と心すべきではあるまいか。

▲親と親との約束ならば行かざなるまい泣く〳〵もとは昔から行はれて居る俗謠であるが、これは許嫁の義理、金錢上の關係とか、古い頭の考から、隨分世には親の爲に押伏せられて、結婚する者が少くない、で遂に相別るゝ憂目に逢ふ人も少くはないが、斯る類は、親を壓制的として誹るべきであらうか、それとも、子は全く之に從つて、總てを忍びつゝ心ならぬ契を結ぶべきであらうか。これは一概に其善惡を判斷する事が出來ぬ。

▲淸い交際を續けて、互に其性情を知り合ひ、相求めて偕老同穴の契りを結ぶ樣なのであるならば、自由結婚とても左程咎むべきではあるまいが、多くは氣隨氣儘な青春の慾望に驅られて、其妄想、其空想其夢想を現實に覩やうといふのが、當世流の自由結婚であるから、自由といへば頗る開けた事のやうではあるが、左程讃めた話でもない。



其の一　嵯峨の枯野

柳に伸びる春の日も花に暮るゝを惜みつゝ、世は月ありてこそ雪ありてこそと、大宮人のゆうにやさしとのみ見え玉ひし頃にやあらん、按察使大納言藤原の時世と云ふ人お在しけり、朝廷の御覺えもめでたく世にときめき玉ひけり、北の方の御腹に姫君一方ありて、今歳二八の春を迎へ玉ひ、霞に匂ふ顏の色、緑のお髮美しく、十二一襲の振もよくて、華やかに生ひ立ち玉ふうへに才賢くて學文はさらなり、諸藝にわたりて巧みなるが殊にすぐれて搔合せの爪音得も云はれず、聞く人皆耳を傾けゝり、かゝりければ父母君の寵愛はさらにも云はず、今の世の美人ともてはやす程に、上達部殿上人の若人達は、知るも知らぬも此君得てしがなと、われがちに心を惱ましけり、されば大納言も北の方もよき婿がねを定めんと、あれこれいひ入るゝ方もありけれど、容易はゆるさで擇び玉ひけり、其頃兵部卿の宮と聞え給ひしは、當今の御從弟にて御寄せも重く、

御容淸らかに、心ばえいとやさしき君なりければ、いかで此宮に配せ奉らんと、北の方は殊に願ひ玉ひけるが、右馬助仲持といふは、彼宮の殿へも大納言の家へも行かふ男なれば、物多くとらせて私語の序に、大納言の姫君こそ紫の上のゆかりの色に、玉鬘の光りを添へたるやうなれ、琴とり玉ふけはひなどは、天津乙女も如かじと思はれ候ふと、口にまかして譽めそやしければ、宮も御心動きて、いかで其娘一たび垣目見たしと微笑み玉ひけり、大納言は或日の徒然に姫君に琴かなでさせて聞きゐ玉ひしが、つく〳〵姫君の顔をうち守りて、何か思ほす事やありけん、うちしほれて見え玉ふに、姫君は調べ終りて、前栽の植木を心ともなくうち詠め玉ふに、美しき二羽の小鳥、長閑に鳴きかはしてむつれゐたりければ、傍への硯をとりよせて、

友鳥のうたひあはする聲きけばむかしの遊びおもほゆるかな

と走りがきし玉ふを、大納言はうち見てそゞろに歎息し玉ふ折から、衣の音しければ袂に歌をおし隠し玉ふ、北の方は大納言にむかひて、此頃は嵯峨野の景色いと面白しときゝ侍れば、明日は姫を伴ひて逍遙せんと思ひたちて侍るをいかで、御許しをと乞ひ玉ひければ、そはいと宜しからんといらへ玉ひしかば、北の方は喜びて、姫君に例よりも綺羅をつくさせ、一つ車にうち乘り、侍女數多從へて、嵯峨野をさして軋らせける、宮は御馬にて右馬助御供に侍はせて、ひとしく彼野に至り給ひしが、御車の近くを見て松蔭に隠れ玉へり、北の方は程よき所に車を停めさせて、姫君を進めて車より下り玉ふ、姫君はうす色に萠黄の紋のうち着を着玉へるが、さし歩み玉へるさまあでやかに、髪は袿の裾に等しかりけり、姫君は待つ人ありと知らで遊び玉ふを宮は松の下より出で玉ふを姫君は見つけて、顔うち赤めて急ぎ車に乘り玉ひければ、宮はなほあかず思ほしてか、其方を見送り玉ひしは、本意なくはありけん

其の二　住吉の月

松吹く風も住吉の、海士の苫屋のそれならで、面白う住みなしたる家あり、柴垣まばらに結び回らして、草の花多く植えたり、あるじは如何なる人にや、夕月の明きに琵琶の音の松風に調べあひたるいと心にくし、兵部卿の宮は年頃住吉の神を信じ玉へば、式部丞友方召連れて參詣ありし序に、松原のあたりに御車を巡らし玉ふに、彼爪音を聞きつけて床しさの餘り、下りて垣をさし覗き玉ふに、夜目にて色は定かならねど、なよなかなる乙女の、さし入る月影に映りあひたる容貌は、匂ひ濃やかに氣高くて此世の人とも覺えず、かゝる淋しき浦邊にかゝる人も住みけるか、彼の大納言の娘はあでやかに賑しきさま櫻の眞盛りとも云べく、これは淸らに品あがりたるけしき、梅の仄に薫るゝに譬へつべし、と思ほして友方に私語玉ふに、友方心得て柴の戸をほと〱と叩けば、内より女の童いで來れり、主人の君に對面玉はらんと乞へば、暫くありて主人出あふに、友方が知れる尼なりければ、互に驚きて是は〱とばかりに、絶えて久き情をのべたりけり、友方は尼君にさるにても今がた琵琶ひかせ玉ひしはいかなる人やらんと問に尼君は袖もて目をおし拭ひ、あれこそ按察使大納言が宮腹の一の姫君にて侍れ、母宮の姫君を生み玉ひて後、程なく果敢なくならせ給ひし故に、御乳人として尼の娘辨が育て參らせしが、今の北の方入らせ給ひて、二の姫君うまれさせ給しより、一の姫君をやう〱惡みて、父君にさま〲讒言いひ給ひしが、父君も初めのほどはきゝ入れ給ざりしも、終にはむくつけき、法師の姫君の許へ通ふと誣ひて姫君の住み給ふ西の對より、曉方にあやしき法師の忍び歸るさまをこしらへて、父君に見せ奉つりしかば、大いに驚き歎き腹立しうあさましく思ひて、夫よりは御動靜も詞も姫君につらく當らせ給ひしほどに、今は世に賴もしげなく、故母宮の御事を思ひ出で懷かしうもこひしきにつけて、容を換へばやとおぼしたちて、或夜に辨と共に此所に逃れ來給ひしが、お髮おろさんとの御心を、尼がいなと止めていたはり參らせ侍る程に、辨も其後間もなくなき人の數に入りたれば、姫君は

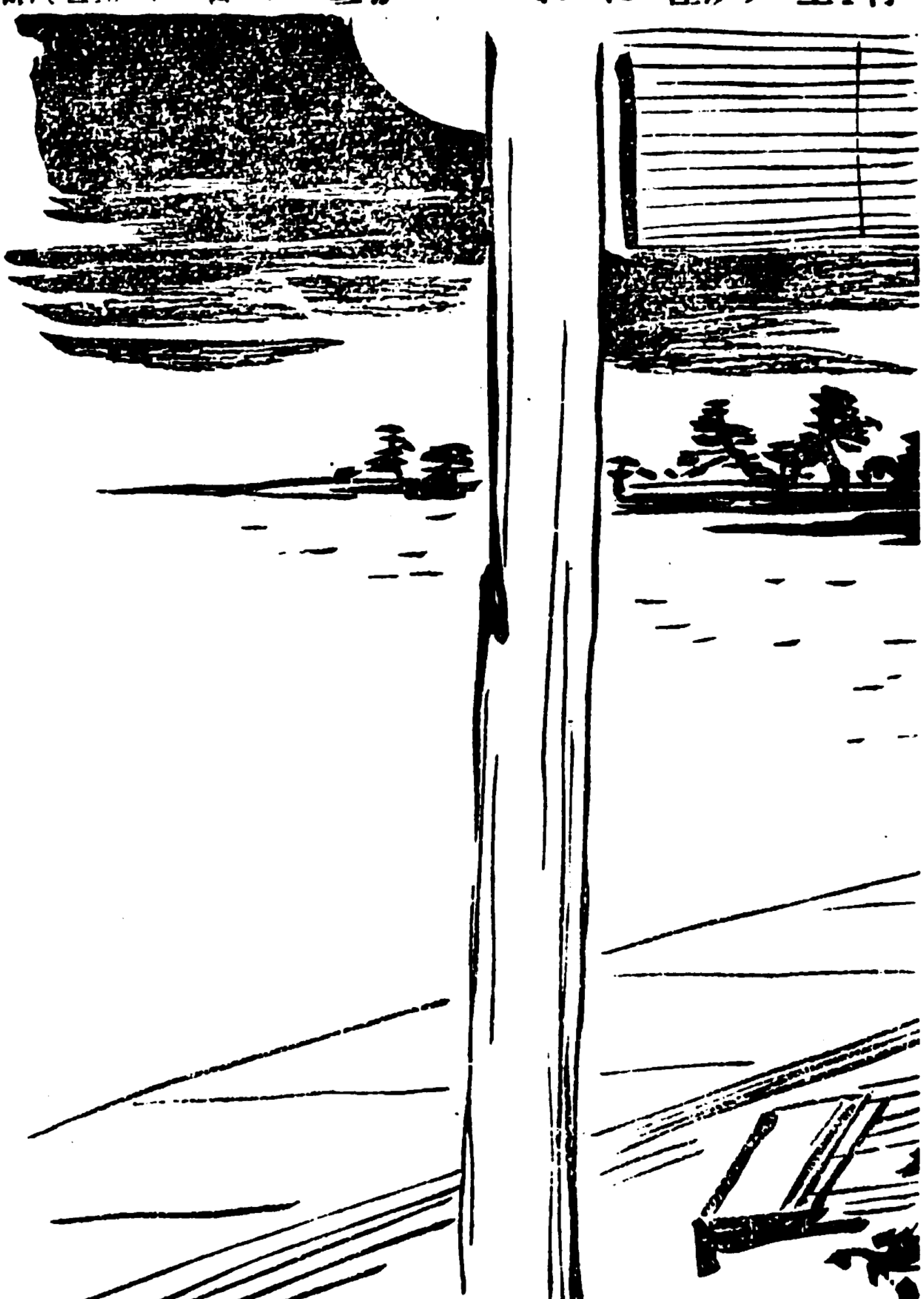
歎きに歎きを重ねてとく佛門に入らんとし給ふを今日までいさめて過し侍るなり、都にては姫君辨と共に失せしかば、大納言も二の姫君も一方ならず物思ひをまし給ひしかど、北の方のみは心に喜びて彼の法師と走りしならんと云ひ給ひし故、父君もげに然らん、さる不孝不貞の姫何かせんとて、跡をことさらに尋ねさせもし給はず、姫君を見棄てたるやうにもてなし玉へど、御心の中はいかなるやらん、二の君は折にふれて姉君を慕ひ玉ふと人づてに聞侍るなりと、語るも涙にくれたりけり、友方は聞毎にわが身のやうに思ひて悲しく、宮に云々と聞え上げゝればさらば今夜は、此所に宿からん、友方よく計ふべしと命ずるにぞ、又入りて其の由をいふに、尼は宮と承りて驚き迷ひ推辭申せどおして入らせ給ひぬ、昔の殿ならばいづれへか逃げも入るべきなれど、間少き家なれば、古几帳の陰に隠れ玉へり、宮はしひて姫君を誘はせ、尼友方と諸共に、歌よみかはしなどに一夜を明かさせ玉



ひ姫君は麿に任せよ、都に伴ひ行きてよきに計らはんとせちにの玉ひしかば、尼は御心に従ひまつりし故に、御副車に姫君をのせて住吉をたち給に姫君と尼はさすがに名殘をしまれて、暫がほどの別れと思へど、互に袂をそぼちける。

其の三　子の日の宴

過にし嵯峨野の遊に姫君を見せ參らせて後、北の方は宮の御意いかにと右馬助に聞に、宮はいたく擧め玉ぬとの事なれば、必ず宮より御使あるべしと、日に夜に待ち玉ど音づれも無き上に、宮は御物詣の序に田舍娘召連れ歸り玉ひしと、噂にきくさへ妬ましう、またさることはあらじと思ひ返して過ぎ玉ふに、新玉の年のはじめとなりぬ。宮より大納言に今日は子の日なれば、千代のためしして宴せんに、ふりはつて來玉へと御文ありければ、いなみもあへず出行かんとし玉ふを、北の方は袖引きたまひて、誠や人のいふは、宮の田舍娘をめで玉ふときけば、今日參りて其さま窺ひ給へと、心づけらるゝを聞流して宮へ參り給ふに、



待うけ給ひて、御饗應ねんごろなり、盃の數度重りて興に入ると見えし程に、宮は大納言に、麿近頃住吉にて引き歸りたる姫小松を、殊に養ひ置きつるを、今日の折に見せ候はんと、侍女に何か命ずるに、暫くして美しき裝ひしたる姫君徐かに出來給ふを、大納言は一目見て、こはそも夢かと呆れ給ふに、姫君も父君の僅なる程に老玉ひたるは、物思ひの故にやと、有かたうも悲しうも、懷しさに取交せて物だに得のたまはざりけり、宮は微笑みて、此小松の浪風の荒きに堪へかぬるを、いとをしみてかくは計ひしなり、我許にすゑ置き、千歳を契らんと思ふを、いかで許し玉ひなんやとの玉ひ出で、姫君の濡衣着玉ひし自一至十を語りきこえ玉ひければ、大納言は或は耻ぢ或は歎きて、宮の御志の淺からぬを感じ、姫君を宮にたてまつる御請をし給ひぬ、かくて日ならず婚姻の儀式取行ひ給ひければ、一の姫君の御榮に世に似るものなく、人皆羨みて其めでたきをいひはやすにぞ、北の方はなほさがなく、其事を毀り玉ふを、二の姫君は心うく思ひて、よりよりに諫め給ひしかば、大納言も心解けてゆるし給ひし程に、二人の姫君はうち喜びてうき事なくなりにけり、

宮の御仲立にて右大臣の公達少將に、二の姫君を合せ給ひ、又住吉の尼を都へと迎へ給ひしかど、姫君の御行末定りたる上は、辨が後生の吊ひなど心任せにしたしと願ふほどに、住吉に住ませておきて祿あまた賜ひけるとぞ、

主婦と女中

熊谷無漏

一口に奉公人と云つても、皆それ相當に兩親もあり、又兄弟姉妹もあるところの、謂ゆる彼れも人の子であるから、充分財産でも有つて、當世流行の學校教育をうけて、一人前の資格を有つたり、其他の女の修養を心得たいのは山々であらうが、下婢になる位の境遇であつて見れば、却々そんな餘裕も資本も無い爲に、便宜上他人樣の家庭に雇はれて、將來自身が一家の主婦となるべき實地の修業なり經驗なりを積んで、一ツぱし一人前の心掛を實地に練習して、謂ゆる學校の詰込主義でなく、生き〱とした實力の人となる方針に違ひない、して見ると一事が萬事で、主婦たるものは雇主即ち御主人といふ樣な虚勢や見識ばかりを張らないで、自身の行動が乃て彼等の模範となるものを、上を見て眞似る下であるから、常に家事内外の處理を爲る上に就て標本となつて、善良感化と同情とを寄せて、餘徳を施さねばならぬ、俗に魚心あれば水心とかいふ如く、女中や下男を使うにしても、その操縦が宜しき妙を得た主人は、愛恤の情を以て之に接するから、下の者もまた尊　處の念を以て、骨身を砕いても主家の繁昌と全盛とを計るといふ例は古來少く無い事である、もと〱大きな問題でなくとも、なか〱日々うるさい家事のそれ〱を處分して行くには、旦那樣や奥樣といふ將校の方ばかりでは手が廻らないから何うしても勢ひ分擔をして、處世の戰に應ずる兵卒たる雇人の、熱心なる應援を假らなければならぬのである、ツマリ共に〱和衷協同して、尊敬する主家の爲を思ひ、吾家の生産發達に助力して呉れる所の家族の一員と思つて親切を與へ、目をかけて遣らなければならぬのである、主人の方で愛恤の情を以て雇人を待遇すれば、雇人の側からも實際感謝の意は勿論、敬意を表して愉快に活潑に、希望を屬して主命に服從するのみならず、悉く忠實に職務に從事

するものである、苟くも其取扱の良好のに感激するの結果として、如何な勞苦をも少しも廻避たり、又は骨惜みをする樣や横着な心は無く、懶惰心を起さないで、寧ろ仕事の成績がハキ／＼と擧るから、其に準じて家運の隆盛を期し得る事が出來る次第となる、然すれば其双方の利の大なる事は、思ひ半ばに過ぐるものがあらうと考へる、

　たとひ奉公人とても皆何れも人の子である以上は多少の給料を與へたからと云つても、給金は此方のもの、勞働は先方のものといふやうな不實な了簡方で無く、常に之を使役中にも不愍といふ情け心を加へて、德に靡き恩に感ずるといふ工合に、慈善同情といふものを與へなければ不可ぬ、よしんば只の蒸氣や電氣の力で動くところの器械でさへも、これをノベツに使用すれば、自然と機關の自由な活動を殺ぐものであつて、如何なる精巧な製作品でも、融通自在な動機を與へるの結果とは爲らない、況してや人間であつて見れば、尚の事之を追廻しコキ使つたならば、迚も一日どころか寸時も勞苦に堪へ得るものでは無い、假りに間違つて堪得るものとしても、その行動に暗明が出來るのは爭はれないもので、主人の面前ではよい加減に忠實らしく働いて居るやうに見せかけて、謂ゆる御茶を濁して居らうが、若しも内所に立入つては、杜漏で無精で、怠けられるだけ惰けてやらうと、不德義な眞似をするのは隨分多くある例である、元來主人は給金を拂つて、その上高い米の飯を喰して居るのであるから、遠慮なく精一杯に使つて遣らうといふやうな、一片思ひ遣りの無い薄情な手段を取つたならば、雇人は只表面のみこれ命に從つて、却つて責任を盡さうとは致さぬといふ心細い始末になるものである、諺にも、人を使ふものは、先づ自ら使はるべしと云つてある通り、實際其心意氣で、氣兼をして待遇して遣らなければ、決して眞心から其主家の爲に勞苦を以て酬ゆるものでは無い、

　それで自家の爲に事務の責任を分つ人として雇人

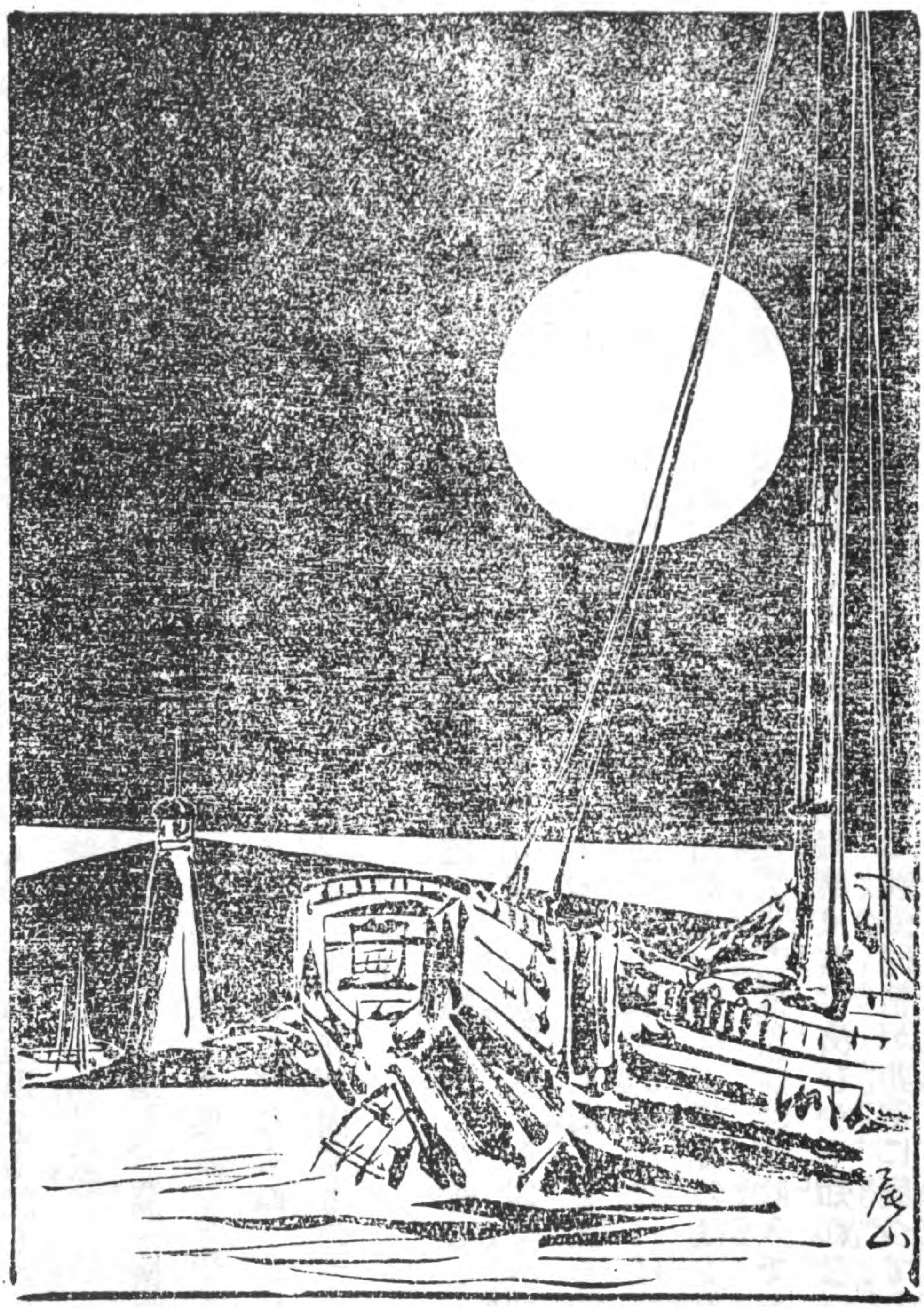
を取扱ふのには、大躰左の如き約束が必要であらうと思はれる、

第一　性格

これは主として雇はれる方の問題で、其主家の家風に適つたもので、外觀（体格、容貌、擧動等）内容（多少の教育、精神の温和善良なるもの）の割合に調和のよきものを撰んで其の長所を認めて、適當の任務に服せしむるのである、

第二　寛大

若しも雇人に多少の過失が有つたなれば、事を荒立てゝ激しく叱る事をせず、成るべく其場は無事に濟して、蔭へ廻つて人知れず懇々と將來を説き諭し、良心のある者なれば、自然と先非を後悔し改めしめるといふ風の寛大な處置を執り、決して頭ごなしにガミ〳〵と云はずとも、其の恩量に浴して益々注意と熱心とを增すやうに努むるので



ある、

第三　親切

事の大小に拘はらず、人を使用するものは、其人の苦心を思ひやりて、よく勤めてくれる、氣の毒であるといふ感謝の意を表すべきものであるから、充分に同情を寄せて、將來有望の者となるやうに親切を旨として、自分一家の利益ばかりに虐待する事は以ての外なこと、吾子も同樣に出世前の身体を犧牲にせぬやうに心掛けて遣らねばならぬ、

第四　公平

同じ奉公人でありながら、動もすれば、ひゐきびゐきを付けて愛憎の情を二つにするといふ事は惡い何事も公平を旨として、お互ひの感情を害しないやうに採り用ゐて遣らなければならぬ、少しにても不公平となり、輕重があつては、其極當人同志の角突合となつて、職務に圓滿を缺くやうな、却つて不幸を招ぐ基となるものである、

第五　信用

これなればと見込んで、わが一家族として任用した筈のものである以上、充分之を信用して仕事を委托するのは勿論、其のもの丶長所短所をも能く呑込んで、相當に事務の相談相手となる程に敎へ導きて、出來得る限りよき感化を與へて遣り、萬一留守の事があつても、立派に役目を果して呉れるやうに、平素から信用を置く者でなければならぬ、それも是も監督の宜しきを得ると否とに原因するのである、

要するに人を御する道には、精神的に德義といふ觀念(情)と、又一方には物質的に經濟といふ觀念(利)との二つの徑路があるものと思ふ、此兩者を能く調和し鹽梅して意志の疏通といふ事を計らなければならぬ、ツマリ雇人の方面から云へば、勞苦のは支出で、それに對して報酬(給金其他の物質)は收入であるけれども、物質上の報酬は其で濟むかも知れないが、期する所は一家族の親愛同情が非常に與つて力あるものであつて、何うしても精神的の慈愛同情な

るものが、寧ろ物質以外の結果を來す事は爭はれぬ、單に主從と云つたやうに、其所に一種の區劃を附けて奴隷のやうに取扱つたならば、神聖なる勞働に心服して從事するものでは無い、人生は意氣に感ずるといふ如く、雇人を使用するにも上手と下手とあつて、延て家政の整理上に大なる利害得失のある事は今更めて言ふまでも無い事と思ふ、單に金や物で操縱が出來ると思ふのは大なる誤りである、唯人あるのみで、毫も心を籠めて血の循りの良い遣ひ方をするのでなければ、長く一つ家に辛抱して呉れる實直な者は居附かない、さうなると共難義といふもので、絕えず奉公人の出代りが頻繁となれば、一家の體面を損じ、世間の物笑ひとなり、又其の當人が行く先〳〵で自分の事は棚に上げて置いて、惡ざまに勝手な熱を吹いて讒訴を爲る材料となるやうな恥辱の上塗をされるのである、それもこれも奥樣の待遇一つで、惡き敵ともなり良き味方ともなる、舊時使つて居た奉公人が、年始暑寒其他吉凶等を心に掛けて來て呉れるものは、深く其主人を德として、淺からぬ舊恩に感ずればこそであるから、お互ひに情愛も深くなつて、誠に心嬉しきものである、徒らに證文の上の契約で、一季半季の主人家來といふ風に、ホンの通り一遍の冷淡なものではお話にならぬ、或は奉公半ばに他の家の振合に心が動いて現金に辭し去つたり、中には偶然途中に逢着しても、知らぬ顏をして行過ぎるといふやうな不實な眞似をされるのも、畢竟は賣言葉に買言葉といふ工合式に、意地張と負惜みとの衝突であつて、かゝる成行は、もと〳〵主家も雇人も共に手前觀が强くて、薄情の致すところと思はれる、

　蓋し雇人とて終生雇人で滿足するのが强ち天職で無いから、矢張り獨立獨行の自前の人となり、他日一家の主婦となるのが終局の目的である以上は、出來得る限り一通りの常識を修養さして、普通の家政を整理して行くやうに見習はしめて遣るのが、主人たる者の當然なる義務では有るまいかと考へる、他

日一家をなして主婦となつた際に、曩の日受けた實地の教育なり、心得なり、將修養なりを思ひ出して、深く之を心に感謝して、實際の役に立てるから、新世帶を切つて廻すに當りて、何れ程參考となり、良き感化となるかは筆紙の及ばぬものである、一旦主人となり雇人となる、此主從の緣は多少の約束とは云ひながら、亦不思議な同情の連添ふものであるから、その情誼は單に雇ひ置く時ばかりで無く、一度去つて他に緣附くなり、又は新らしき世帶を作るなりして、舊恩に浴した德義を忘れず、屢次訪ね見舞つて呉れるのは、誠に良い功德を積だ餘慶であつて、何とも得も云はれない嬉しい心持のするものである、別言すれば、平素待遇の宜しきを得て、人を御するの道に巧者な結果と云ふに外ならぬのである、

世のあらゆる家庭の善良なる主婦方が、雇人の待遇法に協力して、その養成と奬勵とに研究を盡し、而して之が發展を計られたならば、如何程社會の爲に効力があるは云ふまでもなく、乃ては國家の幸福も之に過ぎ無いので、併せて生產力を增殖するの道にも適ふ事であると思はれる、凡そ物事の改良進步は、先づ手近な所から着手するのが一番反響も强いもので、且又立派な成功も期せらるゝものであるから、何うか一日も早く之に着手せられん事を序ながら書き添へて置く、

本誌に裁縫を談ずるに就て

女子高等裁縫學院長　小出新次郎

本誌は今回いよ〳〵知友中川君が全權を握つて發行せらるゝ事になつたに就ては、本誌を購讀せらるゝ諸孃の將來に取つても、殊に慶賀に堪へざる事である、從來とてもであるが、餘人ならぬ中川君が全力を注がるゝといふことであり、中川君と私とは兄弟も啻ならざる間柄であるから、及ばずながら一袒脫がうと思ふ、

是まではチョイ〳〵其時の所感を述べたに過ない

が、今度は更に出直して、今茲に御話する所のものは、極めて幼稚なる範圍に屬する所のものであるから、或は讀者に取りては甚だ興味が薄いかは知らないが、號の進むに從つて益々興味の深くなるやうに、秩序的に御話をして行かうといふ豫定である。

先づ和服では、普通一つ身裁、中裁、本裁といふ風に解剖したるものを、尙ほ之を細別すれば、一つ身、三つ身、四つ身といふ事になる、而して其裁方にも、同じ一つ身でも少し大振に作るとすれば、身頃を裁違ひに裁つことがある、それを一部の人が名けて二つ身裁と稱へて居る、又三つ身としても、片面物になると、腰はぎ、車裁などゝ云つて、少し異つた裁方がある、それから本裁物になつても、矢張り片面物としては、うばのがれ、帶隱し、子持裁などゝ云つて特殊の裁方もある、又羽織や被布の類の如きにしても、小裁物などは數々あるが、夫等すべてが何に由つて斯樣な區分が起されたかと云ふに、或場合には技術の巧妙な點を示さうといふ旨意から起つたのであるが、槪して云へば、理財即ち布を經濟に使ふといふのが主腦である、布を經濟に使ふといへば、ひとり單物などばかりで無く、小裁と本裁との分ち無く、中巾または大巾物等を材料として裁合す塲合には、その裁方の如何と積り方の如何とに由つて、非常に材料を濫費する事にもなれば、又節約し得る事も出來る、此所が布の經濟法といふもので、是は家政上大切な事であるから、私は次號よりの本誌上に於て、之が利害の關係等を細說しやうと思ふ、

尙ほ進んでは和洋の端物類は云ふに及ばず、或は補綴物、袋物などの類に至るまで、其中で特に興味ありと感ずるものを撰定して、その裁方、造り方等を圖解して參考に供する考である、

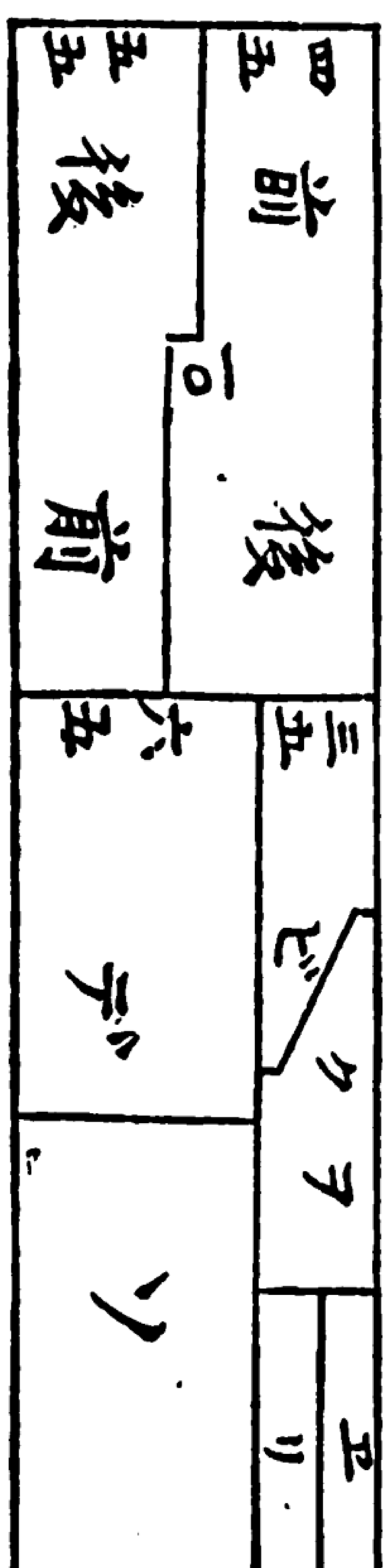
布巾のことは更めて云ふまでゝも無いが、これも初步の者の爲には一言して置く必要があらうと思ふ

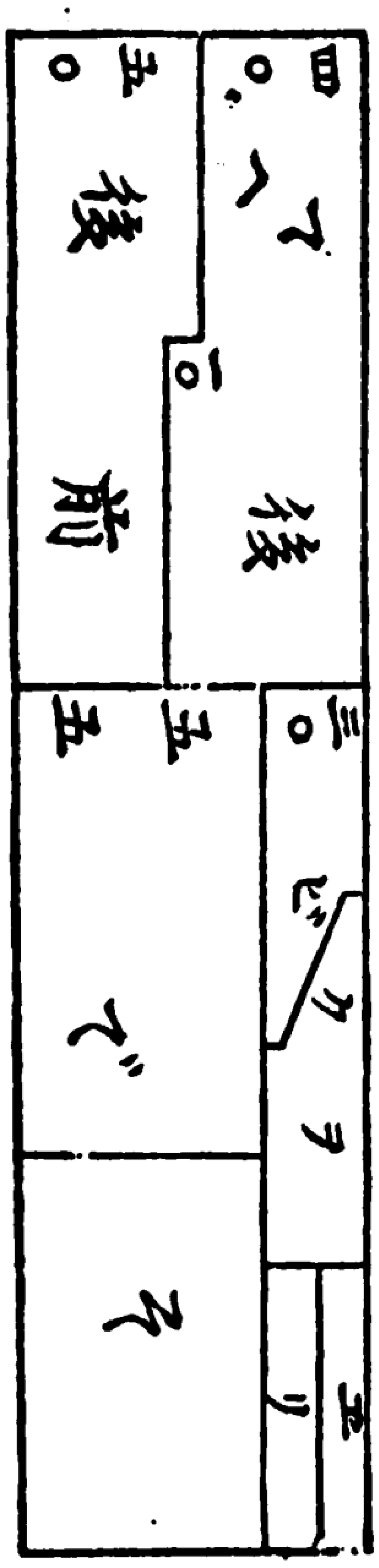
そこで小巾物は九寸巾以內、並巾物は九寸以上尺、

中巾物は尺一寸以上尺二までゞ、大巾物となると二尺内外ある、而して此外に羅紗巾なるものがある、これは三尺七寸内外である、

併し以上は裁縫に對する總説と、予が將來の希望とを述べたものであるが、是だけでは餘り讀者に興味が薄からうと思ふものから、次號に移る端緒だけを開いて置きませう、

サテ順序から云へば一ツ身の裁方であるが、この裁方は身頃二たけで、長袖なれば袖の片われから衿や衽を取るといふやうな、極めて單純の事であるからして、その事は先づ略して、前にも述べた、並巾の一ツ身では少し小さし、去迚三ツ身では少し大き過るとか、或は九寸巾以内の物を用ゐるといふ、斯ういふ時分に、同じ並巾物を買つて、稍その子の身体に相當した衣服を作らうとすれば、身頃は普通のと同じやうに二たけ位であるが、下の圖の如く裁違ひにして、後巾が九寸のものは五寸五分巾二つ補綴合せて一尺一寸近くとなるから、既に一寸五六分餘り大きく出事る事となる、之は特殊の場合に用うべき事であるが、まだ割合に廣く世の中に行はれて居らぬやうに考へるので、爰に載せて兎も角參考に供するが、これは確に此必要は、子を有てる親々の認めらるゝ所である、今回は之だけの事にし、次號よりは更に興味の深いものをお話いたしませう、


第一圖


第二圖

犬猫の居らぬ島

吉田源之助

甲の地に有りても乙の地に無いものがある、去れど交通の便の開けた明治の今日に在りては、よく其有無を通じて不便の無やうにする事が出來るので、例へば、北海道の涯際で出來るもので、九州に坐ながら求める事が出來る所では無い、遠く海を隔てたる歐米の産物でも、我等は足を運ばずして、此所で自由に見聞もすれば、隨意に手に入れる事を得るといふ重寶な世の中となつたのであるから、最早斯の地に有つて彼の地に無いものは無さ相なものであるが、時としては我等の生活に必要なるものですらも、輙もすれば甲に有るも乙に無い事がある、况して直接生活に必要のないものになると、隨分さういふ事は有勝ちなるのみならず、離れ島で、その上人口が稀疎であるといふやうな所になると、爾ういふ事は決して珍らしく無い斷で、玆に紹介しやうと思ふ島も其一つである。

相州の三浦半島といへば、伊豆方面へ旅行をした方は知つて居られるであらう、即ち相州の最南端で、其極まる處が例の三浦の三崎といふ船着である、此所は戸數の一萬以上もあつてチョツと繁昌な土地で櫻の御所、椿の御所、小弓の御所などいふ舊蹟がある、この港から東へ八丁ばかり行くと松輪と云つて、二三の旅館などのある土地があつて、此所は半島の盡る所であるから、前は漂渺たる相摸灘に面して居るので、其展望は得も云はれない、然るに此松輪から海上約五丁ほどを隔てた青波の中に一箇の孤島がある、この孤島の内には

更に犬や猫の姿が見えぬ

去れば人が住んで居らぬのかと云ふに、謂ゆる藻しほ焚くといふ蜑女や、松魚や鯛などの海魚を漁る荒くれ男も棲んで居るのである、併し旅客の足を休めるやうな家は一軒も無い、が、この島内に唯一つ澤山なものがある、それは外でも無い水仙花である、

これは土地が南寄りで暖かな所爲であらうと思はれる、この島は昔し尉ケ島と云つたのであるが、何時の頃よりか城ケ島と稱へて、今は此文字を當て箝て呼んで居る

島は小さいと云つても周圍は約一里、南北凡そ十二三丁もあるが、東西は極めて縮んで居て廣い所で八九丁に充たないので、云はゞ不正な楕圓形をなして居る、戸口は概ね百五六十で、その住民の全体が漁獵を業として居て、その氣風は一体に淳樸で親切で、對岸の三崎町とは全で別天地の觀がある、此く離れたる孤島でも、明治の御代の有難さには小學校の設けがあり、また古來から彼等の祖先を祀るべき一字の古刹がある、而して島内には松や椿が常盤の色を湛えて、翠影を銀波に浸して居るから、實に東海上の別乾坤で、彼の蓬萊島の景色も斯くやと思はるゝばかりである、此く風景の好い孤島に住んで居て、滅多に旅他國の人に接するといふ事が極めて稀なのであるから、偶々遠來の客があらうとも、敢て御世辭を振り蒔くでも無ければ、別に冷遇すると云ふでも無く、恰も彼等の隣人を見るのと毫も變りは無いやうであるから、言ひ換ふれば、人の機嫌氣褄を執るなどゝいふ術を知らないのである、兎角斯ういふ場處に住んで居るものは懶惰に流れ易い氣質のものであるが、この島の人々は却々勤勉で、漁業の暇には山上の平地を利用して大根、甘藷、小松菜などいふ野菜の類を作つて總菜や汁の實には事を缺かないやうに爲て居る、それに一村の者の能く睦び合つて居る模樣は、一艘の船が若布を苅つて來れば、それを數戸に分配するといふのでも其一斑が分る、一体この島は既往七百年來世間から忘られて居たのであるが、昔し鎌倉幕府の盛んな頃は、右府賴朝公を初めとして、尼御臺も右大臣實朝公なども、僅か鎌倉からは六里程の行程であるから、時々この蓬萊島に來つて歡笑の聲や管絃を奏づる響が浪に和して沖の鷗を驚かしたる事も古き記錄等に見えて居る、また其後小田原の北條氏康の時代にも、君は船より

臣は陸路より尉ケ島に遊びて三日逗留などゝいふ事のあるのを見れば、昔は相應に人にも知られ、また繁昌したものである事は之を以ても知らるゝのである、併し桑滄の變は致し方が無い、

室内の裝飾

福地天香

女子といふ中にも殊に一家の主婦となつた者の責任は家政で、之を約めて云へば衣食住の三つのものに帰するのである、而して一般に世の中の婦人は、その三者の中でも衣服のことに就ては、隨分深き注意と考慮とを有つて居て嗜き好みもする、又之に次で食事のことも近頃は和洋の料理法などを練習せられて、家庭に於ても隨分美味物も出來るやうに爲つたけれども、その衣服や食事に比べると、住居向のことには割合に注意を怠つて居る、何うも考へが乏しいやうに思はれる、それで其注意に就ては、家屋の構造とか、間取とか、又は倉庫、物置等の位置とか、若くば樣々の良い模樣とか掃除とかいふ事なども含まれるのである、

そこで予が一つ客室に就て希望する所は裝飾に關する事であるが、最も此裝飾といふ事は、もしも贅澤を極むれば極むる程限りが無いのであるが、まづ其贅澤といふ事は措置いて、普通の點から云つても

その思想の有ると無いとに由つて常に此中に起臥する者の目を怡ばしむる事も出來れば、又精神を慰むる事が出來る趣向もあるものである、それ故に來客のあつた時、その客座敷の模樣で畧その家の主婦たる者の平常の心掛けが分かると云ふ位のもので、それが何處となく殊更に氣取つて飾つてあれば、其家の主婦は如何に氣取つて居るかゞ推定せらるゝ、去り迚、一行物の茶掛けの繪に福助やお龜の畫を飾つたり、又は九谷燒のピカ／＼した花瓶へドッサリ種々の花を挿けて置いたり、或は何箇も蠅取玉を吊下て、折角の額の繪を遮り隱したり

などして、如何に其家の主婦が装飾といふ事に對して無趣味であるかを覺らしむる事がある、其所へ往くと西洋の諸國に於ては、たとひ小やかなる暮しの家でも、必ずそれ相應に容室の飾りといふ事に就ては注意が拂はれて居るのみならず、下女や少女に至るまでも、大抵その飾り付け方位は心得て居る、

曾て予が此裝飾圖案といふ事の研究の爲に佛蘭西の巴里に滯在して居た時に、毎日朝早くから多くの技術家を訪ねたり、又は博物館へ調べ物に行つたりして、終日忙しい爲に、自分の借りて居つた下宿の室などは、何も角も取散して片付ける暇さへ無かつたのである、然るに此部屋を掃除に來て呉れる女は、毎時も部屋の掃除は勿論、額の畵なども程好く掛け換へたり、書物や種々の品物も工合好く棚へ飾り、机の上の物や置物などもそれ〳〵直して整理して置いて呉れたにも拘はらず、自分は例の忙しい爲に、毎日それを取亂したなりで出て行くものだから、或日皈つて來ると、その下女は大に怒つて言ふやう、貴君は日本のアーチストであるといふ事だが、如何に部屋を飾る事の趣味を有たないにも程がある、毎日私が壁に掛ける物は大小の組合せを好くし、棚に飾るべき物は主眼點を取つて形の長短曲直を整へ、假令卓上の書物にしても、よく其色の調和を考へて、紺色の表紙の上には白茶色を重ね、さうして目の感覺を良くするといふ風に、皆それ〳〵骨を折つて整理して置くのに、貴君は何の考も無く毎日それを取散して仕舞はるゝが、如何に日本人などゝいふものは野蠻な無敎育なものであるかよ、併し貴君は殊にアーチストで、而かもデシナツールであるといふからは、少しく斯樣な事も心得て稽古して往つて貰ひたいものであると云つて、大に嘲けられた事がある、之はホンの一つる御笑ひ話であるけれども、彼の巴里などは、下宿屋の下婢でさへも此位の心懸けは有つて居るのである、

それから亞米利加へ行つた時なども、屢彼地の婦人から、日本の座敷飾りといふものは何ういふ趣向

のものであるか、來る幾日には珍らしき客を招くに就ては、此方に有合せの品だけで其裝飾が仕て見たいが、それは如何なる風にしたらば良いのか、はた如何に爲べきものなるかといふやうな種々の相談を受けた事がある、それは却々熱心なもので、中には予が知人であるエームス、パーモリー氏の夫人の如きは、東山の床飾りを相阿彌が業に已に其蹟を留めて置いた『君臺觀左右帖記』といふものさへも所持して居つて、三幅對と三具足との配合は如何に爲べきものであるかと云ふ事まで訊き正さるゝといふ鹽梅である、然るに其本國の貴婦人達にすら、床や違棚の飾り方の故實を調べて居らるゝ人は少ないのであるが、何と歐米の婦人に對しても赧顔の至りではあるまいか、兎に角歐米の婦人が、斯部屋の裝飾といふ事に就て常に十二分の注意を拂つて居るといふ事は以上の事實で充分證明し得らるゝのである、

尤も我國も維新の革命で、凡て舊來の風俗習慣を打破つて了つて、謂ゆる是までの名家は下人と成り下り、書生が天下の大權を握るといふやうな大變動が有つた、その半面には或一部の女子が一躍して貴婦人とか、又は令夫人とかいふものになつて、從來己が朝夕親んで居つた長火鉢を唯一の飾り物として、御殿ともいふべき場處を、全で船宿か待合の狀態に變じて了つたり、或は洋行皈りのハイカラ婦人が、サンフランシスコ仕込みの家具を、得々として數寄屋建の座敷へ列べたり、又男子側の通人逹人といふ人々も、多くは田舍出であつたり、或は書生育ちであつたりする所より、一向に其樣な事には無頓着であるが爲に、幾んど混沌と云はうか、はた蕪雜と云はうか、實に名狀すべからざる、世界に類の無い不思議の有樣を現はすに至つたのであるが、如何か少しく一家の主婦たるもの、また是より主婦たらんとする諸嬢は、須らく此點に注意して貰ひたい、尤も之に就て我國と西洋では自ら裝飾に差異があるが、それは次號に讓らう、（文責在記者）

流行の色に就て

飯野三一

昨今の流行の色合は何であるかと云へば、まづ藍氣を中心として居るのであるが、一体この藍氣といふ色は、何も今年になつてから流行出したといふのでは無くして、實は三年程前から其萠しはあつたので、それから本年の春頃になつて最も之が頂上に達して、衣服羽織は云ふに及ばず、その他帶の類に至るまで此色氣が好かれるといふ風になつたのであるから、一般の流行はと云へば藍であるが、それが此晩春の頃になつてから、少しく此色氣に厭忌が來て、それと同時に何か他の色氣を要求する事となつたが之は自然の勢であらうと思ふ、

元來この流行を作るのは如何なる階級の婦人に依つて生ずるかといふに、若い御孃さん方よりも、

結婚後二三年の婦人に依つて多く作らるゝのである、それで左樣いふ御婦人は如何なる色氣を好まるゝかといへば鼠がゝつた色を好まるゝのであるから、勢質素に傾くのであるが、年頃の若い方になると、何うしても少し冴た藤色氣を好むといふ傾があるのであるが、まづ今日の處で

藍氣を含まれたるものより藤氣となつて進みつゝある傾向が見えるから、此秋の流行は先づ此色氣と見ても大差は無からうと考へる、

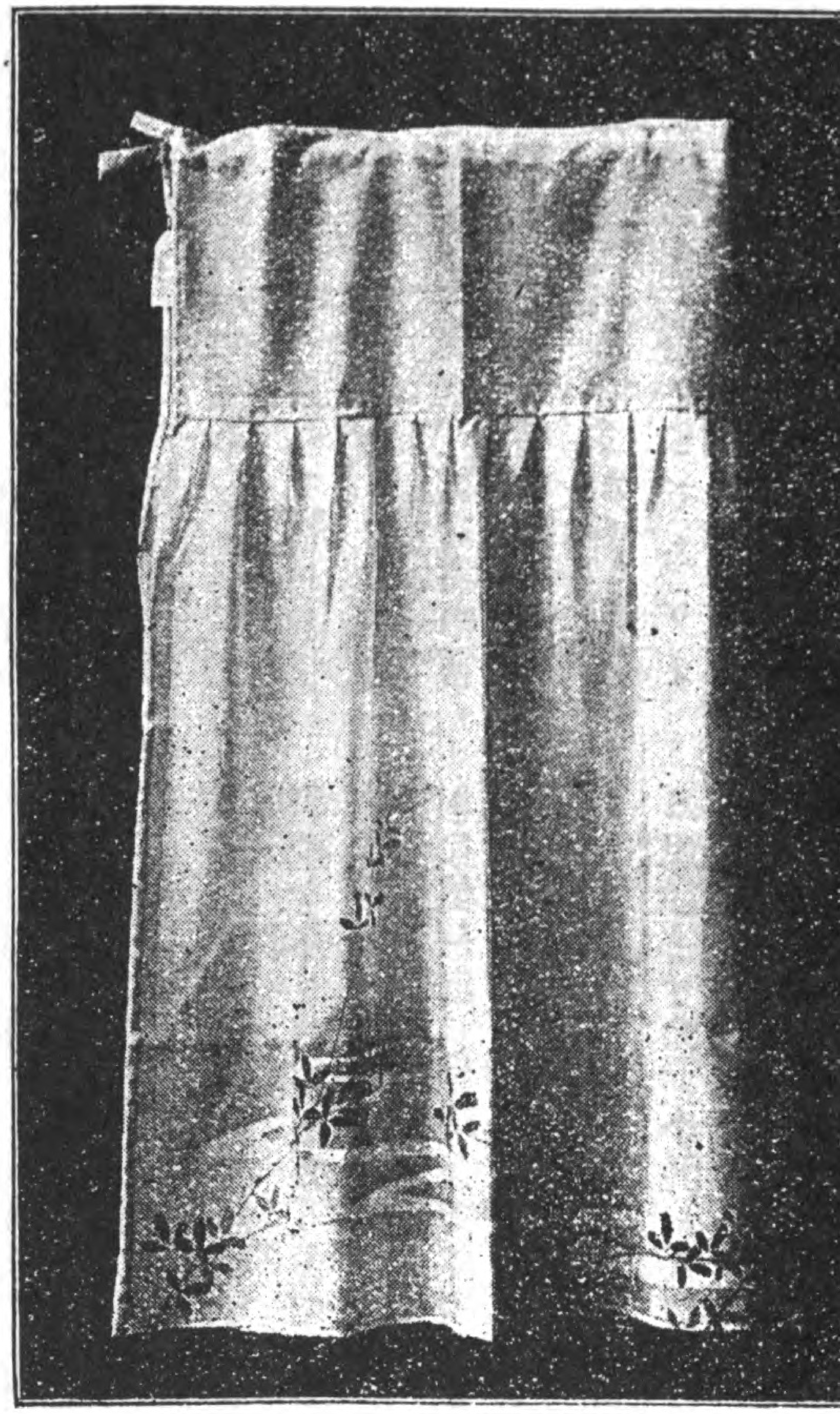
少しく咄が餘談に渉るが、一体に色の好みが薄くなつて來て、半襟なども濃いものより淡いものに遷つて來て、例へば、白茶、クリーム色、淡い鴇色といふやうな風で、隨分まだ是れ以上のものもある、

半襟が流行の魁で之を豫報するといふ事は眞理で、それで當今は如何なる色氣を好かるゝかと云ふに餘り濃い色でない、言はば鼠なり何なり總て薄くなつて居る

それから能く本年の流行品は何であるかなどゝ云ふ御質問があるのですが、これは先づ絞りで、この

見當は決して極端では無い、半襟、小袋、その他の裝飾品等に至るまで、ます〳〵之が應用の範圍が廣くなつて來るのみならず、その絞り方もなか〳〵巧者になつて來て、今後如何なる程度まで進むか、今チョット豫想が出來ない

それから此秋に來るべき模樣は如何なるものかと云ふに、之は光彬風で、光彬風と云つても全で光彬風を用うるのでは無い、即ち光彬風を基礎として、之に新意匠を加味したもので、謂ゆる明治式光彬風といつたやうなものが歡迎せらるゝと思つて居るから、當店でも十分之に力を注いで居るのであるが、尚ほ委くは十月號に御咄いたしませう、



新　裾　よ　け

新裾よけ

從來の裾よけの形狀を改良して模樣をつけたるものにて、白朱鷺、水淺黄色などの漣羽二重にて造れり、裾さばきの工合よく、風吹く折にも裾をみだすうれひなく、優美にして輕便なるものなれば、新時代の婦人には喜ばるゝものなるべし、價は三圓九十五錢にて三越呉服店にて買ふことを得、

母親の感化

江原素六

今更申すまでありもませぬが、母親の感化が兒童に及ぼすことの、いかに大なるかは定めし御承知でもありませうけれども、茲にまた私が實際に見た事があるのであります、私は御承知でもありませうが、麻布鳥居坂の中學校の校長をいたして居りますが、私のこの學校の二年生に一人の亂暴者がありまして、教師の言ふことも聽かなければ、監督者の言ふことも聞きませぬ、稽古中に大聲を發するやら何やら、實に始末にゆかぬ人間でありますから、一度ならず二度までも退校を命じましたことであります、すると、その度ごとに親が來て、泣いて詫るものでありますから、その母親に免じて許すことゝなつて居るのであります、所が、何うしてもその亂暴が止みませぬから、また〳〵三度目の退校を命じたのであります、さうして職員一同、今にまたアノ母親が詫に來はせぬかと云ッて居ると、果してやッて來ました、やッて來て又泣いて詫るものでありますから、その情に惹かされて、また許してやッたのであります、所が、何うしても其亂暴が治まりませんから、また〳〵何うしても學校に置くわけには行かぬといふ職員一同の評議で、外の生徒にも觸るから、どうしても學校に置けぬといふので、遂に四度目の退校を命じたのであります、所が、また〳〵母親がその子供を伴れてやッてまゐりまして、ワイ〳〵大きな聲を出して泣きますのです、さうして申すのには、モウ一度だけ何うかお許を願ひます、今度亂暴をいたすやうな事がありましたら、モウ私はこれを子と思ひませぬ、小供一人捨てた氣になりまして、モウ〳〵一生涯構ひませんと、且つ泣き、且つ詫び、實情を吐露して申しまするから、職員一同も之に動かされまして、然らば今度限りモウ一度許すから、こんどからは何うしても許さぬからと云ひましたので、母親も大に悦んで、懇々とその子を諭して立去

りました、然るに其熱心なる母親の言葉が、今度はいたく身に泌みましたと見えまして、それからといふものは、その子供の様子がスッカリと一變しまして、これまでの亂暴な人間とは打ツて變ツた者となり、大層勉强も仕出しまして、遂には優等の地位を占めるまでに立ち至ツたのであります。

また外に一人矢張り之も亂暴でありまして、屢次退校をさせやうといふ評議もありましたけれども、それでも寛大の上にも寛大の所置をして居ツたのでありましたが、遂には默許する事が出來なくなりまして、是も退校といふ事になつたのであります、で、この男は惡まで不敵な人間でありまして、退校をさせるならさせて見ろ、そんな事が怖いものかといふ顏色で、平然として自分の書籍などを取片付けて出て往きましたが、やがて二時間ばかり經ちますと、その靑年は顏の色を變へて飛んで來まして、時に先生、何うか私は是から大人しくしますから、まげてどうぞ御勘辨なすツて下さいまし、私は家へ歸りまして、驚きましてございます、私は性來亂暴者でありまして、これまでは物に怖い恐ろしいといふ事は夢にも知らなかつたのでありますが、今日退校を命ぜられて家へ歸りますと、母がサメ〴〵と涙をこぼして泣き悲しみまして、お前も折角これまで勉强したものを、今更不品行で退校させられてしまツてはモウ俗にいふ中ブラリンの人間になつて仕舞ツて、一生涯世間へ顏出しが出來ないではないかと泣かれました時の、私の心持は何ともいへませぬでした、世の中に、母親の涙ほど怖いものはありませぬ、私は生れてから始めて、あんな恐ろしい思をしました、どうぞ是からは亂暴をいたしませぬ、品行を愼しみますから、何卒退校は御取消なすツて下さいましと云ふので、それならば以後は必ず品行を愼しみ、さうして亂暴をせぬやうにと誡めて、こゝに再び入校を許した所が、さてそれからといふものは、其男が急に又柔順になりまして、何事も敎師の言ふことはハイ〳〵といツて聞くやうな次第になり、その後

は常に優等の地位を有ッて、先頃の試驗などにも最優等で及第しました、この二例の如きは私の實際見た事でありまして、それが又何れも全く母親の感化が子に及ぼしたのであります、

それから、モ一ツ實例がありますが、それは私の郷里沼津の在に、或一軒の水吞百姓がありまして、その日暮しの至ッて貧困なものでありましたが、男の子が二人あッて、その母親といふのが却々の賢者であッて、何うかして家の子息を庄屋樣の次へ坐らせるだけにしたいといふ熱心でありましたが、その頃は謂ゆる封建の世の中でありますから、却々水吞百姓が庄屋樣の次へ坐るまでになるのは容易なことではありませぬ、寧ろ能ふべからざる事とも謂つべき事でありますのですが、そのおかみさんは考へた、これは坊さんか手習の師匠にするが宜い、田舍では坊さんは大層大騷ぎをされたものであります、また手習の師匠になれば、その敎へた多くの小供達が大きくなれば、詰りみんな自分の御弟子であるから、その人々の上座に坐られる道理である、と斯う考へて、母親はその子供等に、お寺の坊さんに手本を書いて貰ッて、毎朝早く起きては、かまどの下をたきつける以前に、チヤンと其子供等の手習をする机を据えて、サアお前がたお起きよ、お机が出たよと、その子供等を起して、さうして手習をさせる、斯やうにして一朝も缺かさず、今日は雪が降ッて寒いから、モウ少し寢かして置てやらうなどゝいふ事はしません、寒からうが暑からうが、一朝も缺かさずに、母親自身が斯やうに先に立つて勵ましまするから、その子供等も自然と勉强をする氣になりまして、それが其頃伊豆の國の代官をして居る、江川太郎左衛門といふ人に知れて、その江川の所へ呼び寄せられて、江川の給仕をしては勉强をして居ましたから、遂に庄屋樣の次ところか、日本鐵道の技師として、最も早く名を知られるやうな立派な人になりましてございます、肥田濱五郎といふのは即ちこの人であります、左樣に母親の感化が子供に及すのは

大したものでありますから、何うか諸嬢も他日賢妻良母となられて、充分にその感化を子孫に及ぼされまして、國家の爲に人物をば拵へるやうにして載きたいと考へますのであります、何でも母親といふものは、自分が先に立つて實踐躬行されて、儉約に物事をしなければなりませぬ、

僅かに一人の儉約でも大層積み重ねて行きますれば、これが國家の利益、國家の經濟となるのであります、たとへば、毎朝かまどの下をたきつけます薪を、二本のところは一本、三本のところは二本と申すやうに、極く些細な處をも氣を注けて、火といふものは、その平面の熱で物を煮たり燒いたりするもので、決して只重ねたからとて、それで物を充分に沸煮させるものではありません、であるからして、薪を重ねたから可といふものではありません、そのやうに些細なる事までも注意すれば、それが一年積ッて御覽なさい、何萬圓といふ金になります、さすれば即ちこれが國家の經濟、國家の利益といふものでありますから、願くば大方の諸嬢に於ても、能く此實踐躬行といふ事を以て、將來其子孫をば敎育されるやうに願ふのであります、

手跡と裁縫

小川直子

大凡女の手業には種々ありて、いづれを先とし、いづれを後にといふ物もなく、千萬のわざ殘る方なく習はまほしき事にはあれど、中にも旨とすべきは手かく事ならん、いにしへ人の、書は姓名をしるすに足るといひし事もあれど、同じくはうるはしうこそかゝまほしけれ、次にはたちぬひのわざならん、いかにといふに、此二つは古より婦人四藝といふ中にも數まへられ、はた、今の世にも女子達が生ひたち給へる後、人のまねぐがまに〱、いづれへなりともとつぎ給はむに、其家にゆきても、先づうからやからは、夫のはらからといふも、今の世は海山遠

く隔り居て、たとへば、姉は陸奥に妹は日向にといふさまに、それ〳〵のたつぎによりてものせらるゝもあらん、此人々へも文をおくるとか、はた、姑に代りて文もかくべく、あるは、何くれの品どもに書附をするなど、先づ何よりも手かく事の多きぞかし、かゝる時手の拙きは、我身にも苦敷もはづかしくも思ひ、はた、其家のためにも面なくて口をしきわざならん、かゝる人は、與所より文を得たるにも嬉しきものゝ、我手の拙ければ、かく事の難きより、此返事をせむとおもふにも、今日よ明日よと、ためらふほどにおくれ〳〵て、むらいの罪とも成行まゝに、ひときは物うく覺えて遂に打捨て置き、むらいの罪を重ぬるぞかし、是に引かへ、水ぐきの跡うるはしう龍といふものゝはしるがごとくすが〳〵しうも、あるは、風にゆらるゝ青柳のごとくやすらかにも書流しつゝ、其言葉さへ逢ひ見てかたらふよりも、猶おもしろにつばらかなる文をやりつゝ、尋ね問ふ事もしば〳〵ならん、うるはしき文を得たる斗りめだたく嬉しきものはあらじかし、されば君だちも心をこめて習ひ給へ、彼の新井白石大人が學ばれたりし古事などよき鏡なり、

次に裁ぬひのわざを旨とすべきは誰も〳〵知る事なれど、今の世はくさ〳〵習ふべき業の事繁きより、いつとなく裁縫のわざには、おもきを置かぬたぐひ、なきにしもあらずして、此業に手づゝなる人、まゝあるやうにも聞ゆるぞかし、かゝる人與所にゆきたらん時、譬へば姑は古の古ぶりに生ひたてるからに、裁縫の業には妙にして、ありとある家内の人、この衣服は人の手を頼まず、よきもあしきも不斷の物に至るまで手ばやにし、よき物は袴よ帯よとうるはしうせらるゝを見ては、嫁なる人我針の拙きを心苦敷おもふ折ふし、姑はそれとも知らで、女のたしなみなれば、これ位は容易からんと、羽織よ重ね物よと、うるはしう染たてたるを、とりいでゝこれぬひてよといはるゝ時、否みがたくて受けたるものゝ、汗あゆる計られたくて、いかゞはせましと

涙ぐまるゝ折もなどかならん、かゝる手づゝの人は、衣服の疊みざまもあしくて、夫なる人の袴をたゝみても、ひだを崩し、姑の被布なども折目をゆがめなどして、其あしき疊みざまのまゝにて簞笥にまれ、櫃にまれ、こめ置きつゝ、日を經てとりいでたる時、必ずあしきくせの折れ目などつきて、ふきは押しへされ見るかげもなく、袖口はしわになりてしゞみ上りなどしたらんに、其まゝにては着るべくもあらねば、それ疊み直せよ、火熨をかけよと打さわぐほどに、姑にもあれ夫にもあれ、與所へものせむとするに、契り置きつる時刻にもおくれなど、此れは必ず夫も腹だゝ敷なりてつぶやきなどもし、おのづから叱りもすべく、何となく家庭もおだやかならず見えて、召仕ふ者共にすらもはづかしき思すべし、これに引かへ、其業よき人は、さる見苦敷事なく舅姑の衣服はさらにて、何くれとうるはしう縫ひたて、手ばやにするより家の中の人々に、垢づきたるものなどは着せ置く事もなく、垢づかざる程にとく縫ひ直して裏かへしなどもし、うしろを前にも兎やかうやと工夫をこらしてうるはしうぬひたつる事なれば、いつも折目正しく垢づかぬものを着せ置くべく、例へ乏しき家にても富人のごとくに見え、夫の怒りにふるゝうれひもなく、家庭やすらかに睦まじければ、與所の見る目も樂しげにこそ見ゆべけれ、さるからに君だちよ、師に隨ひてたちぬひせらるゝ時、縫目のゆがみたるをも、印の違ひたるをも、師の君が直してよとのたまふ時、腹ふくるゝおもゝちなどゆめ〳〵し給ふ事あるまじきわざぞかしと、例のおうなのくことをなむ、

織物と染色

理學士　佐藤忠雄

古へは木の葉を綴つて着たり、又は桂のやうなものをからめて布樣のものを拵へて衣服としたのであるが、それから段々進歩して、苧を以てするとか、

或は木の皮を以てするとかいふ事になつたのであるが、それとても至極簡單なものに過ぎなかつたものである、然るに其後年所を經るに從つて、人智もだん／＼と開明に進んで、綿を作り、これを紡いで糸となし、又は蠶を養つて絹糸を取り、尚ほ進んでは動物の毛を績いで、謂ゆる毛織物などを製し、此他種々のものから趣の異つて居る立派な織物を作り出して、遂に今日の如き有様となつたのである、

かく世が開け人の考がます／＼高くなるに伴れてたとひ充分に寒さを凌げるものであつても、木綿織よりは瓦斯糸織、瓦斯糸織よりは絹織、又は毛織物といふ工合に進み、同じ絹類でも、その模様や織方によつて、甲よりは乙、乙よりは丙と、贅澤を好むやうになつて行く、これは止むを得ない世間の勢で、今日の流行物も明日は簞笥の底に藏置れて、更にまた新らしきが迎へらるゝといふ風に、決して何時までも同じものでは無い、そこで此後とても絹や毛織よりは一層立派な物が發明されて、たゞ今此上もなき貴重のものとして居る物も、明日は今日の木綿位に見下げらるゝやうになるかも知れない、

さて近頃世間では老人であらうが、子供であらうが、高き賤しきの差別なく、先づ大切なる三度の御飯を節約してまでも、第一に此衣服といふものに無我夢中になつて居らるゝといふ、斯くも大切なるものとせられ、常々御用ゐになるものであるに、只その表面ばかりに眩きその物が、如何やうに出來て居るから奇麗だとか、又は強いか、夫等の事には一向頓着が無いやうに見受けられるから、折角貴重な金錢を拂つて求めた物も、間もなく用に立たぬとか、色が摩れるとか、種々の不幸に遇はれる方が多いと聞いて居る、そこで諸嬢は固より、是は男子でも一通り此衣服の原料たる織物と染色といふ事を覺えて置くといふ事は最も急要な事で、それと同時に自身が愉快を感じ、利益を得らるゝ事が少なくないのである、

この織物と染色とは決して離れる事の出來ないも

のであるが、その本源に溯れば、二つの中織物は主眼で、染色は之に附隨したものである、即ち麻でも、木綿でも、絹でも、毛でも、織れば其儘衣服と致す事が出來るのみならず、又それで決して不自由は無いのであるが、そこは前述の通り、織下しの白の儘では少しも興味が無いから、そこで始めて染色といふものが出來て、赤に、白に、青に、黄に、或は黒だとか、種々の工夫を凝らし、色彩を取り、而して人の目を娯しましむるやうに仕たのである、



サテ織物は如何なる原料から造らるゝかといふに已に諸嬢も知らるゝ如く、絹、毛、麻、木綿の類は云ふまでも無く芭蕉、鳳梨、硝子、石綿、シルケット、コロヂオン絹等、種々珍らしきものから拵らへられる、併し是等は多く用うるものでは無い、木綿の内でも、普通の木綿と瓦斯糸、シルケット、

ゴロヂオン絹等の種類があるが、是等は何れも木綿を或藥品の作用で變じたものである、瓦斯糸は多く用ゐられて居るから諸嬢も克く知つて居られやうが或は此糸を誤解されて居らるゝ點が少なくないやうに思はれる、元來此糸は紡績した木綿糸を、かの市中の燈火に供して居る石炭瓦斯を燃し、その上に糸を走らせて、而して其糸の周圍の毛ばを燒き去つたもので、これを瓦斯糸と稱するのである、

シルケットは一名マーセライズ綿糸とも稱するもので、これは近頃外國で盛んに行はれて居るもので、わが日本では未だ盛んには行かないが、一体この糸は、木綿糸を苛性曹達、または苛性加里といふ灰汁に似た藥品の、濃溶液に浸して木綿を甚しく收縮せしものであつて、その光澤の美なる實に驚くばかりである、近頃はハンカチーフ等に應用されたものが外國より輸入し來るが、一見絹と見違へる程であつて、素人の方などは却々眞物との區別に苦しむ位であつて、糸も脆弱とならず、下等の原料より絹に類似の品を得ることであるから、此後ます／＼流行することゝ考へる、兎に角學理の力は恐ろしいものである、

コロヂオン絹は通常人造絹といふもので、これは近年佛蘭西で盛んに製造せられて、一時は其勢か天然の絹糸を凌がんとしましたが、この糸は非常に燃え易きと脆弱なので、絹糸代用にすることは却々出來ない、この缺點を補ふ爲に、何れも有名な學者が研究中で、まだ確とした良い方法も見當らないのである、この糸に就ては日本の商人も一時は非常に狼狽もし、また恐慌も懷いたのであるが、前陳の次第のために、今日では先づ安心して居るとは云ふものゝ決して油斷はならぬ、元來この製造法は化學上の學理に基いたものであつて、その大略を云つて見れば、初め木綿を硝酸にて溶解し、尚ほ二三の藥品で處理した後、一ミリメートルの何分の一といふほど、微細の直徑を有つて居る管の中より押出して、さうして水中で固まらしめたものである、併しこの糸は光

澤も立派で、外觀は眞物と毫も異ならないのみならず、時としては其光澤の如きは絹よりも一層美しいものがある、けれども悲しいことには眞物のやうに强さを保たせる事は出來ない、それに手觧りの惡い所などは尤も缺點である、チクタイ其他すべて裝飾物の如き、餘り力を要せぬ場處にのみ用ゐられて居る、この外人造絹といふものは澤山にあるが、まだ此法に勝るものは無いのである、

偖それらの糸を織物に作るには、先づ其前に之を染めねばならぬ、尤も中には白のまゝにて織りたる後に染色するものもあるが、まづ大抵は糸の時に染めるものとして、その糸の原料には動物纎維と云つて絹、毛の類、植物纎維といつて木綿、麻の類の如き區別があるが、たとひ如何なる種類のものであつても、之を染める前に精練漂白と云つて、平たく云へば精練と漂白との二つの手間を掛けねばならぬのである、即ち木綿や毛の如きものは、之を紡績した儘では、必ず其糸に種々な不純物が附いて居るから、之を除り去らないと、染めても色が惡いばかりでなく、その根本から染め附かない、そこで木綿と毛とは、動物性と植物性との異ひがあるから、其方法は同樣でなくとも、何うしても此精練と漂白との二工程を經ねばならぬのである、

木綿や麻の如き植物纎維のものは、これを炭酸曹達で煮て、脂肪や不純物を除きたる後、漂白粉にて晒し、不漸なる茶色を雪のやうな純白に變ずるのであるが、絹や羊毛のやうな動物纎維になると、絹は蠶が繭を作る時、躰內より膠質その他のものを糸に附着するものであるから、之を除かなければ立派な絹糸にはならぬ、で、之を精練するには、絹練用の石鹼か、又は炭酸曹達、苛性曹達のやうな炭酸アルカリで煮沸して其附着物を除去するのである、尤も我國の絹糸は天然に白色であるから、斯く精練したる後の絹糸は、實に純白で、そして光澤が美はしく、その上に手觧りも良く、原語でスクループといふ、一種の氣味のよき鳴りを發するやうになる、若しも

その音を發するに至らない時は、まだ充分に其が練れないのである、
　同じ繭でも外國産の物は黄色を帯びて居るから、右の如く精練したまゝでは未だ其色が全く去らないので、尚ほその上に一度漂白す必要があるのであるけれども之は木綿のやうに漂白粉を用うると糸質を損するから、硫黄を燃して亞硫酸瓦斯を造り、之にて蒸すか、或は過酸化バリユーム、又は過酸化リヂユームより生ずる過酸化水素の酸化作用に由るのである、尤も天蠶や柞蠶の類は、糸に多量の石灰を含んで居るから、この石灰を除去すべき餘分の手間を要するのである、
　羊毛は恰も人間の頭髪に脂脂を汾泌するやうに、矢張り毛根から脂肪を汾泌して居る、そこで常に地上に横臥するものであるから、その毛に種々の不純物が附着して居るので、之を精練するには、先づ温湯に曹達を溶かしたる桶を幾個も並べ置きて、甲より乙、乙より丙へと順々に全体の桶にて洗ひ清めるのである、併し毛も絹のやうに、その性質の善良なるものは敢て漂白す必要は無いのである、織物の事は先づこれ位として置いて、次は

染色法

のことに移らう、この染色の事も今と昔は違つて、以前は極く單純なるものであつたが、今は一々學理に照して、即ち化學の變化に基くものとして、その學理の深邃なることは實に不思議な位に進で居る、只一口に赤とか、又は青とかに染ると云つても、その中には人の目に見えない變化を起して、さうして始めて立派なる色の美を現はすものである、それ故に、今後は充分化學の變化に明るい頭腦を以て從事しなければならぬやうになる、否、已に其樣なつて居る、外國では各染物大學、その他高等の學校で其學理と實際とを教授しつゝあるので、日本の留學生も少なくは無いが、我國でも、近時は大學で熱心に研究せらるゝのみならず、高等工業學校では盛んに此種の技術家を養成して、日本從來の染色術の改善

に努め、地方でも染織學校なるものを設け、その入學者の如きも、他の實業學校に比して數等上にあるといふ程である、これは全く古來の無鐵砲なるを悟り、學理に基づける確固たる方法の世間から歡迎さるゝ次第に外ならぬ、

一体昔時の染粉は、全く天然物を其儘に應用したもので、即ち木の皮を煮詰めて其汁を取り、草の葉を絞りては紺色を染め、花の紅なる處より赤を得る等に過ぎなかつたのであるが、今日では學理の力で、只一種の原料からでさへも數千百種の色相を得るやうになつたのである、この珍らしき重寶なる原料は何かといふに、諸孃は聞いて驚かるゝ程なもので、彼の不潔なる深黒色のコールターである、之が人造染料の原料となつて、これで萠立つやうな綠や、飛付くやうな緋や、涼しさうなる水草の色などといふやうな色相を染め出すのである、

歐洲でも今より五六十年前までは、この發明は見なかつたのであるが、その頃石炭瓦斯を盛んに燈火用に供するやうになつて、之が副産物として此コールターを出す事が莫大であるので、化學者は此豐富なる原料を見棄てるに忍びず、千辛萬苦の結果、遂に此一大發明を成功せられたのである、

このコールターから製せらるゝ人造染料は、たゞに青、赤、黑を現すのみならず、その性質に由つて種類が澤山で、木綿。絹、毛等に直ちに染付くものもあれば、また或金屬を媒介としなければ染付かないものもある、さうかと思ふと、毛や絹に染付くものでも、木綿には一向染付かないものもある、又或ものは染付いた初めは白色であつて、他の藥品を與へると或は赤に或は黑に變ずるものもある、斯く種々雜多の性質を帶びて居るものを、それ〴〵の學理に基ゐて應用し、美はしき外觀と、堅牢なる染み付きを得るやうに工夫して、始めて立派なる友禪染型付を得るのであるから、そこで學理に明るき技術者の必要なる事が起つて來るのである、

全体染料には、前述の人造染料の外に、天然染料

といふものがあるが、之も委しく述べると大層長くなるのみならず、專門家でない諸嬢には餘り必要が無い上に、却つて厭嫌が來るから略すとして、

染色術

のことを一言して置かう、即ち此染色術には浸染法と捺染法といふ二種あるので、浸染法とは其名の如く、染液の中に糸なり布なりを浸して一樣に染色するのである、この中には絣染、絞染、型付浸染、板〆などを含んで居る、捺染法といふも亦その名に因んで、布を無地にてはなく、或部分〳〵に種々の模樣を染付けるものであつて、重に布にのみ限られて居る、即ち小紋、更紗、浴衣、友禪染の如きは之に屬するのである、



酒勾みやげ

中山幸子

折にふれて

大空をながけくらしぬ天の下
　ことしの秋のみのりいかにと

きのふまでのこるあつさも降る雨に
　ながれてすゞし秋のはつ風

さよふけてしづがふせ家の蚊遣火も
　をぐらくなりぬいねやしつらむ

朝顔の花は露のひぬまとおもひしに、酒勾の別莊の庭のまがきに咲きてより、五日ふれども花のしをれざりければ、いと〳〵めづらしくながめつゝよめる

めづらしくまがきにさける朝がほの
　日かずおふれどもしをれざりけり

わがやどのまがきにさける朝がほの

花は日ねもすをれざりけり

朝顔をよめる

朝な〳〵咲く朝がほとく起きて
みればことしはこぞにまされり

朝な〳〵千代へむ竹のそで垣に
しばしひもとく朝がほの花

けふもまた露よりさきに起き出でゝ
さく朝がほの花をまたなむ

朝がほの花をめでつゝ朝な〳〵
しのゝめごろに起出でにけり

わがやどのまがきに咲ける朝がほに
いとめづらしき花ぞありける

くれなゐにしろむらさきもみな咲きて
いとうるはしき朝がほの花

ひとりのみめづるはをしき朝がほを
みやこの人に見せむとぞ思ふ

しづが家のあれしまがきも朝がほの
さかりを見ればうつくしきかな

酒匂みやげ

日むきよき垣根にうゑし朝顔は
よそよりさきに咲そめにけり

すゞ虫

今もなほのこるあつさにねやをいでゝ
露とおきゐてすゞむしをきく

磯づたひ月をながめてふかしけり
すゞむしのたえまなければ

まはぎはらさかりを見ればすゞ虫の
おもひかけずふりいでゝなく

歌

いろ〳〵の花にもまさるしき島の
みそひともじの言の葉の花

敷島の道ゆく人はみぬ人も
したしき友のこゝちこそすれ

敷しまのうたの徳とてことのはを
やまのおくまでしられけるかな

敷しまの道こそよけれ山里の
人もみやこの友にぞありける

家政の要訣

棚橋絢子

家を治めるといふことは、諸事萬端に亘つて廣いことではあるけれども、その要訣をいつて見ると、主婦たるものが自ら實行を以て家人を率ゐるといふことゝ、自分の命令が充分に行はれるまでに、根氣よく家人を訓へならすといふこと、この二つのことに歸するかと思ひます、

家の中の事は思ふやうに行くものでないとは誰しも言ふことでありますが、それは何事によらず十が十まで、自分の思ふ通りになるといふことは、世間には無いものでありますから、家の中のことも同じではありますが、ツマリ前の二つのことをさへ充分に行ふことの出來る主婦でさへあるならば、十中の七八、または八九までは思ひ通りに、家の中がキチンと整頓して行くものであります、サウあれもこれも思ふやうにならないといふのは、全く主婦たる者が實行を以て家人を率ゐるといふ事と、根氣よくわが流儀を家人に訓へならすといふことの出來ない爲であらうと思ひます、例へば、女中に何時に起きて、これ〳〵の仕事を斯ういふ風に爲よと吩咐てあるにもせよ、主婦たる者が先づその時に共に起き出で、自分も甲斐〳〵しく相應の仕事をしながら、女中たちの仕事を監督し、まだ慣れない女中などであるならばそれでは、不可ない、斯う爲なさへといふ風に、一々敎へ導きて行くといふ風でなければ、兎角極めてある時間に、何も彼も片付いて、其所に食卓がキチンと据えられるといふやうには行きません、また偶に早起をして、女中を監督しながら働らかせることがあつても、昨夜は遲くなつたから、マア今朝だけはと思ひ、今日は少々頭痛がするとか、または面倒だとか云つたやうな事で、とかく毎朝は續かないといふ風であると、奥さんが見て居ないからといふまでの惡い心でも無からうけれども、ツイ油斷をして、いつものやうにセッセと働いてくれません、

幸ひ食卓がいつもの時間に出來たとしても、屹度何か手許にぬかりがあるといふ位は、どうしても免れますまい斯ういふ事がをりをりあるといふと、ツイいつの間にか定めた時間に食卓に坐われないといふことになる、殊に口でいふことは、耳に蛸が出るかと思ふほどに教へに教へてゐてさへも、なか／＼その通り爲てくれませんものだが、行つて示したことは忽ちにして利くもので、主婦が或時は早く起きたり、遲く起き



たりといふやうな事であると、敢て眞似を爲るといふ積りでなくとも女中達も何時かその風になる、それが獨り朝起きの事ばかりでなく、萬事萬端この流儀であるといふと、それこそ家の中のこと、何一つ思ふやうに行かぬやうになります、

主婦に根氣の必要

だといふのは此所のことであります、家の中の事といふものは、勿論賢こい勘定が大切であるけれども、その

勘定を家中の人が根氣よく行つてゆかなければ、折角のよい規則も何にもなりません、即ち主婦たるものは、まづ第一に萬事に根氣をよくする事は勿論、自分自身の根氣を以て、他の家人も止むを得ず根氣を克しなければならぬ様に仕向なければなりません、

先きに早起きのことを例に取りましたから、また矢張り早起きのことでいふと、主婦が朝起きをして、自分も働きながら女中たちを使ひまわして居るといふ風であると、主人や子供も自ら早くも起きるし、顏を洗ふことでも、衣服を着換へることでも、自然に極りを能くするといふ風になるもので、主婦といふ家庭の心棒が確かりとして、根氣よく動いて居ると、普通の家ならば、家人を思ふやうに動かす事が出來ないといふことは、殆んどあるまいと思ひます、

以上のことは、現在主婦となつて居らるゝ方々に對する私の注文でありますが、主婦となつて居らるゝ方は、また同時に母親であるからして、家庭敎育の方面に前の話を移して見たいと思ひます、即ち自

ら先きに立つて家人を率ゐ、自分の躾けや命令の、キチンと家の中に行はれるまで、根氣よく家人を慣らすことが出來るやうな主婦は、どうして出來るかと云へば、矢張り家庭の躾け方によつて出來るので、坐つて居て女中を使ひ、自分では何一つ爲たことのないといふやうなお孃さんでは、他日人の妻となつたところで、俄に前に云つたやうな眞似は出來ません、何うかして爲たいと思つても、なか／＼長い間の習慣といふものは恐ろしいもので、自分で自分を何うすることも出來ないと云つたやうな譯になるのです、それで娘子を有つて居らるゝ母親方は、よく／＼この點に注意して、女中にやつて見せるだけの家内の仕事は、一通りだけは出來るやうにして、物事に根氣よく規律を守るといふ習慣を、小さい時から付けて置いてやらなければなりません、奥さんがお掃除をなさると、一寸の間にアンナに奇麗に出來るとか、お仕事もキチンとしなければ、奥樣の前にもつて出るのが耻かしいとかいふやうな風に、女中

たちに思はれやうでなければ、いくらキチン〳〵としろ〳〵と口でばかり言つて居ても、自分でお手本を示すことの出來ない以上は、奥さんは御自分に爲さつたことがないから彼のやうに仰有るけれども、御自分で行つて御覽になつたなら、なか〳〵さうさう巧く行くもので無いことがお分りになるだろう位の心持があるものだから、何うしても思ふやうにならぬものです、

終りに家内の禮儀作法にしても、まづ主婦自身より長幼の序を正して、禮儀正しくして見せないと、家の中が何うしても無作法になります、

阿佛尼

女子美術學校敎授　谷　紀三郎

一

阿佛尼といふ名は世間の一般からは餘りよく其の名を知られて居りません、從つて奈何いふ人であるか、又奈何いふ經歴を持つた人だか知られて居りません、けれども我が中古の名婦人として尊敬を拂ふべき立派な人でもあり、且つ後の人の敎訓ともなるべき經歴を持つた普通ならぬ婦人でもあると思つて、日頃さう信じて居りますから大略の傳記を紹介致しませう、

阿佛尼は鎌倉時代の人であります、その時代で有名な歌人たる大納言藤原爲家の夫人で、權中納言藤原爲相及び藤原爲守の母であります、從五位下佐渡守平度繁といつた人の女で、最初は四條といひ又は右衛門佐ともいつて、順德天皇の皇后安嘉門院に仕へた宮女でありました、阿佛尼といふのは夫爲家歿後の佛號で、外に北林禪尼ともいひました、弘安六年（一九四三）鎌倉で亡くなりましたが、生れた年月が不明の爲めに幾齡であつたか分つて居りません、

阿佛尼は右の如く名家の人の夫人であり、又母であつたといふことだけで有名なのではありません、寧ろ十六夜日記、乳母の文、夜の鶴、阿佛尼口傳等

の著者として、我文學史上に最もよく知られて居るのです、殊にこの十六夜日記を書くに至つた事柄が最も多く人の感動を惹くべきことで、私どもが啻に文學者として尊敬するに止まらず、これを普通一般の人として見て、尙ほ尊敬すべき價値を認めるのも主として其の事柄に因るのであります、私は阿佛尼をこゝに紹介するに當つて、その多くをこの日記によつて語らせて貰はうと思ふのです、さらば十六夜日記は奈何して作られたのでせうか、其の動機は何でしたらうか、諸子よ、同情に價すべき一場の物語は即ちそこに伏在して居るのであります、

二

そも〳〵鎌倉時代といふ時代、夫れも阿佛尼が生きて居た北條時賴及び時宗の時代は奈何な世の中であつたでせうか、先づ豫めこれを考究して置く必要があるのであります、言ふ迄もなく此の時代は幾多の戰亂の後を承けて、世は一般に疲弊して居た時であつて、かの承久の亂後、泰時、時賴の治を得て天

下は安穩であつたとは言ひますが、併し決して人々が枕を高くして眠られ得る時ではありませんのでした、北條氏の基礎、未だ充分に堅固なるを得たといふのでなくて動ともすれば京都あたりで反旗の飜る恐がないとも限らなかつたのです、所詮、表にこそは現はれねど、深き社會の水底には常に波動があつて、浪の上なる人々は其の實安き心のみでは居られませんでした、幸に泰時あり時賴あつて共に名相の器であつたから、天下は至つて無事に過ぎて時宗に及びましたが、さて又時宗の時にはかの元寇の役がありまして、之れには又幾何程國用を費した事でしたらう、併し北條氏に取つてはこの役の大捷が世に其覇權を握り得る上に非常な勢力を與へて、之を以て世の信賴を一に固からしめたのでありますけれども、世の中が一般に疲れて居たのです、北條氏が、極力節儉を主張して勵行した程に富の程度が極めて低く、且つ弱く、世には之を質素な時代として當時剛健なりし武士の生活を稱賞する人もありますが、

其實は彼れ等とても豪奢を競ひたかつたのは山々なのです、けれども悲哉奢侈を貪るべき餘裕が少しもなかつたので、故に彼れ等の質素は寧ろ自然の約束であつた事が多いのであります、で、一般に生活難を告げた中にも憐なのは京都在住の公卿達で、これは概してより多くの生活難を感じたものでありました、民部卿で大納言で藤原爲家とも言はるゝ人の家が、僅に和歌所の領邑たる播磨の國細川の莊と近江國小野の莊、



この二の小さき莊園が實に其の不動財産として、總べてが之れに賴るの外はなかつたといふ事實は、偶々以て當時の公卿生活の一般を推察するに足りやうと思ふ、近き昔、平家が起り、源氏が立ち、世は武家の勢力を占むる事となつて爾來國司は却つて主護に威張られ、領主は却つて地頭に幅を利かせられて、恰もこれ主客轉倒の憂き目を見るに至り、さては唯一と賴む莊園さへ時を過ぐし年を經る間にいつか他の犯す所と

なつて、終に沒了されるといふ始末であつた、心あるお公卿さんは幾何程にか王朝の昔が偲ばれた事でせう、阿佛尼在世の時代は大略右の如き世の有樣であつたのです、

三

阿佛尼の緣づける家は無論公卿であつて歌道の名家であります、夫爲家の父は即ち定家で定家の父は即ち又俊成です、實に三代相傳の名家、かの俊成といへば薩摩守平忠度が平氏一門の武運つきて、可惜西海に落ち行かなんとせし時、一夜窃に其の門を叩いて、殊勝にも己が百首の歌の卷を奉りし逸事に於いて、世に有名な五條三位俊成卿、勅を承りて千載和歌集を選進した大家であります、定家といふは其の後を繼いで新古今集、新勅選集の撰者として將軍實朝の師範として、將た小倉百人一首の撰者として世に有名の歌人、且つ位二位に叙せられた貴族である、で、其の名譽あり、勢望ある門閥の家を繼いで、よく其の家名を保持し得たのが、大納言爲家であります、阿佛尼僅に從五位下佐渡守の家に生れて、而かも一朝撰ばれて此の名門の妻となれる、蓋し無上の榮譽であつたでせう、爲家世を去つて不幸二人の遺兒を養育するの薄命に接するに及び、身命を賭してこれに力を致せる所以、決して偶然ではないのであります、

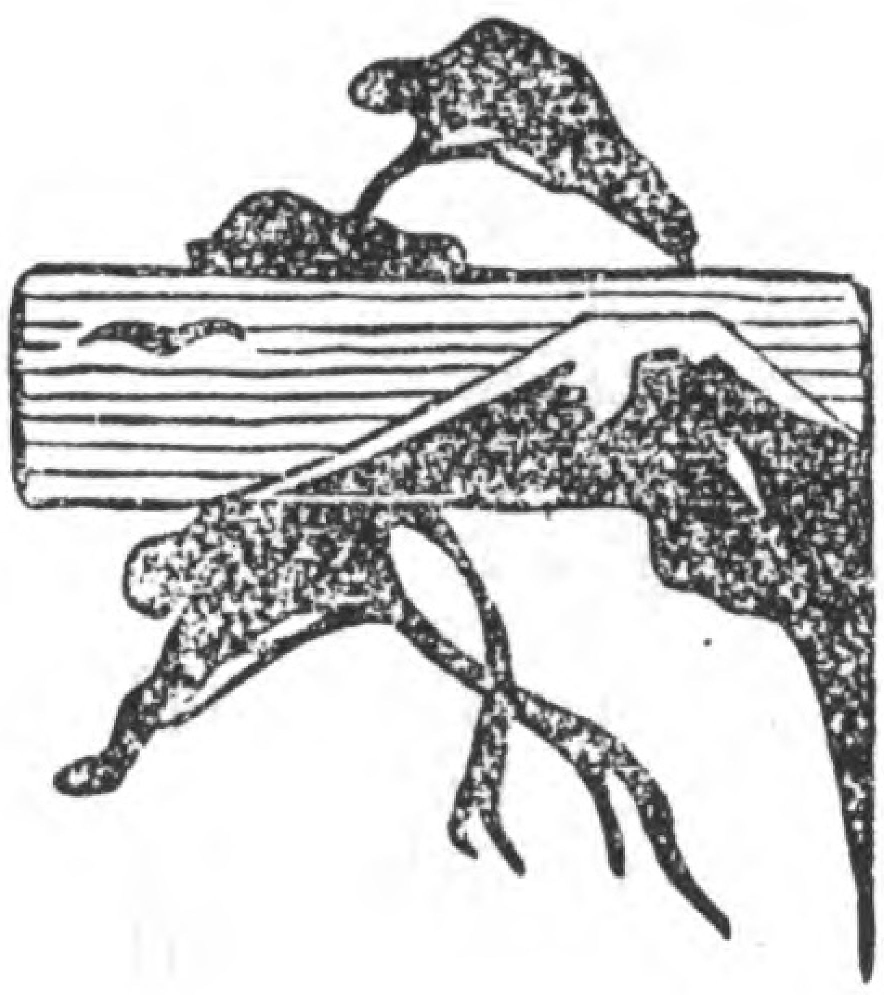
四

阿佛尼は爲家の後妻であつたのです、即ち我が生んだ爲相、爲守の外に先妻の子で爲氏、爲敎といふ二人があつたのです、十六夜日記の著述の遠き動機は既に之れに胚胎して居るのです、前に言つた通り爲家の領邑は播磨の細川と近江の小野と、此の二ケ所であつたのですが、元來細川の莊は嘗て爲氏に讓つたものなのでした、然るに爲氏といふ人が何か道ならぬ事をして、不幸を招いた爲めに俄に取り還して了つた、改めて阿佛尼の生んだ爲相に讓ることにしたのでした、乃ち父死後の爲相は之れに賴つて生活する幸運を有したのです、で其の約束は爲家の死

ぬ時に「道を助けよ、子をはぐゝめ後の世をとへ」といつて、證文として阿佛尼の手に渡されたのでありました、爲氏といふ人は後に二條家と稱して同じく歌道の名家となり、永く榮ゆるに至りましたが、公平に當時を觀察すれば聊か氣の毒なので、折角父から讓られたものを俄に取り還されて了つたので、夫れに就いては種々な困難を感じたことゝ思はれます、爲氏は爲家の死後、爲相にはどうしても讓らないで、依然その細川の地を領して居たのです、實にこの一事が、端なくも阿佛尼の凛乎たる天性を驅つて、秋霜烈日の如き志を奮ひ起さしめた緣由になつたのであります、

その頃の世の中が痛く疲弊して居たことは前に述べた通りで、一廉の公卿であつても「我こそは貴族で候」のと高をくゝつて生活の問題外に超然として居ることは出來ないのです、今力と賴む夫爲家に逝かれて「百千の歌の古反故ども」と二人の幼兒を抱へた阿佛尼は、凡べての責任をかよわき一身に負はねばならぬ仕儀となつたのに、搗て加へて第一に賴るべき大切の領地を、いかに一族の者とはいへ、他に收められて了つて、己れ領する所のものがなくては、奈何して立つて行かれませう、若しさうなれば自然どこかに身を寄せねばならぬと言ふものでせう、於玆、領地問題は直接に其の生活上に多大の關係を持つて來たのです、加ふるに我が子に對する愛の熱は更に其の度を加へて、今や不憫さと行く末の心もとなさを覺えす阿佛尼は、當に起つてこれが回復を計り兒等が求安の道を立てねばならぬ運命に接したのであります、

（未完）



本誌持主としての所感

中川愛氷

今更のことではないが、月日の駒の足の疾きには驚ろかざるを得ない、明治二十四年の十一月、本誌の生れた時は、予はまだ丁年に達せざる書生時代であつたが、予は幼時より文字を綴ることを好み、天地の動出す危險の憂なき和歌を詠みなどした所より、斯道をたどる栞にとて、本誌第一號よりの讀者となり、知れる人にわが歌を借りて行かれたのだが、あやまつて入選した事もしば〳〵あつた、云はゞこの時より袖すり合ふ以上の因縁はあつたのであるが、後に本誌を編輯し、十八年後の今日に至りて、その持主になるなどゝは思ひも掛けぬことであつた、

男だてら本誌を愛讀したのは、當時專攻したる國文和歌を學ぶの助けにしたのであるが、所謂緣は異なものであつて、予は此當時大阪に在つたが、ある動機にて、茶道に遊び、また生花の法を學んだことがある、また上京して一種の俠氣より、三絃音樂を學び、其皷吹者となつた、其他女藝とも云ふべきものゝ三四科を研究して、茶道などは以ての外の事であるが利休流十六代の家元たるべく强いられ、三絃音樂なども所謂江戸生粹の淨瑠璃の、殆んど根絶とも云ふべきものを一二復興したのである、また一方には多年高等女學校或は各種の女藝學校などにも敎鞭を執つて、この間上下の階級を通じて、多くの婦人に接近する機會があつたのである、そこで婦人とは如何なるものであるかとの問題もはやく腦底に提出せられたのである、男子の目には兎角不思議に映すること多き婦人の心事も、いさゝか了解することを得るに至つたことを信ずる、

婦人は昔より之を形容するにも、菩薩の如しと云ひ、夜叉に似なりとも云ひ、或場合に於て尊びもし、畏

れもして、人間離れのした如く思はるゝ事がある、即ち婦人には婦人獨得の美點があると同時に、また婦人占有の弱點がある、而して家も國も、その美點によつて榮え、其弱點によつて亡ぶのである、實に世界の半分は婦人の領地であつて、婦人の力によつて、世界をパラダイスにすることも、また眞葛ヶ原にすることも出來るのである、即ち婦人美點の活動力、婦人弱點の瀰蔓力は非常の勢を有つて居るものであつて、これを手近き三四の家庭に試むるに於ても、婦人の美點が發揮せられて居る所は榮え、婦人の弱點が巾を利かして居る所は亡ぶことも證明し得らるゝ、予はいさゝかその美點と弱點とを心得て居る、茲に於て、其美點を利用することも、また敢て之を爲すに於ては、其弱點に乘ずることも知つて居らぬではない、併ながら予は婦人の美點を社會に利用して、世界の空氣を淸くしたいのである、この目的の幾億萬分の一をだに達することを得たならば、少からぬ働きであることを信じ、予が一生の事業として滿足すべきことゝ思ふのである、

そこで婦人の美點を發揮せしむるには、敎育の必要なることは論の無き話であるが、さて如何に敎育すべきか、また現時如何に敎育されつゝあるかといへば、女學校は幾つあつても、女學生の言葉をさへ善くせしむることが出來ない、其他は推して知るべきことで、また女子に讀ませる雜誌が幾つあつても、其の廣告のはしくれを見ても、すぐに現はるゝ女子墮落藥、誌面に於ても愚劣不德義なる衛生問答などを得々として掲げて居る、これでは女子の品性に就て、百萬遍理屈を並べた所で、何等の價値があるものではない、即ち多くは婦人の弱點に媚びて、却つて婦人の德を損ふ仕方である、されば不貞操の家元が建てた女學校にも生徒が通へば、墮落を導く婦人雜誌にも讀者が附く、否それでなければ繁昌しない、考へれば恐ろしい世の中である、

ある動機によつて女藝の數科を習得したる結果、女性の研究となり、婦人の味方となつて、その婦人の美

點を發揮せしめ、或る一部の空氣にても淸くしたきものと、去る三十五年の夏女子新聞といふ週刊雜誌を發刊した、後二年に至つて所謂收支償ふ丈の成功はしたのであるが、片々たる週刊雜誌位では、算盤を離れて目的に近くことが容易でない、四六四倍八頁位の誌面では、到底勢力を得る讀物とはならない、さればとてそれ以上の週刊雜誌を發行することは頗る至難のことである、同じ至難ならば一躍日刊にして見たいと思うて着手した△





△が、果して目ざましい歡迎を受けた、然るに資力に乏しきと事業に馴れざる悲しさ、小山ながらも二年以上築き上げたるものを忽ちに崩し、日刊女子新聞は僅かに五旬にして倒れたのである、去ながら如何にすれば日刊の女子新聞を出し得べきかは、研究し得られたことゝ信し、暫らく閑に就いて、或は女學書を著はし、或は本誌其他の婦人雜誌に卑見を述べなどして、時機の到來を待つたのである、なか〳〵に眞面目に仕事をすることの難かしいのに感じた、

さるほどに三十八年の夏本誌の讀者文藝の選評を托されたが、いたく驚いたのは、婦人たるべき投書家の、多くは書振のふしだらなる、用紙の如きも殆んど手あたり次第にて、淺ましき振舞目のあたり其人を見るが如く、所謂商賣氣を離れて云へば、短文などには不眞面目にて、これが婦人の作かと呆れるの外なきが多く、十八年の創刊當時に遡つて、選者たりし落合直文氏が『こたび送られたる歌文を見るに、手のあしきことおびたゞし、中には兩江崎君の如きいとめでたきもあれど、大方はよろしからず、いかに歌文はめでたかればとて、手のわろきはいみじう見おとりせらるゝものなり』と嘆ぜられて、江崎兩君の作を其選歌の初に掲載したことを記憶して居る、手はあしきも謹みて書きなば、奥床しうも見らるゝのであるが、多くはふしだらなのであつて、十餘年眞面目に筆を執りたる本誌に、猶この嘆聲を放たしめたのである、よつて予はその投書家中より、文字の巧拙はさておき、謹みて書きたる數氏を擧げて、他の人々に忠告したりしが、少しは改まりしやうに覺ゆるも、舊態のまゝあるが多く、選者に對する無禮云ふばかりなく、これにてはいかほど歌文をよくすればとて詮なき事である、故に予は以來この事に就ても嚴重にしたく思うて居る、些事のやうなれど、決して輕視すべき事でない、兎にも角にも眞面目を以て經緯せる本誌投書家にしてそれである、婦人の弱點に媚びて、賣れさへすればよしとする雜誌の讀者とは、如何なるものかと戰慄せざるを得ないのである、

つゞいて本誌を編輯することになつて、足掛四年多く雜誌の賣れる策を知つて、比較的賣れない雜誌を骨を折つて作つたのである、併し一の誌風とも云ふべきものが、少しく眞面目より變屈といふに傾くの嫌はないでもなかつた、であるからこの編輯者としては隨分人の知らぬ苦勞をしたのであつたが、大體の主義に於て、少しも枉げる事なくして今日に至つた、

かゝるほどに時節到來、積年計畫せる日刊女子新聞を發行すべく本誌の編輯を辭した、其の結果本誌は新なる記者によつて編輯さるべきことになつたので、この話の行掛りは、既に辭任したる予が、其の發行をも引受くる事になつた、即ち女子新聞の附帶事業として、また予の意志を遠慮なく發表し得らるゝことゝなりたれば、今後は多少面目を改める考である、果して改善し得らるゝか否かは自賛するも妙なれど、その自信に向つて進む覺悟である、

算盤と筆とはたま〳〵兩立しない事がある、去ながら予は筆を自由ならしめんが爲に、算盤をも執る身となつたのである、さればとて時に算盤に對して割の合はぬ仕事をもせねばならぬ、予が本誌の賣行に直接利害の關係を有つことになるや、直に誘惑が來た、何うしても衛生問答欄を置け、さもなければ賣れぬ、廣告者は來た、この墮落藥を吹聴せよ、成る程幾千の女袴が東京の質屋に流れゆく時代である、そんな事を掲げさへすれば、この廣告が却つて雜誌の賣れる方便にもなるでもあらう、即ち女子の美點を發揮するの難きに引かへて、女子の弱點に乘ずることの易さ、されど予は不義の榮華を貪らんが爲に雜誌を發行するのではない、雜誌が賣れさへすればよいとはさら〳〵思はぬ、

見渡せば世は自然主義に醉ひ、身一國の宰相たる貴きを以て、猶醜名を歌はるゝを耻ぢず、上の好む所、下流いよ〳〵濁りて、いまはしき出來事、毎日の新聞紙上に溢るゝ有樣であつて、僅かに其中間を流るゝ淸き水によつて、兎にも角にも風紀は維持されて居るのである、この時に於て、教育に鞭を執り筆を驅るもの大に其心せねばならぬは云ふまでもなき事である、然るに風紀を刷新する原動力ともなるべき婦人の弱點に乘じて、却つて社會に害毒を流さしむる如きは實に言語同斷の沙汰である、予は少くも婦人の美點を發揮するに力め、婦人の常識を養ひ、家庭を和樂に導き、社會の一小部分にても淸うすることを期して居る。



東京帝國大學講師 佐々木信綱先生選

初秋風

天

陸前桃生郡小野村　山形幸子

やみませる母をいたはる湯の宿の
あしたつめたき秋の初風

（評）やさしき女の情あふれて感ふかき歌

地

美濃關町　呉みせ子

片假名もまじりかきたる七夕の
短冊に吹く秋のはつ風

（評）幼き妹もましりて五色の短冊に歌かきけむ有様ぞうつくし着想奇拔

人

飛騨國高山町國分寺通　南みね子

あさぢふの露のほそ道ゆく傘の
行方に見ゆる初秋の風

（評）いひざまのすぐれたるをもて採る

秀逸

◎ 東京　倉重靜子

初秋の風身にしみてさもし火も
文よむ窓に親まれつゝ

◎ 北海道　山本しつ香子

きならしてまだほどもなき夏衣
ぬぐにはをしきはつ秋の風

◎ 神戸　小山波子

露ふかく虫の音きこゆ草むらに
涼しく吹きぬ初秋のかぜ

◎ 東京　佐々木壽子

心地よく詩集を胸に夢に入る
枕にわたる初あきの風

◎ 美濃　各務照子

子等か賣る花の露より秋風は
都大路にたちそめにけり



◎たそがれや垣に立てたる七夕の竹の葉に吹く秋のはつ風　相摸　藤原下枝子

◎母君は小雨ふり込む初秋の風をいとひて窓しめたまふ　千葉　益子操子

◎渡し場のうすもやはれて送る人ゆく人の袖秋風かなし　伯耆　錦織さち子

◎ゆるされぬをすのうちにも吹いりてこゝろうごかす秋のはつ風　東京　安達安子

◎星まつる少女の歌の影すみてともし火なびく秋のはつ風　伯耆　錦織千代子

◎ひれふりてわかれに泣きてたちつくす袖師が浦の秋のはつかぜ　伯耆　錦織よし子

◎磯寺の夕鐘低うひゞき來てそゞろ身にしむ秋のはつ風　美濃　平岡かん子

◎都より來にし人みな歸りゆきて須磨の浦さびし初秋の風　美濃　芳翠敏子

◎やうやくに膝くみそめし稚子に別れてかなし初秋の風　岐阜　目島美智子

◎女神のせて錦の車過ぐるこゝに花野をふきぬ初秋の風　美濃　傍島みゆき子

◎葛根とる少女の群のかへりゆきてふもと野さびし秋のはつ風　美濃　長濱顯子

◎何となく物のあはれはそふれどもいと心地よき秋のはつ風　兵庫　益子

◎たへかねし夏はいつしかすぎの月に明方さむし秋のはつ風　東京　西村直子

◎にしまどのすだれうごかす朝風に秋すゞしき初秋のそら　靜岡　中村志賀子

◎琴の音にかよへる庭の松風も秋のしらべとはやなりにけり　東京　原三幸子

◎氷賣りし峠の茶屋の釣しのぶくろ／＼廻るはつ秋の風　美濃　杉山藤枝子

◎
巡禮の親と娘とさびしげに
渡頭に立つや初秋の風　　横須賀　柏原美奈子

◎
初秋やいたつき癒えて心地よき
山の温泉宿のあかつきの風　　岩代　岸野常子

◎
わが病さく癒はてゝ温泉の山の
あしたよきかな初秋の風　　岩代　岸野せい子

◎
衣手のうすきはまたき覺えれど
哀れまづしる秋の夕かぜ　　岩代　岸野さよ子

◎
ふりそゝぐ雨にまじりて山桐の
一葉こぼるゝ秋のはつ風　　武藏　横田やな子

◎
昨日けふたもとのしめる秋風は
露をさそひて吹そめにけむ　　山口　村上操子

◎
我庵の松のしらべもけさよりは
いさゝ身にしむ初秋の風　　東京　青木たま子

◎
初袷まだ縫ひはてぬ怠りな
いさめて吹くか初秋の風　　美濃　松田時子

◎
初秋の風にみだりの髮吹かせ
月に汐くむ人うつくしき　　美濃　松田元子

◎
あきつしまめぐる汐が音高うして
今朝初秋の風吹き渡る　　美濃　松田菊子

◎
藻の花や灰ふきあらふ老僧の
み袖ふくなり秋のはつ風　　東京　平塚いと子

◎
夕日あびて大刀根下る眞白帆や
白帆にかろき初秋の風　　東京　平塚白百合子

◎
野も山も淋しき秋の色見えて
桐の葉さそふ風立ちにけり　　美濃　多田花子

◎
荻の葉にそゞや秋風立ちそめぬ
そゞろに戀し姉のおも影　　美濃　多田ことよ子

甲

○　埼玉　金子律子
殘暑さへ漸くさりて吹く風の涼しき庭に桐のひとひら

○　横須賀　小野ゆき子
うき秋のはや立そめて昨日けふ風の音さへ變りぬる哉

○　東京　倉重千惠子
鳴子ひく賤がつゝれの袖さむくいなばをわたる小田の秋風

○　北海道　佐藤央子
まごちかくさし入る月のすゞしさにまづしりそむる秋のゆふ風

○　神戸　足立あそ子
鹿の音もやがて聞くらむ春日野の野守が軒に秋のはつ風

○　神戸　足立ゑい子
今朝秋の立ちしをしろや難波江の芦の葉わくる風ぞ涼しき

○　東京　牧　千春子
秋來ぬと名はかりなれど我庭の桐の一葉は訪つれにけり

○　東京　田代良子
にはかにも涙もよほす此のゆふべ秋をしらする風の音かな

○　東京　小栗捨子
昨日まですゞしの袖に待わびし風も身にしむ秋のはつ空

○　東京　田代糸子
つれ〳〵とひとりはしゐに物思ふゆふべさびしきあきの初風

○　東京　佐々木かず子
昨日まで誰もすゞみしおはしまにおとづれ初めし秋の初風

○　和泉　福原萱子
花の夢まださめなくに夏すぎて一夜にかはる秋のはつ風

○　美濃　加藤愛子
故郷にそむきてこゝに十年の古ひし衣に初秋の風

○　東京　倉重千惠子
今朝はしも初秋風の身にしみてそゞろに戀しふるさとの母

○　東京　倉重茂子
そゞろにもはつ秋風の身にしみてふるさとの母の偲ばれにける

○　群馬　小野里鶴子
門の田の稲葉にかろく初秋の風は見えけり夕ぐれの窓

○　竹内敬子
病める母跡にのこして旅にゆくあしにつめたし秋の初風

○　在清國　宮成梓子
二つ三つ門田の稲のはしり穂にはつ秋風のうちそよぎつゝ

○　横須賀　渡邊比佐子
笠一つ行くや尾花の夕風に富士仰ぎつゝ初秋の路

○　秋田　長谷川薫子
月清き磯邊にひとりたゝづみてふと身にしめり初秋の風

○　越後　田中清子
あこがれし花に胡蝶の夢さめてこゝろも寒しはつ秋の風

○　長野　千村ちゑ子
母の背に負はれて眠る幼兒の夢吹きさますはつ秋の風

○　新潟　岩本芳子
秋風や柳づゝみを五六人唄おもしろう船ひきのぼる

○　名古屋　山根しげ子
これぞとて手にはとられぬ風なれど秋ぞすゞし秋は來ぬらん

○　岐阜　長濱由紗美子
山寺の庭の糸萩さきそめておくつきさびし秋のはつ風

○　岐阜　遠山よしの子
草花は皆一様にさゆらぎて武藏大原秋のはつ風

○　神戸　海野千鳥子
うす衣また更へやらぬ小山田の田子の裾吹く秋のはつ風

○　美濃　目島眞紗子
年からを語れる翁ひげしろし田の面すゞしき秋のはつ風

○　美濃　傍島小枝子
初秋の風そよ吹けば日まわりは我身にも似てうなだれにけり

○　岐阜　中村はな子
渡し場のさ霧の中に渡し呼ぶ聲を送れる秋のはつ風

○ 岐阜 中西よし子

文月や山居の乳母を訪れんさたごろあさぢふ秋風ぞふく

○ 東京 吉岡艶子

みそぎせしきのふの夏のせにかへてすゞしくわたる秋の初かぜ

○ 遠江 河合象子

きのふまですゞみなれにし松蔭はいかに吹くらむ秋のはつ風

○ 東京 釜子逸子

つばくらめいつか歸りて靜なる柳をわたる秋のはつ風

○ 近江 柏木濱子

たらちねの戀しさまさるきのふけふ秋風たちし旅の夕ぐれ

○ 岩代 岸野菊子

うらぶれの君さかたりし柳かげ青葉ながらに秋風の吹く

○ 武藏 横田秋子

桐の葉のおつるを見れば朝庭に西吹まじり秋の雨ふる

○ 松山 田村多豆子

おきそむる露もあれども人の身にうきをつたふる秋のはつ風

○ 播磨 有村紫芳子

朝がほの葉末の露も置添ひて今日より秋の初風ぞ吹く

○ 在清國 稲田つる子

國を出でゝ幾日重ぬる楫まくらはやたち初めし秋の風かも

○ 在清國 大塚八重子

露だにもおかぬ庭面の萩原をそよき立けり秋のはつ風

○ 兵庫 梶原京子

朝かほの垣ねに虫もなきいでゝ涼しく渡る秋のはつ風

○ 下野 井上倚子

君は今越路の空か初秋の風寒からん旅のころもで

○ 美濃 松田鈴子

二十年の苦學淋しき旅のやど涙に吹くかはつ秋の風

○ 美濃 松田春子

夏痩の君が淋しき頰を吹きほつれ毛なぶる秋のはつ風

○ 神戸 東天流惠子

難波江の秋は來にけり葦の穂のさびしくゆらぐ夕ぐれの風

○ 長野 志水あや子

よひ〳〵のすゞみの友も訪はずなりておさもさびしき秋の風吹く

○ 美濃 多田みの子

初秋の淺茅が原に風たちて靜かにゆるゝ物思ふ袖

○ 美濃 多田さゝ子

はつ秋の風吹きそめぬなつかしき亡姉したふ白萩のやど

○ 美濃 多田せい子

いつしかも色つきそめぬ葛かつら葉かげ靜かにはつ秋の風

○ 美濃 多田瑞枝子

ひぐらしの鳴く山蔭に風たちておく露ちりぬ秋のはじめに

○ 美濃 多田まさよ子

おく園の荻の葉かげに風ゆれて涼しさ見ゆる立秋のそら

○ 河内 竹内たれ子

むら雀羽音せわしく立ゆきてなる子に殘る秋のはつ風

○ 東京 堤いく子

きのふまであつさになれしひさりゐの小窓すゞしく秋の風吹く

乙

○ 兵庫 三宅久美子

いつしかに夏をもくれて今日よりは衣手冷たし秋のはつ風

○ 陸前 前田河千年子

初秋の風ぞ一入身に染みぬ吹くろ音の淋しかりせば

○ 磐城 木幡きよ子

萩の香に知らぬ昔も戀ふるまで今朝は身にしむ初秋の風

○　群馬　小野里佐久良子
初秋の風に香りをこもり居て戀しくもあり悲しくもあり

○　在新潟　浮洲德子
夕さればそよ吹く風も身にしみて秋來ぬるかと驚かれけり

○　伊豆　藤田秀子
さわやかにほころび初めし秋萩はいつ吹そめし風にあひしや

○　東京　中村千代子
蟬の音にあつさこらへてゆふべより涼しさおぼゆ初秋の風

○　神戸　富永久代子
夏の色深綠するもの皆を黄にかへんとや初秋の風

○　東京　石田たつ子
なく蟬の聲かすれてはもりを渡る風の音さへつれなかりけり

○　東京　石田りつ子
秋來しか野邊は千草におく露をちらさぬほどの風たちにけり

○　東京　石田柳子
夢の間に今年の秋のたちそめて風ぞ身にしむ頃となりぬる

○　岐阜　露木敏子
虫の音もまたかたなりの初秋の淺茅が原に風渡る見ゆ

○　神戸　今西操子
秋の色はまだ見わかれど淺茅原早や吹そむる風ぞ涼しき

○　西須磨　有村繁子
音さびぬみもすそ川やふく風にそこすみ渡る月ぞしつめる

○　近江　柚木音羽子
小山田の稻穗をたてゝ行く風の早や秋來ぬとしられける哉

○　横須賀　高橋つれ子
初秋の風吹きわたる小松原天津乙女の唄も聞えつ

○　兵庫　古東靜子
程ちかき友をさそひてうかれ出でしたもとにかろき初秋の風

○　兵庫　古東すみ子
つかさどる父がもとにも吹き立てよあつしと聞きしみんなみの島

○　在北京　辻野音羽子
ゆふべより秋の初風吹そめてまたるゝ物は虫のこゑかな

○　松山　上原のふ子
晝なかはあつさのこれど朝夕の風には秋はしるくなりけり

○　播磨　有村さみ子
何事も後れ勝なる我宿も秋のはつ風身にしみてしる

○　神奈川　服部八重子
朝風に匂ひこぼるゝ萩のうへの露おもげなる初秋の富士

○　美濃　松田雪子
あり〱と夕晴れ高き富士を蔽ふ霧吹きのぼる初秋の風

○　美濃　松田花子
夕の野にむれ眠る羊羣はなげせな毛吹くなりはつ秋の風

○　美濃　松田重子
初秋の風よろしきにうつら〱夢にむすびぬ夕花の栞

○　美濃　松田直子
初秋の風にちり込む桐の葉にわが名君が名書きて見る哉

○　美濃　松田君子
わが胸の冷かに吹きし初秋の風の音はある海の遠なり

○　美濃　松田信子
君をめでおもる男神が冷息に熱さますのか初秋の風

○　東京　平塚つゆ子
情うすき人ことにはきかすごさくつめたし秋のはつ風

○　陸前　前田河みさを子
朝な夕な吹來る風の音するは初秋來ぬるしるしなるらん

○　對馬　畑島郁子
桐の葉と共にも落つる涙かな秋たつ風の身に知られつゝ

○萩の葉にけさ聞き初めて秋きぬと音ぞ身にしむ秋のはつ風　神戸　竹野節子

○いさ遠き方なつかしも面しらぬ人なつかしもはつ秋の風　陸前　山形さち子

○めご萩の露の玉ちるそよ風に秋すゞしき初秋の野邊　美濃　多田よし子

○昨日まで暑さに戀ひし谷間風はや身にしむる今朝の初秋　廣島　平岡コセ子

月前雁

天　横須賀中里　藤原下枝

月清み更けてさまよふ甲板に
矢のごと過ぎぬかりがねの影

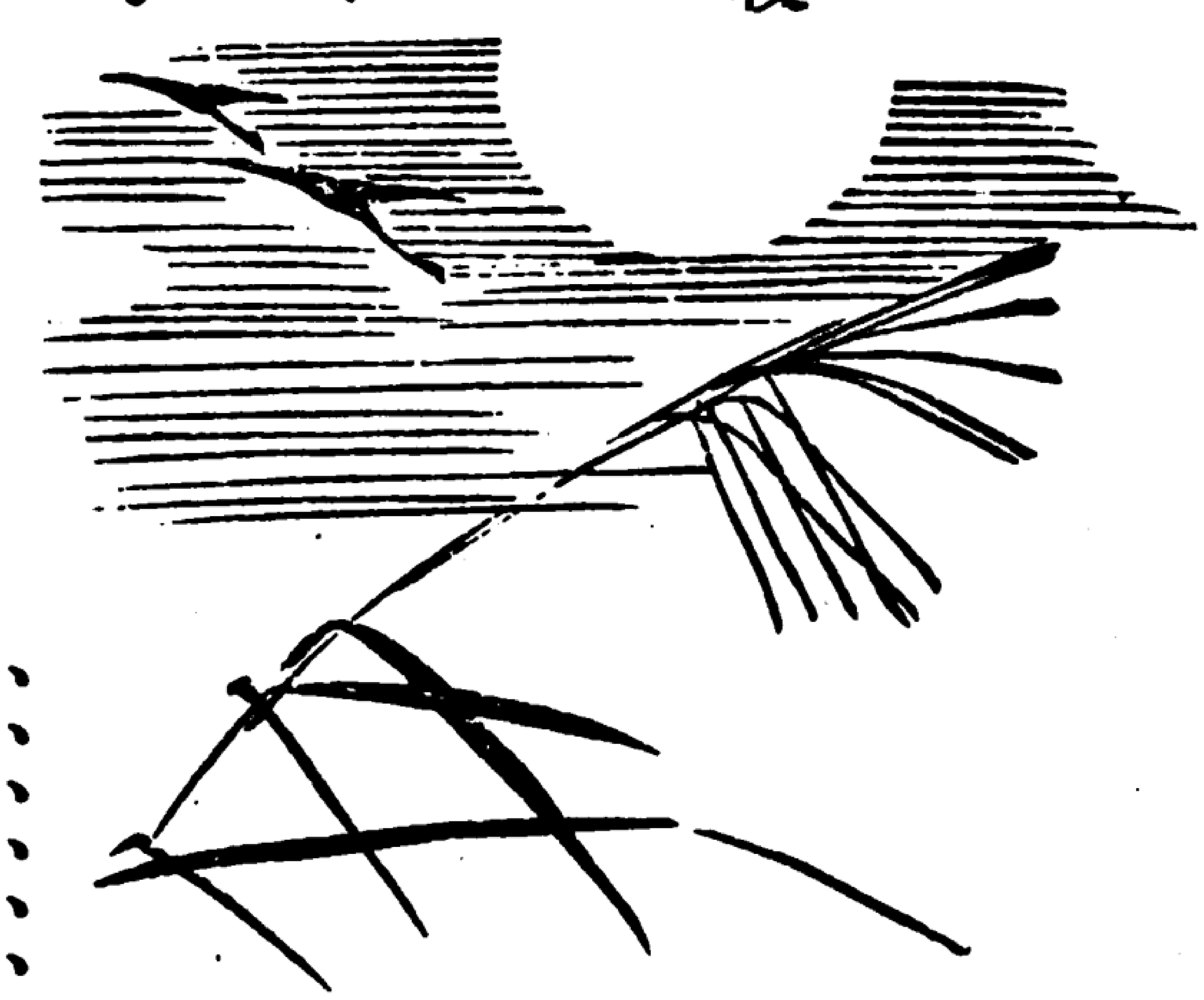
（評）月夜の航海の情景共にうかび影さいふ詞もはたらきたり秀逸の作

地　岩代　岸野つね子

雁なくや家まばらなる江の南
岸の小舟に月細うして

（評）畫のやうなるけしき有聲の畫さいひつべし

人　岩代　岸野登代子



苫舟のともし火ふけて月さむき
入江におつる雁の一つら

（評）一二の句夜泊の光景簡にして盡せり

秀逸

◎父母のしきりに戀し月のよに
なほも涙をさそふかりがね　埼玉　金子律子

◎風さむき蒲田の里に月おちて
さぶしき夜半をかり鳴渡る　新潟　岩本芳子

◎うきまゝに絲瓜枯れたる棚の下を
そゞろあるけば雁月になく　千葉　益子操子

◎小夜ふけぬ月影さえぬゆく雁の
ゆくへながめてわれ立つくす　秋田　長谷川薫子

◎遠き君おもひつゝけて月ふけぬ
雁はそなたにわが魂のせて　伯耆　錦織さち子

◎さらでだにものゝ悲しき月影に
思ひをそふる雁のこゑぐ　東京　石田柳子

◎病いえて月夜ありきに背さ二人
　礒路にきゝぬ初雁の聲
美濃　目島眞紗子

◎鳴渡る雁の一むれ見えずなりて
　月にすゞしき舟唄のふし
美濃　平岡かん子

◎夕月夜雁ゆく方を眺めては
　戀しさまさる故郷の里
岐阜　中村花子

◎近江路や旅に寢さめて窓おせば
　傾く月に雁なきわたる
岐阜　中西よし子

◎奥ふかき山のいほりに夜は更けて
　月になきゆく雁の一つら
神戸　海野千鳥子

◎故郷の母の便りを聞くゆふべ
　雁なきわたり月さしのぼる
飛騨　南　峯子

◎賤の男がさかまに似たる夕月に
　をしれかりがれわたりきにけり
東京　原三幸子

◎駒ごめて仰きても見る月影に
　かりなき渡るさよの中山
須磨　有村さみ子

◎水清き琵琶の湖船出して
　見あくる月に雁なき渡る
美濃　杉山藤枝子

◎ふる里の妹がたよりなくりかへし
　月に見てあれば雁なきてすぐ
兵庫　古東靜子

◎戈さりてうたひし人や今いづこ
　たゞ月ふけて雁低うなく
岩代　岸野せい子

◎雁の鳴く野中の岡の木の間より
　ほのめく月を見出つるかな
北京在留　辻野音羽子

◎雲間もる三日月くらき小山田の
　ほのへ寒けく雁なきわたる
埼玉　横田やな子

◎はりま灘月にさえ行く故郷の
　やまもさちかく雁のなきゆく
須磨　有村基子

◎秋來れば雁さへなくを月の宿
　わかれし君のなご歸り來ぬ
須磨　有村繁子

◎月ふけて行人たえし荒川の
　つゝみはるかに雁なきわたる
岩代　岸野常子

◎ 神戸 東天流惠

故郷の人なつかしみ雁の音の
そゞろに悲しき月の欄干

◎ 東京 平塚白百合子

遠ぎぬた枕にひゞく月の夜を
川つらわたる初かりの聲

◎ 在清國 福田つる子

苫はれて芦の花ちる磯かけに
月めで居れば雁なきわたる

◎ 美濃 多田さゝ子

こさゝはむ月の影ゆくかりがれに
君すむ島のちかきたよりを

◎ 美濃 多田せい子

窓の月に月影さえてはつかりの
聲ぞ身にしむ白萩の宿

◎ 美濃 多田花子

うち招く尾花が末に月ふけて
秋の田の面に落つるかりがれ

◎ 陸前 前田河千年子

此ゆふべ月にこゑして秋の田の
初かりがれの鳴わなる哉

◎ 對馬 畑島郁子

ひく琴のしらべ思はずみだれけり
月のみそらを雁わたりつゝ

◎ 東京 牧千春子

なく雁の遠音きゝつゝ棹さして
入江わたりし月の夜半かな

◎ 和泉 鶴原菫子

久方の天の眞中をゆく雁の
翅の風に月を見るかな

◎ 兵庫 三宅久美子

空さほく友よびつれて久方の
月に横切るかりがれの聲

◎ 埼玉 横田秋子

うすれゆく山路の杉の朝月夜
出て見たれば初雁のなく

甲

○ 名古屋 山根しけ子

月をよぎる雁の行へはしら眞弓我ふるさとの空かあらぬか

○ 伊豆 藤田秀子

月清き空なき渡るかりがれはいづこの里をすきて來にけむ

○ 在臺灣 浮洲德子

かりがれの聲する空をあふき見れば雲間をもるゝ秋の夜の月

○ 小野里佐久良子

すみ渡る月をかすめていつくこより二こゑ三こゑ初雁の聲

○ 橫須賀 渡邊比佐子

雁渡る月の土橋の村はづれ男の子笑へり女の子唄へり

○ 東京 安達安子

讀者文藝

○　東京　安達安子
てる月の下ゆく雁はうつしゑにこゑをそへたるこゝちこそすれ

○　東京　石田立子
くまなくも照る月かげにあこがれてかりも故郷はなれ來にけむ

○　東京　石田龍子
都なる友の便りをまつ夜半の月をかすめて雁わたるなり

○　美濃　傍島みゆき子
君を思ひ君を思ひてそゞろゆく磯みち月夜雁の遠なく

○　美濃　吳みせ子
いさな男の苫屋とざせるふけし夜の月になきゆく雁のひとむれ

○　岐阜　長濱關子
たのみなき身をばかこちつおばしまに月見てたてば雁なきすぎぬ

○　美濃　傍島小枝子
素足して干潟ありきに白帆見る磯の月夜を雁鳴わたる

○　岐阜　遠山よしの
君とつぐ稻穗そよげる繩手道月になきゆくかりの一つら

○　岐阜　長濱由佐美子
白帆船かよふ海原月さえてかりなきわたる須磨の浦かな

○　神戸　今西操子
さやかなる月に向ひて小琴ひく姬が館を雁なきわたる

○　東京　石田りつ子
月見ては故郷戀ふる折からに母のみこゑか雁なきわたる

○　東京　西村直子
とこ世いでし雁の雲路をてらすらむひかりみちたる秋の夜の月

○　遠江　中村志賀子
花の春わかれていにしかりがねも秋の月にはうかれきぬらむ

○　東京　益子逸子
月淸みいねず語らふさよ中にうれしくもきく初雁の聲

○　兵庫　古東すみ子
月は今故郷の山に入らんずるはるかの空を雁なきわたる

○　須磨　中根さくら子
須磨の浦繪筆にとれば窓ちかく月より落つるかりの一聲

○　美濃　杉山よしば子
水きよき琵琶湖の月を渚にぬきて堅田にいそぐ初雁の聲

○　近江　柚木音羽子
寢もやらで月に我身をかこつときあはれもとほく雁のなきゆく

○　橫須賀　柏原美奈子
雨雲に月はかくれて河下の古塔のあたり雁なきわたる

○　岩代　岸野菊子
近江の湖月かげ更けて三井寺の鐘の音さむく雁なき渡る

○　山口　村上操子
かなしげに鳴てとわたる雁がねや月のあはれを空にしるらむ

○　松山　田村多豆子
大空をわがものにしてゆく雁は心のまゝに月や見るらむ

○　在淸國　大塚八重子
月淸く友もやほしと待つ空を心ありげにわたるかりがね

○　兵庫　梶原京子
夢さめて窓おしひらき見渡せば月に鳴なり雁の一つら

○　神奈川　服部八重子
公達が馬乘習ふ月の夜の左近の馬場にかりがねの聲

○　東京　平塚つゆ子
月の夜を笛の音もして窓おせばかりおち來なり須磨の海原

○　美濃　多田まさ子
月ふけて田の面におつるかりがねの翅にゆれてつゆの玉ちる

○　神戸　足立ゑい子
山に入る月を惜みて見る空にひと列わたる初雁のこゑ

○ 神戸 足立あさ子
限りなき天の巷も迷ふらし月をかすめて渡るかりがね

○ 神戸 小山波子
さよふけてさやかに照らす月まつをかすめてさりぬ雁の一むれ

○ 陸前 前田河みさを子
かりがねの月にこゑして今ぞ來し倶こひしき故さとの友

○ 美濃 多田ささ子
久方の月の桂も影ふけて雲井をわたる雁の一つら

○ 東京 田代貞子
照る月にほの〴〵見えて過行くは雲路なかれて渡るかりがね

○ 東京 小栗すて子
さしのぼる限なき月にうかれけむ雲路にまよふ雁のひとつら

○ 北海道 佐藤央子
つま音のしらべすきゆく月影に雁なきわたる住吉の濱

○ 和泉 福原菫子
さやかなる月の下ゆくかりがねの數あらはれて秋風ぞ吹く

○ 横須賀 小野ゆき子
晴わたる月夜を雁の鳴つれて夜を日につきていつちゆくらん

乙

○ 長野 千村ちゑ子
雁の音にふと夢破れて窓おせば月澄む空を雁鳴わたる

○ 磐城 木幡きよ子
月しろく身に添ふ影も戀しきに都のそらに見ゆるかりがね

○ 小野里鶴子
澄み上る月をかすめてかりがねの雲井はるかに鳴わたりゆく

○ 河内 竹内敬子
數見えて落くる雁の聲すなり堅田の浦のあきの夜の月

○ 横濱 鈴木まつ子
身にしむる秋の月夜に初雁はなくねさやけく渡りきにけり

○ 越後 田中濟子
さびしみよ故郷しのぶ折しもあれ月の前ゆく雁のひとつら

○ 在清國 宮成梓子
水そこにさひゆく雁の一つらは月のうつせるかげにぞありける

○ 伯耆 錦織よし子
妹背づれ親子打つれ雁わたる千里さやけき十六夜の月

○ 東京 中村千代子
大空をわがもの顔に聲たかく月のかなたに雁のなきゆく

○ 東京 富永久代子
雁わたる朱雀大路や朗詠の男子にさえぬ月のひかりは

○ 熊本 矢野夏子
かげうすくあはれを添ふる雁が音はわれが心やしのびつるかな

○ 東京 石田たつ子
あしさはぐ澤邊さやかに照る月のかげにおりたつ雁のひとつら

○ 美濃 芳野千敏子
月と竿友としたしみ七とせの渡し守る身を訪ふ雁の聲

○ 岐阜 露木敏子
夕月夜牧の子吹ける笛の音の行衛に雁の鳴く音ぞ落ちぬ

○ 兵庫 益子
水の面に清くも澄める月影にむら雲ならで雁のかゝれる

○ 岐阜 目島美智子
武藏野の尾花に風の波ふきて富士見ゆる月夜雁なきわたる

○ 東京 吉岡龜子
あまの海に月のみふれやこぐならむからろと鳴きて雁のさわたる

○　遠江　河合粂子
よひの雨のはれしもしらぬさよ中の月を見よさや初雁の聲

○　須磨　有村よし子
さらぬだに淋しき旅の窓近く月に鳴行くかりの聲かな

○　須磨　有村紫芳子
旅ごろも聲をしるべの便りとも月にむれゆく雁かれの聲

○　須磨　有村繁子
言さはん人もなき夜の月かげに道しるべさやかりのむらゆく

○　近江　柚木濱子
月さえて心の塵を拂はんさ我立つ窓にかりの一むれ

○　横須賀　高橋つれ子
雨をばさして渡れるかりがれの影もかすかに有明の月

○　松山　上原のふ子
れてあかす人もあるよにかりかれは月の夜すから鳴わたるなり

○　須磨　中根滋子
こゝ國につまをなくして獨りれのれやもる月にかりの聲する

○　東京　青木たま子
雁がれの翅にかけし玉章のかすよむばかりすめる月かな

○　下野　井上倚子
草ふかき牧場のせさの月やごろ湯ふれにきゝぬ雁のひさ聲

○　美濃　松田昌子
霜白きかぶろさはれて見かへれば二十日の月に雁鳴わたる

○　長野　志水あや子
夜やふけし窓おしあけて見出せば二十日の月に雁なきわたる

○　美濃　松田きく子
月しばし堂のみ椽に友さなりて野末はろかに雁の音きく

○　美濃　松田文子
霊岡もる月の前ゆく雁がれの一つらかげよ冥府の給によき

○　東京　平塚いさ子
姥捨の物がたりやみて虫の音にかり落ちくなり十五夜のそら

○　美濃　多田ことよ子
不破の關もれみゆ月の影ふけて雲井をわたる初かりの聲

○　美濃　多田みの子
蒼空に傾く月の影ふけて田の面におつる初雁の聲

○　美濃　松田君子
武士の露だに悲しがりがれの月に冴えたる足柄の山

○　北海道　山本志津香子
水いれの花さへかへて友をまつ月夜にうれし初雁のこゑ

○　神戸　綿本ゑい子
さえ渡る月にれくらをうかれてや雲にまぎるゝ雁のこゑ〳〵

○　美濃　各務不美子
ちり雲も見えぬみそらにてる月のくまなすものは雁のひさつら

○　東京　田代糸子
よるふかく來る雁がれの聲さすは照る月ならで誰か知らまし

○　河内　竹内久子
なき渡る雁の數さへ見ゆるかなくまなく照らす十五夜の月

○　和泉　福原菫子
青原の亂るゝ草の中にすむ月をよぎりて雁鳴わたる

○　美濃　加藤愛子
秋戀し秋戀しさを江の月にさく語るらし初雁の聲

○　美濃　各務照子
常世より月の桂の姫よりに文やよすらむ雁鳴わたる

○　東京　倉重千惠子
すむ月に限はなせさも鳴渡る初かりがれは愛でられにけり

○　東京　堤いく子
背にれむる稚兒さまさしさ月の夜のかりがれきけば昔戀しも



日本女子大學教授 文學士鹽井雨江先生選

天

あゝ平和！あゝ寂寞！

清國 鵜澤貞子

夕陽は今漸く沈んで、西の空は唯一面クリムズンの畵布の上に、藍色きはだつて濃き一刷毛は比叡山で、其の上に、乙女の頰のやうに染められた薄絹雲が、たゆたうてゐる。遠く開かれたる、總ての稻の頭は、夕燒に彩られて、堤の小松原も、弓張つた案山子も、自分までが、黄色の光をあびて、きらめいて居る。卒然として風が起つた、稻と稻とが互に色を爭ふやうに、さざめくと一道の光りが其の上に表はれたが、忽ち遠く消えてしまう。田は元の靜けさにかへる。低く飛んできた鳥が、羽根を一つきらめかせると、産神の森のあたりへ落ちたが、軈て一聲二聲なき出した。田の中から、ひよつこり牛が浮き出した。續いて、頰かむりの農夫が一人。牛の聲が低く低く、この靜かなる村落に響いて來る。「ああ平和だ」と自分はつぶやいた。この平和に對しながら、自分の胸は、なぜ安らかに靜まらないのであらうか？ 勿論、爭鬪の激甚な都に居た時のやうに、たえず襲はれるやうな不安の念は、自然に對して知らず知らず消磨し去つたが、それと同時に、この胸の底に、一箇の塊が出きて、それがたへ難き響きをなし初めた。此頃に至つて益々烈しくなるばかり。響は或物を求める樣に、はた呼ぶやうに、すがるやうに、苦しく胸に響く。この時、自分は思はずも「おゝ神よ救ひ給へ」と叫ぶのである。

人生れて産聲高きも、
み空の星は常世きらめく。
人戀にほゝ笑むときも、

み空の星は常世きらめく。
人ねむる墳墓の下に、
み空の星は常世きらめく。

あゝ、動にあつて安んずるあたはず、靜に來つて然して此の恐ろしき響きをきいた自分は、この先どうしたらいゝのであらうか? 偉大なる空間(スペース)につながれるこの弱少なる人間!!と、思はず自分は草に伏した。

ふと氣が付くと、遙かうしろの菩提寺山の上に、宵の明星がまたゝいて、眠らんとする自然の底の方から、神祕(ミステリー)の夜の靄が、次第に廣がらうとするところ、西の空は全くコバルト色と變つて、一道の黒潮のやうな雲が、横にその上を流れてゐる。突として晩鐘の音が、北樓の方から響いてくると、同時南樓でつき出した鐘と空ではたと行き合うて、何にかの意味を語たりあつたかと思ふと、直ぐ寂寞に消えて了うた。

自分は限り知られぬ寂寥!・孤獨の胸の響に壓迫せられて我が家の方へたゞ直走つた。(近江は三上嶽のほとり南楼の里にありし頃をしのびて筆に上す)

(雨評) 筆が綺麗に文に何處となく清新なる氣の動いて見ゆるところがゆかしい。

地

おむかへ

埼玉 高橋とよ子

「明午後五時半栗橋着の筈、うれしいのね、うれしいのね……」

只これだけの短い文句の中に、無限のみ樂を見出して喜んだのも、昨日の夕べ、明日は是非お天氣にしてと願つたかひがあつて、底無く晴れた紺青の空に輕く浮んだ雲の一刷毛、青葉の末を吹くそよ風に、涼しさ送る蟬の聲々。

この春お別れして、出でゆく汽船の殘した煙に名殘を惜み、庭の櫻を獨り眺めて、言ひしらぬ涙を覺えたのも、夢のやう、もう四ケ月もたつて、利根川堤に涼みの浴衣の夜毎増しゆく今日此の頃、わが姉樣は、此の栗橋町へ歸省なさるんです。

葛飾の實りも早き早稻田の里の、趣味も深き古利根

川の岸邊に、教鞭をとつてゐなさる姉様は、此處數旬の暑中休暇に、取るものもとりあへず、この暑くいぶせき町の住居に、お歸りなさるといふのも、親や妹の居る所なら、暑くても汚くてもとの、温い愛情からなので、……世に只一人の姉様に別れて、いく度と無く袖をぬらした私は、もううれしくてうれしくて、心は波と躍つてゐるのです。

お歸りなさつたら、何して遊ばう。まづ第一何と言はうか、姉様と呼ばうか、御機嫌ようと言はうか」など考へながら、河岸の棧橋に立つた私は、見えぬ汽船を心に畫いて、もう江戸川はすぎたらう、權現堂川へ上つたかしら……

利根川を權現堂、赤堀の二流に分けた五霞村の島の其はづれ、岬のやうに川に突きだした尖端、青柳の影より、汽船の舳が現れた時の私の心は、何といはう。目の前に迫つてくる船を見ては、いきなり空翔ける鳥ともなつて、汽船に飛びうつても見たい。ガツタリと音がして、汽船が棧橋についた。一等室の戸口に立つたのは、確に姉様！

（雨評）文の起しが平凡でない。筆もよく整うて居るのみならず、眞情の浮びて見えて、ゆかしい文である。

人

『三つの星』

岩代　樹口雪子

日が暮れると、北の一隅に、北斗と隣り合つて輝き出す三つの星がある。夏の夜であつたなら、青田吹く涼風が、庭の梧桐を吹くと、疎らな枝の隙から、金の光が漏れて輝く。そのあざやかな品の高いのが、この星の特徴であらう。初夜過ぐる頃に、殊に美しく輝き出すのが、その側の星である。讀書の燈火がホンノリなつて、弟のいびきが高くなる頃には、欄干越しに見る茶畑の上に落ちて、白銀の色をして下界を瞰下してる。それが、冴えきつて哀愁の泌んだ冷かな色である。弟は、一つを雄星、一つを雌星、殘りの一つを子の星と名を付けた。妾は、底に紫の色を含んで何處となくなつかしい雌星の方が、好きである。黒ずんだ空を、一間も離れて燿いてゐるのは、一番大きい金剛星である。

『力が強くつて。目がキラ〳〵して……あゝ良な。僕の星だ……ね姉さん』つて弟が威張つた事もある。どんよりと曇つた雨空の晩も、この星ばかりは、數多の從者をつれて光つてゐる。

大空といふ永久の大海に、雲と呼ぶ大荒濤がある。夕凪が一と吹吹くと、逆卷く潮が空一面を掩うて、千鍊の鏡を曇らして終うが、此の三つの星丈は、睦しげに囁いてをるのです。

『姉さん、あの星、兄弟だわね……仲いゝの、いつでも一つ所に』。

妹が時々こんな事を云ふが、その時、妾は睦しい兄弟の幸福な事を聞かせるのです。

夜更けて或晩、丸窓に倚つて、限りも無い大空に見惚れてゐると、煙霧の晴れた向ふの山の際立つた角から、この三つの星が出ました。そして、赤い女星が云ふのには

『さあ、夜か更けたよ。人は眠つたよ。鐵の星は詩人のお庭に落ちて、私共を待つてお出で』。

ひらりと鐵の星は落ちて、妾の百合畑に入つた。いつの間にか、金剛力士に姿を變へて見守つてる。雲が下つて來ると、猩紅の寶石を冠に載いた天女が、銀の星をつれて、花の中に下つた。何所かの鷄が鳴いた。空は微かに白んで、東天が五色になる。然し世の中は未だ〳〵眠つて居る。女星は甲斐〳〵しく花畑を廻つて、小さな唇を蕾に押しあてながら、

『やさしい眼をお開き……さあ、人の心の汚れたのを覺すのだよ』……つて強く吸ふと、生きた樣に花がパッと開く。

『おゝ開いたね。これはお土産よ……』。

手をサッと振ると、霞のやうな露が、花に一つぱい。

『皆お起きよ……お土產を上げるから』かう言ひながら、まめやかに二つの星は花の中を往來した。

その時、鐵の星が『妬む日は昇れり……いざ』と叫ぶと夜は明け離れて、ブンと薫る百合畑には、露の白玉が花瓣每に光つて居る』。

(雨評) 想像が誠に優美で面白い。

秀逸

◎◎日記の一節　神奈川　服部八重子

二月一日。夕降つた淡雪は、今朝晴れて、一スイ、。

門には白魚の初聲を聞いた。

二月十五日。窓を明けると猿島が霞の帯を締めて水彩畫の樣。其の間から、白い帆かけ船が、二つで、鷗を追つて來る。風もない好い海原……。

三月一日。昨日あたりから、梅も笑ひ初めたが、今日また、小川の青柳が、春風に撫でられた。

三月十五日。凪日和で靜かな日、妹に連れられて、摘草に行つた。牛の聲がするので振り返ると、痒いのかしら、角を若草に摺つてゐる。そこは、白い蝶々が二ッで舞うてゐるのを見た。

四月一日。朝から雨が止まない。御師匠樣から歸り路、町外れの土橋へ來ると、向ふから赤蛇の目の二人連が見える、今しも羽風を切つて來た乙鳥が、其傘を覗いたので、赤い蹴出しがチラリト顏を出した。

四月十五日。朧月夜である。櫻の古木に蛙が雨を呼んでゐる。憎らしいので、追うてやると、今迄咲誇つてゐた花が、一度に散つてしまつた。ほしい晩。

（雨評）優美な趣味深き日記である。

◎◎義理ある兄上へ　長野縣　千村ちゑ子

妾だとて女ですもの、何んで貴方をお嫌ひ申さう。兄さん、貴方ほんとうに罪なお方ですのねえ。今夜は月夜よ、もう夏も暮れてゆくのです。滋々と虫が鳴いて、涼しい夜風が吹く椽先きに、妾は泣いてゐるさお思ひ遊ばせ。妾は死ぬ樣な心地でゐるのです。

貴方は、またあの六疊の電氣の下で、詩集を播いていらつしやるの、獨りいらつしやるのですから、誰れもお茶もあげるものもありますまいね、お察し申すわ、貴方はまた、なぜ一しよにゐてくれないと仰しやるでせう。ね、けれども、それはご無理よ。もしあのまゝ妾も一しよにゐたなら、きつと貴方の熱い思召しに妾は動かされるわ、さうなればさうでせう、貴方と許嫁の姉に、妾、どの顏がむけられませう。思ひ出しても慄とするわ。

早く妾は逃げ出してよかつたのよ、危い淵に莅んでゐたのでした。兄さん惱つて下さいますな、嘸ぞ憎いと思召でせうが、妾の心は貴方の千倍辛いのです。血を吐く思ひとは、このことでせうか。妾は心も消えそうなのよ。

どうぞ、兄さん、姉の夫として、此の哀れな妹を可愛がつて下さいな。今日のお手紙にある樣な、悲しいことは、もうどうぞ仰しやつて下さいますな、妾は心が狂ひさうですの。

愛せられて、其の愛をうけることの出來ない女は不幸です。一生温かい愛の光に浴することのもう出來ない境遇に、妾は立つてゆくのでせう、心は慘ましい程傷をうけたのですもの。

秋が近いのよ、月の光は空に美しう輝いて、虫の音が胸に泌みてくるのです。いつもの唱歌も心に浮ばず、寂しい泪は頰を傳うて、悲しい思ひは胸を突くやうに込みあげるのよ、女心は弱いものですの。兄さん怎ぞ許して下さいな、妾は逃げた魚ですから。

（雨評）其のあまつたるい詞が、偕に義理ある兄の心を狂はす助けに成るから、ちと一考せられたら、よからう。併し、筆も心もよくまはつて居る。

○◎濱たより　越後　水野やすゑ

懷かしきみち子樣よ、此の間の御手紙によれば、今は御勉强の最中かと存じ申し候。今日此頃の暑さは鄙さがる越の里さへ堪へかたきを、都の内はいかばかりか。それにつけても、御身大切に願ひ申し候。

私事夫は、八月一日より、例の學科につきて、講師として高濱てふ學校に參り候まゝ、土地の風景もすぐれ、空氣も淸ければとて、避暑ながら一緒に參り候。筆端涼風を生ずとやいふ好文字は、とてもに候へども、一片の淸涼劑ともならばうれしくと、一筆申上候。

七月三十一日朝まだき、高田を出發いたして候。直江津までは甚だ込み合ひ申し、更でだに快よからぬ車中の、夏の込み合ひこそ、ほと〳〵困じはて候。直江津にてすこしくすき申し候上に、海岸の白帆など、既に既に淸新の氣をおこして、うれしくおぼえて候。

犀潟のさつまいも畑桑の畑
　松原木原、我が汽車はゆく

潟町は眠たく相成候ところ、柿崎は夫に起されしところ、鉢崎は浪の音に目ざめし所に候

米山のトンネル七ツか八ツを越え候が、これまたおそろしく候。カタンカタンと鋭き音の、闇にひゞきて、石炭くさき臭の、鼻を撲つ程に、燈火靑白くう

ごきて、さながら魔の國にも入る心地。青海川は海水浴場、下る人一人もなく、物足らぬ思いした候折り、磯邊に赤き裙の人一人、うれしく候。鯨波にて、煙草の吸ひ方とひげの曲りかたの氣にくはぬ紳士が、下車いたし候。胸もすきすきいたし候。

柏崎よりは、四里人力車にて行き候ところ、汽車にゆられ俥にゆられ、生ぬるき風、焼けたる砂、まことに惨々の目にあひて、漸く目的の地につき申し候。宿といふは、土地の人の盡力にて、〇〇院とかいふ寺の一間。

後には千仭の山を負ひ、前には萬里の日本海を湛へ、松風室にひゞき、海波室にをどると申すべきか、うれしき所に候。幾度か夫にどんな所かといひて叱かられしを、どうかどうかと問はれて、微笑みて默し候。

風ふけば松の小琴に波鼓
　夏はすゞしき高濱の里

とかみきれにかきつけて、夫に示し候ところ、果は大笑に興し申し候。

日もくれかたに相成候、蚊帳は入らずとのこと、蚤は先程より二匹見つけて候、

只今は午後の七時半。

空は晴れ亘りて、星は沈みて、明日はまた、あひの風か立つべしとのことに候。

疲れ候まゝ、これにて。

明朝よりは、椎谷岬、觀音堂、不動瀧など、見巡りたるところどころ、御しらせ申べく候。　しも。

（雨評）筆の運びに馴れたところがある。

〇◎秋の女神　　東京　大崎ひさめ

私は、露さゝやかな秋の野のうす紫の香を吐いて居る桔梗の花を見ては、どうしても、

あれは秋の野を粧ふ女神である。

小さき可憐な神である！

と叫ばざるを得ないのでございます。

秋の日の神が、おごそかなる金色の征矢を、野にしづ〳〵とお送りなさいますとき、目醒むる模樣に、濃靑の翅を輝して、美しき息の香吐きつゝ翔る天使の如き蝴蝶がふわり〳〵と、山の霞が夢まくら、凝息の冷えの香にしみて咲いた、うす紫の桔梗の花の

上を、甘き蜜に醉うて、あちらの花、こちらの花と訪ひあるく樣は、恰も神の使が、神々のみことのりを待つかのやうでございます。

あゝ、桔梗は秋の神です。蝴蝶はその御使姫で、聲うるはしく夜々玉をまろばす鈴虫はその讃美者です。

彼のうす紫の香を吐いて居る限りは、秋の野は、ともに、平和と慰安と、啓示とに滿されて居ります。

（雨評）今一いき力を入れてほしい文である。

○◎故　山！　　麻布　倉重千恵子

今年も半過ぎ行きて、と片言交りの愛らしき唱歌聞ゆ、思ひ出多き年も、今は半は暮れて、人は檐下三尺の陰を爭そひ、犬は喘々として木陰に憩ふ頃とはなりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

松の葉の他に類なきにても、踏む土の他にまされるにてもなけれ共、何となう懷かしきは故鄕なり。學びの窓の閉されて、己がじゝ樂しき家庭に歸るべき時となりし折り、我れも亦其の數に洩れず、多年戀いし故山の涼風に浴び、懷かしき峰の靑雲を望んで、此の故山に入りてより、早や五十日余りを送りぬ。夜は猿の聲に明け、晝は靑葉吹く風に暮れて、訪ふ人もなき破家なれど、家の內は常に春風滿ちて最樂し。故鄕の人の質朴なるは昔も今も變りなく、朝は夙くより夜は遲くまで、倦まず、撓まず日毎〳〵同じ仕事に滿足し、夕べ星を踏んで鍬を肩にして歸るに笑を含み、數椀の麥飯に饑をたゝへ、數勺の濁酒に醉を買ひ、何等の慾なく、一點の邪氣なく、家內集ふて睦まじく語る。噫、羨しき哉、田園の生活。

黃昏時、今日も亦只獨り飄然として家を出でぬ。森の綠の覆ふ所、谷を越え、草を分けて、行き行けば母の奧都城あり。山も木も猶ほ往年の儘なるに、あはれ、母は既に此の世の人ならず。慈み深き御聲きかむ術なく、脊丈のびし我が身見まゐらせむ事も、嗚呼、今は只生死境を異にして、相泣かむのみ。風吹き來りて、小草そよ〳〵。耳を欹てゝ聞けば、あはれ、これも、悲愁の調、哀悼の曲。邊り小暗くなりて、塒に急ぐ鳥の聲淋しく、夕を告る鐘の聲、一ツ、二ツ……何を搖蕩ひてか、鐘を撞く手の鈍りたる。蔭いや深き綠葉は、母君が奧津城をや守らむ。

梢に集ふ小鳥は、母君が慰めの友とやならむ。この綠葉と小鳥とに御墓をまかせて、我れは亦も都に入らざる可からず。母を亡ひし悲しさにせめては御墓守にもと思いしかど、さしては母上が世を去りまさむ其の折りに、汝は女ながらも花山家の一粒種、身を健かに螢雪の苦を積みて、天晴家名をあげて、御父上の御心を安めよ。汝が身をたつるを見たきは山々なれど、死の神の手に握られたる我れなれば、是非なし。我れ逝きたればとて、魂は必ず此の家を守らむ。一時の悲しみの爲め、花山家の前途、汝の幸福を捨つる事なかれと。あゝ責任重き此の身、心にまかせず、其の折りすら滿身の勇を出して、あと見返りながらも、都に上りたるにあらずや。さるを、今亦此所にて搖蕩いなば、父上の御落膽、母上もさぞ不甲斐なき者よと思召さむ、今御墓を捨てゝ都に上る、これ我の務なれ。されば、行かむ。されど〳〵五十有余日の其の間、日毎御墓に泣きし、明日よりは誰れを友とし泣かむ、淋しき事よ！美しき物の命短かく、手向けしむも、朝日を待たで凋れむ。灑ぎし水も、夜半の露とや消え果てむ。あゝ、斯くして又來ん年の今日まで、御墓の塵を拂はざるか？鳥は既に塒に歸りて、遙か山の端に四日の月淋しう掛りて、とく〳〵家路に急げよと敎へ顔なる。徐に身を起して見れば、靜寂の氣は全く天地を包みて、荒れし坏土に我が影淡う映れり。野良の歸りにや、鈴音幽かに聞えて、節面白き馬子歌の餘韻、縷の如く……さらば歸らむ、父上待ちまさむと思へ共、つきぬ別れ、あかぬ名殘、淚は徒に頬につたはるを。

＊　＊　＊　＊　＊

明る日、蟬の聲、小川の清き流れを後にして、振り返り振り返りて、鎭守の杜の見えずなりしとき、土橋を渡り木橋を渡りて、遂に故山を去りぬ。故山を去りぬ。

（雨評）一篇の文にしては、少しくしまりのわるい心地がするのが遺憾である。

◎短　文　　東京　平塚白百合

今しがたの雷雨に、あぜみちは處々池が出來て、かわき切つた田の苗は、いかにもうれしさうに、いき〳〵としてゆらいでゐる。眞白の眞綿のやうな雲の

塊から、日はたゝへられた露といはず金色にてらしてゐる。雲も金の笹べりとつたやう、眞向ひにしてあせみちたざる私には、まぶしくつて堪へられないので、手紙を一寸かぶつた。

緋鼻緒の日より下駄は、草の中をよぎつた爲に、すこし足に近まつた、それを氣にしながら、だん〳〵町の方へとゆく。足音におどろいては、蛙が水にとびこむ音がしきりなので、常は單調なのにあいた私も、つひつりこまれて、しらず〳〵線路まで來た。

汽車は來さうもないのに、もう通行止と見えて、人が溜つてゐる。

羊羹色の服に草履といふいでたちは、小學校の先生であろう。ズボンにはねがあがつて、丁度アラレ小もんのやう。藥賣もゐる、車夫がさうわくそうにして、大きなあくびをした。

いかにもせいてゐる樣な婆さんが、身体をしつきりなしに振つてゐる。よほどいそぐと見えて、傍の土瓶さげた若い女に「ほんとに、此の樣な時は、切角いつても、醫師(せんせい)はお留守。やつと御出になると、あれが息を引とつたといふ處なんですよ。」「まがわるいつてねー」返事を聞くかきかぬうちに、多きな音たてゝ、地響も懐く、汽車は通り過ぎた。

あゝ、あれ乘つたら、毎日あくがれてゐる東京にゆかれるのだと、ヂーとあとを見送つてゐると、いつの間にかお婆さんも、皆町の方へと消えた。

（雨評）寫生の文を書く時にても、感情想像は充分に活かして筆をとらるべし。

◎日記の一節　　飛驒　南　みね子

青梅の、枝も折れよとばかり、實を結んで居る川添の一軒屋、あゝ、懷かしの故郷の家。

實に樂しき哉故郷の地、夢と流るゝいさゝ小川の掾に沿ひながら、露おく夏草をわけると、白、黄、赤、紫などの名も知れぬ草が、星を蒔いたやうに咲き匂うて居る。水は匂ひを受けて、香りてゆるう流れて。その昔し螢追ひにし、をちこちの田面には、田草とる男女の鄙歌の聲ゆるう聞こえて、見渡す限り山亦山の故郷の地は、何となく山靈を受けしが如く、緑り濃き山は、問へば答へなん思ひあり。去年の末つ方、情も熱き母君のみ文の末に、硫黄嶽噴火のよし記されしも、けふ東北に聳ゆる嶽を遠望すれば、文

にもましてすさまじきなり。鎭守の森を右に眺めて、流れに沿うて上つて行く程に、朽ちてぐら〳〵する橋をやつと渡つて、槇の生垣をぐるど廻らした、古風な家の柴折戸を叩くと、緣附かれし姉君の懷かしいみ顏が、温い愛の光りに輝いて、妾をそこに迎へるのであつた。

『今年は、美いちやんが暑中休暇に來ると、里のお母樣に聞いたで、待つて居たね。さあ、上がつて、ゆつくり遊んでゆくが、良いよ。』

何日も變らぬ、姉君の温きみ情に、妾は心に泣いた。義兄の君や、姉君の培ひし面影を殘して、廣い庭の隅に、南瓜は、紅ゐに熟して居る。花畑は夏菊の紅や白。愛らしの松葉牡丹の夕映に黄や緋、紅や白の花が今日を限りと、盛りを漲らして居る。花の愛に引かれて、思はずも明日咲く蕾を數ふれば、姉君は『ほゝ』と笑みて、

『美ちやんの無邪氣なこと』

『あら、いやな姉さん。』と顏は何となしに熱して、ぽつ〳〵と蒸熱かつた。

あゝ、思へば、妾の心淺果敢なりしよ。年一つ上なる姉君は、早や緣附給ひて、一家のからき風波にもまれ給ひつゝあるに、如何に温き父母の情とは云へ、未た學びの園に憧れ、からき浮世の風も知らず顏。思へば、妾の不幸此の上やなし、妾の遠く東の空にあれば、父君、母君、姉君の案じ給ふ事如何斗りなりしよ。小さき此の胸いたく亂れて、夕ぐれ告ぐるひぐらしの鳴く音と共に、此の身も泣きぬ。

（雨評）後段が今一いきの文である。

◎田舍　　大阪　龍子

田舍伯母から、是非暑中休みには來よ、都とちがうて、片山里もまた一入と、頻に招いて下さるので、同じ田舍といつても、梅の月が瀨、瀧の倉治などの名所でない限りは、見所もあるまいが、まあ行つて見やう位の思ひつきで、今日この地の人となつたのである。その質朴なまめやかなもてなしぶりはいはずも、四邊の景色もなか〳〵馬鹿には出來ない。鼻をつくやうな自分の家庭、父が誇りの松の盆栽隔垣の上らすほどな竹が三四本あるのには、比べものにならない。

裏は小高い山、柏と椎とが茂つてをる。これは祖先

何百年このかた鋸を入れたことのない森だとの事。見て來よとの伯母の指圖で、筧に山の水を取つてある流し元を裏へ出た。ほんに隨分すごいものだ。物の化が居るといふのは、こんな處かしらと思ふと、自分の衣ずれの音までが驚かれる……と、向ふて、蹄で土をかいてるやうな音がする、いよ〳〵胸の動機が高まつて、おそろしいやうな變な氣がする。けれども、また何物であるかその正体を見たくもあり、右見左見二足三足進むと、おそろしいもの〻姿はあらはれた。何の事はない、落葉を大きな籠に一杯入れて肩にしてをるこの家の老僕である。爺は早くも自分を見つけて、「ヘエ」と澁紙色した手拭のほ〻かむりを取りながら、頭をさげるばかり。ほんに田舍は簡單なものだと、都の御世辭八百なのに思ひくらべられて、有難いやうな心地がせられた。折から、老木の梢がざわ〳〵と音して、一陣の風は汗氣ある肌を、冷やかに拂ふ。ほんに別世界のやうなと、考へずに居られない。

（雨評）むざ〳〵と書きつけたらしいところに却つて味がある文といふべきか。

◎浮雲　　下野　井上倘子

夏とは云へど、晃下の里の夜は、吹きくる風に肌さむい。軒を流る〻清き小川の水の音に耳をすませば心も落ちついて、急にさびしい感が起る。友は袴の裾短かく、ラケット手に球の勢を氣にしたり、リボンの色の撰擇に忙しい頃から、妾の今日迄の經路、皆運命だあきらめやうと、強い心に成てはみるけれど、愚痴と弱いのは女のつれ、今のやうな冷たいつらい涙に再び袖をぬらしたくない、どうしたら切りぬくことが出來やうかと、折々底もない考へに沈んで、浮ぶ瀬もない、今の境遇に打ち勝つて居るこの勇氣忍耐、一生身に添へて忘れまい、この精神があつたなら、彼の由子さんのやうに、子のある中をさいて、人々に、父さんが急に年よられたの、頭が白く成たのといはれることはないと、望みもない將來に聊か光がある。今の境にあるのも、荒い世に處する經驗の幾分に、神がきたへて下さるのかしら。ほつと息をついてみ上ぐると、三日月は水がしたゝるかのやう、つく〳〵とみ入ると、何やら思に迫つて、月はみえず膝においた手の上に、冷たい涙が……。

◎親しき友の許に　　神戸　操子

表にきこゆる涼み人の妙なる笛の音、きく人の心ごゝろであらう。目を拭つて又もみ上ぐれば、オゝ月は浮雲にかくれて、光り小暗い。くも足ははやい。月はふたゝび妾を照した、あゝ、妾を蔽ふ浮雲は、いつされるとであらう。

庭の泉水湯の如く沸き、勇ましく泳ぐ錦魚も、底深き藻の下に、流石堪へ難き三伏の炎熱を避くるかの思ひせらるゝ折柄、おん許には、御

恙なうお凌ぎの由、二十八日出の御文にて承知致し、打喜び居り候、受許兼ての病氣も、日に増し快く相成り、こゝ半月ばかりは一日も勤め怠りし事なき程に候へば、决して御案じ下ざるましく候。匙加減は御存じの山岡先生にて、大分長らく通ひ居り候。いつも蔭にては、藪井の君よさ互によしなき事申合ひし君に候へ共、所謂藥が合ひしにや、思ひの外經過宜敷、いわしの頭も信心からさは此事さよろこび居り候。

當地の龜井先生も御達者にて、相變らず、學びの庭に敎への鞭さり居給へば、是又御安心なさるべく候、さて指屈なへば、早やいつしか三月てふ長き日數を重ね候ひしが、三ノ宮西プラットホームこそ、永久に思出の種に候へ。かたみに同胞なき身のかはらじさ固く契ひしを、あはれ世はつれなきを習ひの波風に吹き別けられて、涙さ共に四ツの袂はわかちしが、又何時を期してか暖かき手さり交はす事の望まるべき、思へば短夜の儚き夢にて候ひしよ、訪つる物は雁の玉章さ醒めて甲斐なき夢の浮橋のみ。左れざ、身はよし海山遠く隔つさも、同じ心を如何にすべき、さこしへに變るべからざるを如何にせん、殊に夏を送りし我はいかにして思出多き秋を迎ふべき。

来ん秋はいかにすごさん君まさぬ
　　雁啼く夜牛に露のあしたに

只頼むは慕はしき水莖の跡のみ。古き言の葉草に候へ共、郵便配達人の影さへ見れば、何はさて置きても、駈出てゝ、君が消息にもやさ、柴戸開く音を待つ有樣に候よ、越路の里にも同じ思ひに待ちわふる友のあるものを、いかで尊き筆に遠ざかるべきさ思ひつゝも、公けの勤め有る身はつい心にもなう一日二日さ罪打重ぬる事も少なからず候を、許させ給ひてよ。

過ぎにし卯月中旬、椨の花散り初むる彼の須磨寺境内に、共に行く春を惜みし頃は、まだ漸く二葉なりし籬の朝顔の、朝夕心せしかひありて、此の頃は朝な〳〵色さり〳〵に咲きかへて、すが〳〵しき心地せらるゝを、露ながら三ツ四ツ封じおき候。余り珍らしき形に候はねども、其大きさの少し他に勝れたるを、御覽下され度候。いつも同じ事申樣に候へ共、ゆめ祖母君樣への御孝養怠り給ひそ。且老先長からぬ方は、得て廿世紀式敎育は授け給わぬ物を、從て心に染まぬ事も有之るべく候へ共、何にまれ惡しかれさは思し斗らひ給ふまじければ、决して御背きなさるまじく候。

書き列れたき事中々つきず候へ共、今は早や三更近ければにや、いつしか門邊に納涼の人聲も絶えていさ靜かに成り候、今宵はこれにて筆擱き、余は又の便りに讓り申候。

藤子樣よりちさ誌上に雄飛なされては如何やさの御傳言に候、何所もおなじ金を鑠かす如き昨日けふ、御好みの海水浴も度を過ごさぬ樣、程々になさるべく候、かしこ。

◎山家の夏

長野　志水あや子

あまりに外の景色のうるはしければ、庭下駄のまゝ、あても無くさまよい出でつ。名も知らぬいさゝ小川の岸つたひ行けば、つゝじ菖蒲など、所々に咲きほこりたる中に、なんさやらん、やゝ亂れたる夏草のやさしうなびき合へるさま、わささならぬがいさ〳〵うれし。軒かたぶきし危うげなる、わら屋の背戸に出づれば、夕餉の桒にさてや、四ツ五ツ冷したる瓜の、筧の水にたゝかれて、朽ちかゝりし桶の

あちこちな漂ひありくさき、又なくなかし。

かへるさ、ふりよきつゝじ一枝手折りぬ、亡き母に手向けんとて。

◎筆の友に

越路　田中清子

朝なく〳〵に咲きほこりにし朝がほも。誠や露のひぬ間の命にて、花のすがたも何時しかにうつろひらめ、千年な祝ふ秋菊のまがきに匂ふも、今ふや明日とは相成候。おりに就おはたりや如何に過させ給ふらむ、御變りもおはさゞりしか。妾事も恙がなく今ふ歸鄕致して候。何はともあれ、かくもあれ、うれしく聞上ぐべき事の候よ。こ度こそ折よく上京せしな幸、何時ぞや御紹介下されし例の會に御かげさまにて無事入會致して參り候。

萬々事おくれ勝ちなる片山里に住む身の、誠嬉しさは小さき胸にあふれて候へども、かへり見すれば、淺學の身の、殊に知らせ給ふ家庭の事とて、靈の中は文机の前などよりもつかれず、只就床前短かきあしの間々おほつかなげの筆の運びに候へば、世の幸福な身にうけ給ひし御許さまとはことかわり、さてもかくても歩みははかなくて候。さりながら、精神一到何事か成らざらんの言の葉を賴りに、たゆまずうまず勉强せん覺悟致して候。とはいへ、望み路遠き學の旅にて候へば、素養なき身の、何時しか勞かれて、失望のこゑをや揚げん、常には花に名高き小野川の淸き流れも、時々吹き起りぬべき風につれ、波だちて渡るにかたき事もあらんが、修養なき薄弱の精神は忽ち恐怖して憶しやせんと、げに氣づかわしく候。其折?、オゝ其折よ、杖とも柱とももげに師とも母とも賴み參らするは、素養ある君の御腕に手を引かれ、君の優しき御心に慰められて、牛の歩みのそれならずも、やがては花の御園に御供し參らせ度き願ひにて候、君よ、みさほの君よ、幾久しく御見捨なう此上とも御敎導のほど神かけてねぎ上らし。

なほ花も實もある例の會の事、まなびやの事、はる變り果てにし友の身、都の樣など、聞え上げたき事はまだ〳〵つきず、富士がねよりも積り居候へども、細く短かき我筆は、澤のましらの水の月、心の丈もとゞきかね候まゝ、何れは後の日遠からず御館に參上致し、懷しき御身のあたりにもとく何も〳〵書きもらし參らせ候。

書きなはり候折から仰げば、空には廿日許りの月のいとも氣高う何時に變らず妾のへやにくまなく澄みて候。さながら君が淸き御心のそれのごと?

浮世な秋の露の床には、何なまつも涼しき聲にうたひ居候。かしこ。

◎雨（日記の一節）

在淸國　富成梓子

くもれる空は、いつしか雨となりて、しかも夕立ならで、いとしめやかなるに、さみだれの心地して、物淋し。いまや、此の地の梅雨期に入れるなるべし、夜はいとゞまして、軒の玉水音まさり、枕そばだてらるに遺愛寺の鐘ならで、草の庵の雨のよや、淸女が筆のしのばるる。

◎たれこめし友に無花果をおくるに添へて

河内　竹内敬子

わびしさ覺えし秋雨の漸う晴れ渡りしけふ、そゝろありき致しゝに、ふと納屋の後な見れば、よく熟りくちわれたる無花果の實、そは君も思ひあたり給ふべし、十年の昔ともに友染のたもと泥まみれにして植にし、かの一もとなれば、あまりのなつかしさに、みづからとり、

一かご御目にかけて候。樂しかりける幼遊びの頃おぼし出て給ひて、赤き心を味はせ給ひてよ。さても、廿日あまりやさしき美聲きゝ申さざるを、かよわき御身つゝがあらせ給ふにや、例の御心に淋しき秋をかこち給ふにや。されど〳〵、あまりに心をいため給ふな。しばし自然の有樣を見給へ。栗は朝風にゑみくつかへり、柿は夕日の影にゑひ見渡す田面は、こがれの波ゆたかに、賤か男のひな歌のだみ聲もおかしからずや。山には茸あり、岡にはもみぢ色づき、なり〳〵吹きくる風に誘れて、白菊の香いさゆかしく、秋程崇高の美を語る物は候はず君よ、必ず〳〵悲哀の目にて物見給ふな。

まゝならぬ世とうらみ給ふな、君が淸きやさしき御心の花は、よしや凡俗の目に見えずとも、美しきあまき香の、この無花菓のことさりて味ひ給ふ誠の友も侍れは、但に昔の快活なる君に立ちかへらせ給へ。ちりの世のことわざあれど、空に明星あり、地にかをる花もあり、なつかしき同窓の友の面白き雁の便りも文机につもり、物淋しげに待ちはべり居候日ごと、好ませ給ふ御歌のかず〳〵、さてはゆかしき御庭前の菊の香とめて求給へ、千秋の思にてまち參すになん。

◎思出　　渡良瀨鶴子

今宵は舊曆三五の月、空には一點の雲なく、今しも東の一きは高くそばだちたる峯の松が枝を、弓丈ばかり昇りし樣、實に美事なることよあたりはコウ〳〵さして、えも云はれぬ風情。この月を共にながめむと約せし友の早く來よかしと、まち居る折しも、三人の親友はおさつれぬ。たゞちに三階の見晴しよき姿が室へといざなひて、きよき月をながめ、かたりて後、いざ、琴の合奏せばやと、四人揃ひて、(峯の嵐か松風か……さしらべはじめたる折ふし、あはれ、何處の誰がすさびにやあらむ、曉々たる笛の音いさ〳〵ゆるう吹き來る風につれられて聞こえしぞ、また、一入のうれしさ、たのしさをおぼえし。

あゝ月に叢雲花に嵐とかく浮世のまゝならぬうらめしさよ。去年の今宵共に樂しく琴しらべつゝかたらひし友の一人は、其の後つひに此の世を去りてあらず、一人は遠方へ嫁ぎておはしまさず、あゝ今年の月も去年に變らぬうるはしさ、あゝ去年を思へば……アハレ、僅か二人にて奏でん心は無く友を偲び、こぞを思ひて、つひに空しく面白からぬこよひの月をすごすぞ、いともうたてし。

あゝ、うらめしき今年の十五夜よ。さやけく照らせど何となく哀れに見えてなむ。

本誌和歌兼題

佐々木信綱先生選

◎十月　野菊　◎十一月　古寺霜　◎十二月　冬月

入江爲守先生選

◎十月　萩　◎十一月　雨中落葉　◎十二月　遠山雪

◎兼題外の和歌　以後佐々木先生選評さるゝことゝなれり、〆切は前月十日、但し十月の兼題に限り十四日まで(八月號に兼題を掲載せざりし爲)

新體詩

日本女子大學教授 文學士鹽井雨江先生選

天

失題

美濃 加藤愛子

荒き潮路を行かんには、
さはれ餘りにか弱くて、
嘆たば、やがて煩悶の、
希望に躍る吾むねの、
驚かれぬる夜半の夢。
見えざる人の姿をば、
覺むれば圓窓に月冴て、
夜風ぁ絶えし遠のかた、
聞くだに胸の痛まるゝ、
あな故鄕の戀ひしさよ。

弱きさだめの女子なり。
身の幸なきを、朝夕に
惱みし、常に癒えざらん。
小さき顫き抑へては、
いぶきは深き扉を洩れて、
いたはる如く柔々し。
青葉を軋るさら〳〵の、
何の恨みに耐へ得でや、
八千八聲ほとゝぎす。
忘れぬながら忘れ居し

幼友ぞいまいづこ、
人や幻影吾やゆめ、
何時しか濕れぬ枕紙、
冷たき人の世に落ちて、
音にこそわびぬ却々に、
幾年旅にさすらひの、
山彦にだに聲もなし。
熱き情の吾なみだ、
消かさ獨り泣れては、
蜀魂おさらぬ怨みあり。

（雨評）詞優美にして且つ遒勁に、感深くひゞきたり。

地

落花流水

河内 竹内久子

深山の奥を流れ出で、
知らでや急ぐ谷川の
清くま白き花片に
物思ひげにうなだれて、
さばかり急ぎ流れゆく
しばしはこゝに止りて、
水は答へぬ今更に。
行方は何處わかねども、
こゝに憩ひて、汚れなき
寫さまほしく思へども、
えにしの糸の絶えざれば、

末は悲しき荒海と、
汀にさけり、百合の花、
宿れるつゆも、汚れなし。
下行く水にさへるやう、
君が行へは、何處ぞや。
わが花影に憩ひませ。
君、行末をとふなかれ。
神や導き給ふらん。
君が優しき姿をば、
流れゆく身をいかにせん。
またも清水さわき出て、

思ひくだくる谷川に、君が姿をうつさなん。
われは悲しき谷水の、止まるべくもあらぬ身よ。
さらば別れん、百合の君、さきくいませとこしへに。
いと淋しげにうなづきて、再び百合は語るやう、
「君つれなくも行きますか。まづきゝ給へわがねがひ。
君ゆきますか、また誰れとみ山の奥に語るべき。
人に知れずや谷陰に、たゞむなしくや萎れなん。
清きにほこる花の色、かりの契りは淺くとも、
影ぞうつれる谷川に、深き情のなくてやは。
君に別れて、たゞひとりあとに殘りて、徒らに
愁の終り見んよりは、ともに行かまじ、末長く
願ふは君が情をば。我をうかべて、とこゝはに
流れ給へ」と、白ゆりは行く水の上にちりにけり。
影をうつしゝ谷水は、靜に花を浮べつゝ、
もとのまゝなる囁きに、行方も知らず流れゆく。

（雨評）流暢誦すべし

人

農女の謠

用紙に姓名記入なきを以て其作者を逸す、作者は其姓名を通知せられたし

暑い〳〵といふてりや、暑い。何のつらかろ、父母故は、
私しや土の子、この夏土用を、
田圃の中で働いて、娘ざかりの十六七も、
燒けよがこげよが、厭やせぬ。取り入た時に實の重い。
稲穂を父に見せたなら、病んだ手足もうき立って、
かたほの笑も見られやう。死なれた母も、あの世から
よろこびやろと樂しんで、今日も獨りで田草とり。

（雨評）可憐愛すべし

秀逸

◎◎螢の歌

美濃　加藤房子

降りみ降らずみ五月雨の、樹々の若葉を濡らす時、
谿にほゝ笑む姫百合の、白き唇そさゆれて、
あゝ汝れこそは生れけめ。
瑠璃紺青の闇のうち、墨繪に淡き松原を、
小き和魂をごらせて、情の露に醉はんさて、
たゞる姿の清き哉。
高き星の座みな熔けて、魔の神萬象を包む時、
小き神の御使と、銀の冠をいたゞきて、
立たす姿の淸き哉。

（雨評）姫百合の白き唇そよゆれて蝶は生まれけむとは、詩的想像愛すべし

◎◎わかき戀　　大阪　木村春江

散る櫻、咲く櫻、櫻多き
蔭にして、目くはしに見てし君。
みだれては、露草の、露青き
細野道、行きずりに見えし君。
月清み、つくし琴調ぶれば、
垣根ごし朗々とひゞく笛。
小雪ふるなはて道、君とわれ、
またあひて、みかへれば、つと會ふ瞳。
君いはず、われいはず、胸に祕みむ、
紅は、やはか褪す、戀の花。

（雨評）工夫せられたる調なるべけれど、五の句のみにては流暢を欠く嫌ひあらずや。詞は美はしく整ひたり。

◎◎化粧室　　東京　大崎ひさめ子

白臘とけぬ銀の地に、黄金の花をちりばめて、
眼もこそ眩め、花死斯の、くゆるがごとき化粧室。
夢かの薄き桃色の、きら〱の幕のその影に、
現の姫が沈みたる、面こそうつれ立鏡。
惱める姿たれかしる、衣ずれさゆる二三歩の、
裾に折れたる孔雀草、たゞ淋しげに首たるゝ。

（雨評）一寸詩韻あり。

◎◎月影　　岩代　樹口ゆき子

玉とる國の湖に、光をなげて澄み昇る
高嶺の月を、さすらひの、昔忍びて仰ぎしか。
岸の尾花にまねかれて、河に棹さす秋の夜や、
取れども盡きぬ赤壁の、月ぞ、心に影うかぶ。
世の萬象のかくるゝ時、靜まりはてし天地に、
書の汚れの見えざれば、今はとのぼる月の舟。
濁りてよどむ古池の、浮藻に眠るぼうふらの
少き夢を照すとや、姿をやどす水の上。
あゝよの人のあたゝかき、情の塵にゐまんより、
冷たき月のこゝろをば、さはに我が世の友とせむ、
されど、空にも妬あり。今宵は月に雲見えて、
うたてや、清き乙女をも、暗の袂に包みはてしよ。

（雨評）今少しく感情をはたらかせ、且つ鍛煉せられなばはじめてめでたき月影となるべし。

◎◎夕暮　　美濃　多田さとる

ふかき悪のみ心に、
利慾に迷ふ人の子の、
つくりましゝか夕暮を。
紅ふかき彩雲の、
黄金の潮ながすとき、
みな麗しく消えはてゝ、
夕日の光もちからなく、
埘求むる百鳥の、
そこに美妙の調あり。
なく百鳥の聲たえて、
天のみそのに宵星の、
そこに無言の啓示あり。
人に慰籍を與ふべき、
暫しが程に消えうせて、
蔽はるゝこそはかなけれ。

白きみ衣しの天津かが、
夢の心をさますべく、

西のみ空に炎々と、
こゝろにそみし罪悪は、
そこに快樂の光あり。
彩雲淡く色あせて、
みどりの森にさわぐとき、

夕雲は山にかくれぬ、
涼しき眉をひらくとき、

かくも静けき夕暮も、
暗き悪魔の神の手に、

（雨評）よく整ひてきこゆたれど、感情の少しく足らざるををしむ。

◎◎題破鏡　　宮城　山形さち子

虫籠の紅房ふれて、　秋海棠少しゆらげば
こぼれ散る露の星、　錆竹の小椽に淸き。

さりげなく眉筆おきて、　か弱くも吐息をつけば、
かけ鏡薄く曇りて、　やつれ顔おぼろにうつる。
理りや昨夜は夜すがら、　涙にぞ怨みあかしつゝ、
忘ればの宿世なりとは、　かねてより期しつるものを。
いたいけに少き口して、　やはらかき乳房ふくみて、
二十年の夢の昔の、　今更になごしたはるゝ。
白菫香りあせなば、　ぬる蝶も涙落さむ、
夕暮を雲に泣くとも、　われ小女がこゝいはじな。
花もなき鄙の小草の、　摘まれしもはてや、何幸。
匂ひあるばらにしかじと、　忽ちに野に捨てられぬ。
ふと見れは小萩かくれに、　羽折れし蝶のむくろよ。
秋風のはてを思へば、　あゝ、これや我が身の最期。
人しれずむくろ収めん　爪箱に思ひ封せば、
さびしろの今宵の月に、　その琴の調みたれん。

（雨評）詞に詩趣あり。末段の一節少しく評者には解し難きををしむ。

◎◎深山の溪流　　河内　竹内敬子

ほそき調を、谷あひの　静けき空に殘しつゝ、
流れ〳〵ていくかへり、　いはほにむせび岸に泣く。
ふかき思ひに溢しては、　早瀬とくだけ、瀧とおち、

遠き望と流れては、　林にまよひ、野べに呼ぶ。
春は櫻の花をうけ、　秋は紅葉の色うつす。
とはの調を歌ひゆく　谷の流をすくひみよ。
そこに盡きせぬ憂あり、　そこに乾かぬ涙あり。
しづかにきかは永劫の　神のみこえも宿るらむ。
朝ふる雨は音もほそく、　夜半吹く風は波さわく。
あゝ奥山の旦くれに、　誰かきくらむ水の聲。

（雨評）今一入の歌に候ふ。

◎故郷の影　飛驒　南　美禰子

異郷にあつて忘るこさ　能はざりける故里の
影をのぞみしそが時は、　足の痛みも忘るかな。
けしき涼しき宮川の　前にしめたる臥牛山、
左に見ゆる日枝社の　宮居のみ影、いや高し。
懐かしき里の小川や、　ぬるめる水に、妹と我れ
裳裾かゝげて、摘みためし、　草を洗ひし所なり。
流れも清き里川の、　浪に綾織る青柳の
糸にそよふく涼風に　螢追ひにし夕戀し。
秋や淋しき夕ぐれに、　東の空に憧がれて、
情の父母に迫りては、　學びの旅をかこちけり。
雪丈餘の我が里の　世をばつくゞゝ厭ひては
指折り數へ、來る春の　旅路を待ちし所なり
雪は消え果て、花咲きて、　花また散りて、紅葉して、
十年を旅に過し身の、　今日故里に着きにけり。
山、川、昔にかはらねど、　戀し父君母君の
身はいつしかに年ふりて、　復た若かへるすべもなし。
昔を思ひ今を佗び、　み空を仰ぐそが時に、
弦月寒う山の端に　傾きそめて、雁ぞ鳴く。

（雨評）今少しく鍛煉の足りぬををしむ。

〇新体詩　東京　平塚白百合

草の香いきれ、風死して、　砂路きらめくひる下り、
稻田の末につらなりて、　雲の峰たつ砂川の、
淺瀨を裸形の童らは、　すくひあみして無心げに、
かなたこなたさ追ひまはる。
さらはれまじのわか鮎は、　腹白う見せて砂にれて、
あみの間くゞる身のかろさ。
堤の上をはしる子は、　手にてに銀露玉さ散る、
鮎二三尾をかでし子の、　色より枝につきさして、
くろ雲ひろごる川上に、　小走り姿あいらしう、
青葉の村へさ影消えぬ。

（雨評）捉り來たれる問題は面白けれど、發表の工夫まだ鍛錬を欠くものあり。

〇自生郷　長野　志水あや子

山と水とにかこまれし、
十月に余る小村あり。
春は芝生のうめ椿、
まふや胡蝶の羽根かろく、
秋は林のつたもみぢ、
實のる稻田も三里半。
もすそぬらして乙女子が、
田植のそでに吹く風や、
黄金の波にひざうめて、
稲かる賤がだみ聲に、
平和の神のひそみ居て、
とはの自由をさけぶかな。
かくも自然の關に居て
さかえ夢見ぬ里人か
清き心の貧しや。
あはれ、もだゆる人々よ。
たのしからずや、かゝる世も、
塵の彼方にありと知れ。

（雨評）意はよくきこえたれど、なほ辭句の工夫を要す。

○清水　東京　青木たま

「名知らぬ花の千よろづは、
風にそよめき、ほのかにも
薫り咲ぬる草むらに、
天の童かしろかねの
鈴ふるらしきものゝ音に、
草わけ見れば、眞清水の
溢れ涌ぬるひゞきなり」

「溢れし水は、花の香を
ほのかにこめて、さら／＼と、
貴き姫か瓔珞の
さくなる如きやさし音に、
花野まろびて流るれど、
やがては濁る波あけて、
荒磯の巌かむならめ。」

「あり、そか胸に溢れ涌き、
花を浮べて、行く方も
知らに清くも流れゆく
戀の泉も、未終に、
濁るはかなき性ならば、
濁らぬ今ぞ珍玉の
うたかたとこそ消えよかし。」

○臥牛山　北海道　清水きよ

黄葉つみしお城山、
野ばらかざしゝおしろあと、
むつみし山は老まつよ、
おさらば、さらば、いざさらば。

幸なきわれは、今こゝに、
おさらば告げて、幾百里、
波ぢはる／＼北にゆく、
身とはなりけり、アゝ悲し。
神のさだめと思へども、
思へばつらし、此の別れ、
みかへる山は朦朧と、
身を去るあめはふりいでぬ、
よし幾億里海山を、
北に南にへだつとも、
などかわすれん其の敎へ。
とはに忘れじ其の惠み。

○稚兒　美濃　加藤芳子

眠れる稚兒なぞそと泣きて、
父と母とは、あくる日の
米の代とて、今宵また
夜舟漕ぐ可く行きにしを。
星の影もる草の家に、
笑みつゝ眠る幼兒の
面わは、神に似たるかな。

○新体詩　大分　佐藤家子

羽ある神の御衣も
かくやとばかり思はるゝ
雲の色どり美くしき
夕の空を眺めつつ、
今し彼方の細野道、
紫紺のもやを縫ひ／＼て、
草かご負ひて辿り行く
若き乙女の二人連。
風にみだるる黒かみに、
かざせる花の白妙に、
赤のたすきの色はえて、
艶な姿を水かがみ、
しばし佇む野川の岸、
折りから、ふもとの牧場より
かすかにひびく笛の音に、
二人はほゝと打ゑみて、
目びさしかざしながめやる
遠き青葉の森がくれ、
野風呂の煙立のぼる
わら屋の方に、影消えぬ。



貴族院議員子爵
御歌所參候 入江爲守先生選

天

猫　東京府豊多摩郡西大久保村　原　三幸子

をさめ子の時にかはれし唐猫の
妻こふことはいつならひけむ

地

虫聲先秋　名古屋市東武平町　山根しげ子

よはいまだうき秋風もふかなくに
何をかなしと虫の鳴くらん

人

○　美濃國關本町　加藤清子

草むらの夕の露をよすがにて
秋まつ虫も鳴初にけり

佳調

月前納涼　東京　小林春子

川の邊の柳の影に月出でゝ
いとも涼しき夏の夕暮

蟬　神戸　今西操子

夏やまの夕陽なゝめにならの葉の
かげには蟬の聲しきりなり

晝顔　大阪　たつ子

八千草の花はしをるゝ日ざかりに
色なつかしく匂ふひる顔

夏花

水の上はすゞしかるらむ照る日にも
ゑみてかをれるかはほねの花

折にふれて　北海道　佐藤光子

螢見しその草むらにきのふけふ
秋ちかづきて鈴むしのなく

露　陸前　前田河千年子

草の葉に玉とおきつる朝露の
ちらぬ限りはいのちなりけり

雨後　東京　牧　千春
雨晴れし木立の上に行きかよふ
　雲をいろどる夕づく日かな

山家　東京　田代いと子
人とはぬ草の庵の明暮は
　心にかゝる雲だにもなし

雨中虫　後志　山本志津香
鳴虫の聲をきくまに夜はふけて
　さびしき庭に雨そゝぼふる

○　陸前　山形すみ子
夕日かげ水にうするゝ大利根の
　葦間をわたる舟唄の聲

甲

暑　東京　西村きよ子
かきさして墨するひまに筆のほのさやかたまりぬ夏の日ざかり

○　越後　岩本芳子
彈く爪の絶間なつゝく琴の音は小萩に虫のすだくなりけり

朝顔　美濃　長濱鬮子
破れ垣のつくろひしばしたゆたひぬこぼれ種よき朝がほの花

秋月　岐阜　目島美智子
母のなき少女の髮を結びやりて風呂に伴ふ秋の夜の月

水鶏　神戸　松野みさり
くひな鳴くいさゝ小川の水清み松に更けゆく月をうつして

○　岐阜　中村はな子
桐の葉のおつる音して庭もせに秋來にけりと露やおくらむ

秋庭　埼玉　横田やな子
千草咲く紅葉色づき鳴なきて夕日さひしき庭のあき風

蓮　岩代　岸野菊子
濁り江のにごりにしまぬ花蓮花のこゝろの高くあるかな

露　美濃　松田昌子
稲葉山松に昔のことゝへば風に露ちるものゝふの袖

五月雨　東京　平塚いさ子
わらじうつ翁の音の淋しくて五月雨くらし柿の花ちる

夏月　美濃　多田みの子
むら雨の晴れてさえある梢の葉に宿りてすゞし夏のよひ月

納涼　美濃　多田瑞枝子
宵月夜涼風そよぐみどり野にしばし忘れむひるの暑さを

海邊月　東京　石田りつ子
わたつみのよせてはかへす浪の上に影しづかなり望の夜の月

朝顔　對馬　畑島郁子
入りあへぬ月ひきさめてうつしよの夢をさゝやくあさ顔の花

五月雨　宮城　山形さち子
渡し呼ぶ聲も途絶えし川尻の主なき舟に五月雨のふる

朝顔　河内　竹内敬子
白つゆのひぬ間ばかりを命ともしらで咲けりあさがほの花

○　神戸　足立あさ子
露の間とかれて契りはあり明の月の下なるあさがほの花

納涼　美濃　多田はな子
むら雨の晴れてすゞしき宵月夜夏をよそなる夕涼みかな

朝顔　神戸　足立ゑい子
さしこめてまだ夜をあます柴の戸をあくればひらく朝がほの花

故戰場

ありし世のつはもの共の矢叫びか川中島の夜あらしの音　長野　志水あや子

夕顏

かやり火は細くゝゆりてませ垣に夕顏しろし小田の一つ家　東京　平塚つゆ子

○

雨はれて夕月しろき山の家の火さもし頃なひぐらしのなく　東京　平塚白百合子

○

池殿のさもしけしたる夕風にさもなはれくる月の涼しさ　岩代　岸野常子

水邊早苗

此ごろは田唄の聲もふし立て早苗さるなりささの中川　埼玉　横田秋子

○

あつかりしおなじ空さもおもほへずしのぶの露に月やどるころ　岩代　岸野さよ子

岩間の水

涼しさはまづぞしらるゝ山やかた岩間をくゞる水の音にも　東京　市川よし子

夕立

なるかみのなるかさ思ふほどもなくはげしくおつる夕立の雨　東京　白井春子

夏海

こゆるぎの磯邊つたひに來て見れば波にくだくる月の涼しさ　東京　白井みれ子

夏月

蚊やりたく烟いぶせき賤が家に夕涼しくやどるよひ月　美濃　多田まさ子

○

もろさもに花野の露にぬれつゝも遊びくらさむ月のぼるまで　東京　市川菱子

百合

夏草のしげみが中にたゞひさり床しく匂ふ白百合の花　伊豫　益田春子

乙

晝顏

馬洗ふ里の小川の石づたひほの〳〵咲ける晝がほの花　東京　平塚つゆ子

○

雨すぎし庭の草葉にやどる月葉末の露はまたましら玉　埼玉　金子律子

○

ふりかへり振返り見てゆく君の日傘かくれぬ松並木より　千葉　益子美佐尾子

初夏

琴おきて簾かゝぐる藤色のみ袖にかほる初夏の風　在清國　鵜澤貞子

○

草花の露にぬれたるころも手のかはかぬ程に吹けよ秋風　相摸　藤原下枝

○

美しき花の下にもくちなはの住むさは君も知りたまはずや　長野　千村ちゑ子

○

雨晴れて若葉にゆるゝ灯の露すゞしくもこゝちよき哉　横須賀　渡邊比佐子

○

先づ桐の一葉に秋は知られけりきのふにかはる今日の涼しさ　埼玉　金子清子

○

萩多き路ゆきなやむ少女子のたもさは露にぬれにける哉　長野　千村はや子

○

何ごさか思ひなやみておはすらん師のゑのごさき今宵の月に　田中清子

折にふれて

いつにてもかはらぬものはさやかなる月にむかひし涙なりけり　横濱　鈴木まつ子

七夕

かなしみにはたはうれひにまたゝける星も今宵はほゝ笑さ見め　茨城　今泉千鳥子

秋思

物おもふ袖にそいづる秋の色にあはれ鹿なく山の奥かな　磐城　木幡きよ子

海上眺

日もくれて松の上高く月ほそし金波銀波の音ゆるうして　水戸　金澤すゑ子

水すまし

河骨のこがれに匂ふ池のおも文字なかきゆく水すまし哉　札幌　清水きよ子

尼　東京　中村千代子

年わかき尼いさほしや墨染の袖につゝめる涙あるらむ　美濃　平岡かん子

草　花

きりくすさらふる子等の一群にふみしだかれし露草の花　岐阜　遠山よしの

潮

ゆふまぐれあみひく聲もたえはてゝしづかにきゝぬ磯の遠しほ　東京　石田たつ子

月前若竹

ふしのうちにひめやますらん若竹の月のみまへにこゝみがちなる　美濃　長濱ゆさみ子

○

かもめ飛ぶ伊豆の海原波なぎて竿もつ人のかげもうごかず　美濃　芳翠敏子

露

里の子が置忘れたる草鎌に露いさしげし朝月のかげ　美濃　傍島小枝子

泉

四五人の木こりのつれのござしきてわりごひらきぬ眞淸水のもさ　美濃　吳みせ子

露

葉末よりしたゝる露も流れいでゝ岩うつ海の淚さなるらん　美濃　目島眞紗子

秋　月

破れ船の古板よせて橋わたし小川にきよし初秋の月　東京　石田柳子

久しく訪れざりし薔師に

むらぎもの心にそめてわすれれごうつろひすぐる身こそかなしき　神戸　海野千鳥

折にふれて

小夜更けて月に鳴行くほさゝぎす越路の友の思はるゝかな　岐阜　中西よし子

○

夕立の晴れにしあさのくさむらにさぼすほたる火影ぞすゞしき　東京　吉岡龜子

夏海邊

濱やかた汐あみ人のかへり來てよるはにぎはふ大磯のささ　東京　西村直子

蓮

みごりなる廣生のひまに花見えてはちすにうつむしのばずの池　兵庫　古東靜子

星

玉かそもみ空の花か夜なくにやすき心をわれにあたへぬ

○

さまくのまぼろし消えてむらさきの雲なつかしきひむがしの空　大阪　木村春江

○

浮雲の一つなきまで晴れ渡り今宵の月の光くまなき　橫須賀　高橋つれ子

○

夕月夜庭の千草の花かげに置きてきゝ入る籠の虫かな　橫須賀　柏原美奈子

田家夕立

夕立の雨ふるにはのこぼれ麥ながれよりたる柿の木の下　美濃　杉山よしば

○

うたゝねの亂れし姿もはづかしやれやもる月は我なてらしぬ　須磨　有村さみ子

藥

百あまりはたちの上もこえて世にいくる藥のあるぞうれしき　松山　上原のぶ子

庵

花もみちたらへる庵は咲ちるをまつも惜むもわが物にして　松山　田村多豆子

煙

煙さへ一きはたかくいさほしを立てゝみくにゝ歸るみふれは　須磨　有村紫芳子

なつかしき友に

初秋の風またるれごなつかしの友さわかるゝ事のかなしき　兵庫　古東すみ子

○

山畑の新まめはやくかりあけてしつや大根のたねおろすらむ　在北京　辻野音羽子

聽　虫

市中にひさげる虫のこゑきけば秋の夜寒もちかづきぬらん　埼玉　橫田稻子

蜩

村さめの名殘さゝめて松風の木の間くにひぐらしのこゑ　神奈川　服部八重子

詠　史

雲井まできこえたりけり戈さりて月見る空に渡るかりがね　岩代　岸野せい子

○

香たきて琵琶の師を待つ秋の宵紅葉の庭は月まごかなり　在淸國　稲田つる子

梅雨晴

在淸國　大塚八重子

五月雨のやゝ晴れゆきぬいざけふは友やさひなむ衣やほしてむ

〇　大分　佐藤家子

むつまじき机ならべて姉妹文よむ窓に新月のかげ

夕立　兵庫　梶原京子

夕立はあしさく過ぎて露のみのなごり涼しき深草の里

海上雁　神戸　東てるゑ

ふるさとの山も見わかず船にしてまたなくつらき雁のこゑ

朝顏　美濃　松田春子

朝がほの花の四りんのほころびによき人まれきあるじ茶を汲む

露　美濃　松田きく子

咲けば散る花にもまして果敢なきは言の葉草の末におく露

露　美濃　松田信子

榮えつる寺の昔をなれもまたしのぶか庭の草のつゆけき

納涼　美濃　多田こさよ

夕涼みまだ戀しらぬ我妹のうすき袂にゆるゝそよ風

菊　神戸　小山波子

秋の日に木々の青葉かかるゝとも千代かけて咲けしら菊の花

〇　東京　田代貞子

まなび終へてみ空にたかくまふ鶴の千代のよはひを祝ふけふかな

露　美濃　松田君子

門しめて花はなしさぞ答へなん風にいさはず結べあさ露

朝露　美濃　松田文子

あけぼのゝ吹くさしゝれぬ朝風に露の朝がほゆるがぬはなし

〇　神戸　錦本ゑい子

はつせ山松のあらしの吹しをるこすゑの空に星ぞ見えける

時鳥　美濃　加藤菊子

有明の月の薄るゝ山の端の雲に別れて鳴くほとゝぎす

蚊遣火　美濃　八木銀子

宵の間のかひのけふりか山住の軒端わかるゝけさの薄雲

夏月　美濃　加藤しん子

吳竹の葉分の風のをりをりに洩れ出づる月の影の淋しさ

〇　美濃　加藤松子

此ゆふべ風は吹かねど秋來ぬとつげ野の柳散り初にけり

女郎花　橫須賀　小野ゆき子

女郎花一もと折りてなき妹が墓に涙の玉ぞちりける

月前陳思　和泉　福原萱子

てる月は來る秋ごとにすめるかな向ふわが身はおもがはりして

夕鹿　東京　倉重茂子

ゆふ暮をまちかね山にさを鹿は妻にこがれて鳴きいそぐらむ

朝顏　美濃　松田直子

朝顏の花の上ふく朝風にこの世の秋をみそめつるかな

投書家諸孃に

◎投書用紙　半紙に限る（卷紙などは平に御免）

◎同字體　歌と云はず、すべて漢字は階書に限る

◎同作者　其作物の傍に住所姓名を記載すると

右規定に違反するものは、入選するも賞品を呈せず、又其投稿を沒書にすることあるべし、



内藤鳴雪宗匠選

天

蚊帳の月貞女が寝顔てらしけり

美濃關本町　加藤愛子

地

打水や蘭より起る風二尺

横須賀入江町　服部八重子

人

涼み臺一人はほしき妹哉

埼玉縣北足立郡廠村　金子清子

稲妻や闇の中から渡し守
行水や松の葉越しの月浴びて
水の茶屋月下に瓜を洗ひけり
夕顔の窓に君まつ小唄かな
銀盤に入れて泳がす金魚哉
夏やせの我が身に重き髱かな
名月に芋喰ひ散らす女かな
秋立ちて佛の顔のつや〳〵し

東京　廣瀬ゆき子
在清國　眞壁縫子
相模　杉義さき子
東京　中内媧子

時鳥湖水にうつる近江の灯
子を呼びて立つ門口や渡り鳥
潮浴みや柳にかけし京衣
川多き郡に生れて螢狩
出來秋を誇り顔なる案山子哉
さぶはたゐ飛ばぬほたるや草の露
御書院の瀧の大幅秋立ちぬ
嫁入りの馬につけたる新酒かな
ぶら〳〵と提灯涼し君が軒
水打て加茂の夫子を請じけり
簪にひかる夜露や夏の月
抱籠や夢飄々と空に入る
虫賣りて月の古道戻りけり
托鉢の僧かへりゆく芒かな
文字を書く女孫もありて星祭り
虫干を誰そや窺ふ萍の庵
ちゝの實の父のうはさや夕涼
秋雨や宿直の夜の夢多き
調布の飛沫や月の晒哉
奈良坂をなき〳〵下る小鹿哉
曉や船見送れば雁の鳴く
萩さくや嬉しき朝の庭さうじ
汐あみに手を携ふる磯路かな
拜み去る鳥居の前や勝相撲
武藏野や富士が根かけて月の雁
朝がほや明日咲く花を咲かぬ花
朝戸出や行くては白き萩の露
白の菊の白きよりこそ香もゆかし
夕月の池にちるなり萩の花

東京　小柃山幾子
東京　中川榮子
横須賀　高橋つね子
東京　石田りつ子
陸前　山形幸子
横須賀　服部八重子
岩代　岸野常子
横須賀　齋藤松代子
横須賀　柏原美奈子
美濃　目島眞紗子
神戸　今西操子
龍子
岐阜　中西芳子
美濃　長濱關子
美濃　吳みせ子
美濃　傍島みゆき子
岐阜　目島美智子
美濃　芳翠敏子
美濃　傍島小枝子
岐阜　長濱ゆさみ子
岐阜　遠山よしの子
美濃　平岡かん子

讀者文藝

秋の畑瓜番小屋のうしろから　神戸　富永久代子
清流や河鹿なく夜の月孤なり　茨城　今泉千鳥子
あつき日や下葉はかれて種きうり　越後　岩木芳子
針折れし其夜を秋の聲聞きぬ　長野　千村ちゑ子
秋風の吹くや米研ぐそゝけ髮　長野　千村はや子
放ちやる使の鳩や雲の峯　横須賀　渡邊比佐子
塵据えぬ江戸紫や花菖蒲　相摸　藤原下枝子
踊見の芋畑かへる月夜かな　在清國　鵜澤貞子
夏川や橋渡り行く花電車　横須賀　小野ゆき子
秋風や浮世小路の夕日影　美濃　加藤愛子
すゞみつゝ昔を語る尉と姥
世に遠き尼が庵や土用干
立出て見れば我家の灯も涼し
夏神樂雨のよろこび奏すらん　美濃　加藤しん子
水を打つ眼すゞしき女かな
すゞしさの觀月橋に君と我
納涼臺なにを語りて夜の人
唄ひ女が素顔ぞ涼し夏の月
夏やせの心ちひさき男かな　美濃　加藤菊子
髭剃つて月下に涼む男哉
打水や我と親しきひきがへる　神戸　足立あさ子
子の爲めに螢飛はすや蚊帳の中　神戸　足立ゑい子
百合提げて山の翁の問はれけり　相摸　柚木とよ子
薫風や橋に見送る竹筏　兵庫　梶原京子
時鳥きく夜もありぬ旅枕　東京　町田登美子
名月や莚の葉そよぐ江の南　對馬　畑島郁子
衣すれの音に立ちけり今朝の秋　群馬　小野里さくら子
初旅や片山里の夕時ぐれ　東京　倉重千惠子
姉妹對のゆかたや夕すゞみ　群馬　小野里鶴子

定價

一册	前金	貳拾錢
三册	前金	五拾七錢
六册	前金	壹圓拾錢
拾貳册	前金	貳圓拾錢

全國郵送無料

廣告料　五號活字一行廿五字詰

	四半頁（十六行）	半頁（三十行）	一頁（六十行）
特等	……	二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替は四谷區霞ヶ岳町卅九番地中川愛ホ宛に願ひたし●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年八月廿八日印刷
明治四十一年九月一日發行

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
編輯兼發行人　中川良平

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷人　佐藤保太郎

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
發行所　女子新聞社

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　中屋商店活版部

消化新藥 タカヂアスターゼ

本品は毎瓶強度一定効力永久不變なりこれ高峯博士發見の新法式に從ふ特長なり

澱粉不消化の一般徵候

醫學博士谷口長雄氏曰く『……澱粉不消化に因する重なる徵候は胃の膨大、疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積便秘若くは下痢等にして甚く營養の障害を來す是等の疾病に對しタカヂアスターゼの頗る有効なるを信ず』（說明書は直接發賣元に要求せよ郵呈す）

東京市日本橋區南茅場町貳番地

三共合資會社

滋養新劑 グリコナール錠

本品は各地有名藥舖にあり本品の說明書は直接發賣元に要求せられよ無代郵呈す

醫學博士 **北里柴三郎**氏指導の下に化學者佐伯矩氏が牡蠣の滋養成分に就き研究創製せる本劑は滋養劑として肺病及一般病者虛弱者に必適なるのみならず之を用れば自から心臟を強め盜汗を制止し速かに體力を恢復して元氣を旺盛ならしむる特異の効顯あり

東京市日本橋區南茅場町貳番地

三共合資會社

西洋文房具は之を
歐米より直輸入し
最新流行品をして
最も廉價に販賣す

東京市銀座壹丁目九番地

中屋商店

電話新橋 三四一番
四八〇三番

振替貯金口座第一八一番



校長　小出新次郎先生

學監　小川直子刀自

●女生徒募集

速成科、高等女學科、尋常師範科、高等師範科、各科百名づゝ

校舍新築落成に付來る十月一日より教授開始す、入學志望の方は、九月二十日迄に申出でらるべし、

東京市青山穩田（オンデン）（穩田橋際）

女子高等裁縫學院

女鑑

明治四十一年九月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾八年第九號　第三種郵便物認可

西洋ばかりが文明では在りませんネ

川上貞奴談

巴里の人達が化粧を施る前に牛乳浴で皮膚の汚染を取り營養を與へるので色澤も宜く自然の美さが増しますが本邦では如彼仰山な事が出來ないので歸朝後は一寸不自由でしたのを或お客様から平尾さんの發賣の乳白化粧水レートを頂いたので用つて見ますと成程評判通り佛國の牛乳浴以上の效能があつて皮膚が美しく色澤が宜くなつて恰で生來の美しい顏のやうになり白粉の附着も好くなりますが原料が宜しいの白粉を塗けずとも薄化粧よりも美しくなる上に奥床しい香氣が高いので心地が好く反て巴里の牛乳浴よりも面倒がなくて效能が多う在い升から再後は巴里に居り升たときと同じに不自由がなく輕便だけ優て居ると喜んで居り升本邦にも如此進だ品が出來たかと思ひ升と西洋ばかりが文明では在りませんネ――ホホホ……

